



機巧少女は傷つかない  
海冬レイジ



ISBN978-4-8401-4336-3  
C0193 ¥580E



定価：本体580円(税別)  
メディアファクトリー



### 機巧少女は傷つかない7

機巧魔術——それは魔術回路を内蔵する自動人形と、人形使いにより用いられる魔術。「誤解を恐れずに言えば、この夏、夜々と雷真は一線を越えました」「嘘……よね？」そんなわけで夏が終わり、〈迷宮の〉魔王グリゼルダのもとでの修行で実力を上げた雷真は、ロキやフレイとともに順当に夜会を勝ち進んでいた。だが、シャルが何者かの呪いを受け、人形サイズに小さくなってしまおうという事件が起きる。一方で、学生総代にして、〈十三人〉の第三位、オルガ・サラディーンに迫られる雷真。そして、雷真とオルガの婚約が発表され——!? シンフォニック学園バトルアクション第7弾!

「本当にあのひとを  
はらませたん  
ですか!?!」  
雷真、  
ついに!?  
婚約  
MF文庫J

MF文庫J  
580



【著者】



海冬レイジ

DLAND / PSLC

トイとかプラモとか大好き！

いまだに新人気分が抜けないキャリア7年目の職業作家。  
札幌市在住。1月8日生まれ。A型。

【イラストレーター】

るろお

牛ムネ鍋が食べたい。

カバーイラスト／るろお 装丁／西沢繁ユウコ（ムシカコグラフィクス）



J

08-09



機巧少女は傷つかない

海冬レイジ

VI

580



9784840143363



1920193005806

ISBN978-4-8401-4336-3  
C0193 ¥580E

定価：本体580円(税別)

メディアファクトリー



## 機巧少女は傷つかない7

機巧魔術——それは魔術回路を内蔵する自動人形と、人形使いにより用いられる魔法。  
「誤解を恐れずに言えば、この夏、夜々と雷真は一線を超えました」「嘘……よね？」  
そんなわけで夏が終わり、〈迷宮の〉魔王グリゼルダのもとでの修行で実力を上げた  
雷真は、ロキやフレイとともに順当に夜会を勝ち進んでいた。だが、シャルが何者か  
の呪いを受け、人形サイズに小さくなってしまったという事件が起きる。一方で、学生  
総代にして、〈十三人〉の第三位、オルガ・サラディーンに迫られる雷真。そして、  
雷真とオルガの婚約が発表され——!? シンフォニック学園バトルアクション第7弾!

新装版

## J 海冬レイジの本

機巧少女は傷つかない1 Facing "Cannibal Candy"

[イラスト めろど]

機巧少女は傷つかない2 Facing "Sword Angel"

[イラスト めろど]

機巧少女は傷つかない3 Facing "Elf Speeder"

[イラスト めろど]

機巧少女は傷つかない4 Facing "Rosen Kavalier"

[イラスト めろど]

機巧少女は傷つかない4 Facing "Rosen Kavalier"

CD(Side-A)付き特装版

[イラスト めろど]

機巧少女は傷つかない5 Facing "King's Singer"

[イラスト めろど]

機巧少女は傷つかない6 Facing "Crimson Red"

[イラスト めろど]

機巧少女は傷つかない7 Facing "Genuin Legends"

[イラスト めろど]

マシンドール

# 機巧少女は傷つかない7

Facing "Genuin Legends"

海冬レイジ



機巧少女は傷つかない7

海冬レイジ

VI





Facing  
"Genuine  
Legends"

# 機巧少女は

## 傷の かない

Automata Maiden-Doll

海冬レイジ◎NO.001





「美味しいです！  
フレイさん、  
お料理上手ですね！」

「シャルロットさん、  
もう雷真のことは  
あきらめてください！」

「貴女こそあきらめたらう  
わ、私はあきらめると  
何も無いけどね！」



やっぱりシャルだ。ぐったりしている。

「何やってんだこいつは？」

急いで人工呼吸……

ってやりようがねえ……







「フオローを頼めるか、  
雪月花の人形？」  
「できるよ」

「俺に気づいていたか、剣帝」

「チャンスは一度よ」  
「う、わかった」

「<sup>マ</sup>グ<sup>ナ</sup>ス  
偉大なる者」……」



## contents

Prologue	天使が誘う	.....p44
Chapter 1	女王の寝室	.....p27
Chapter 2	おとぎ話の小妖精	.....p60
Chapter 3	魔女と騎士の盟約	.....p91
Chapter 4	敗者は誰か？	.....p125
Chapter 5	それぞれの理由	.....p157
Chapter 6	この再会に感謝する	.....p192
Chapter 7	君臨者たち	.....p250
Epilogue	悪魔が誘う	.....p271



マシンドール

# 機巧少女は傷つかない7

Facing "Genuin Legends"

海冬レイジ

MF文庫 

口絵・本文イラスト●るろお

編集●庄司智



# Prologue

天使が誘う



「誤解を恐れずに言えば、この夏、夜々と雷真は一線を超えました」

いつもの学生食堂で、黒髪が美しい自動人形——夜々は高らかに宣言した。

ヴァルブルギス王立機巧学院の昼休み。雷真は前期にそうしていたように、相棒の夜々、妖精のような美少女シャル、仔竜の姿のシグムントと同席していた。

夜々の問題発言は既におなじみなので、近くの学生たちも気に留めない。

「誤解を恐れないどころか、全力で誤解させようとしてるよな？」

とりあえず、雷真はおざなりなツツコミを入れた。夜々は無視して、

「いいですか、シャルロツトさん。夏は恋の季節です。夏が終われば、少女は女になるんです。ちよつと危険な火遊びが、ほろ苦い思い出を残すんです」

「またそんな嘘……よね、ライシン？」

バスタを巻く手を止めて、シャルは心配そうに訊いてくる。

「超えたは超えたが、おまえの考えてるようなもんじゃな——」

「な——シグムント——この不埒者を消し飛ばすわよ——」

「落ち着け、シャル。雷真が言っているのは魔術的な技量の話だ。魔術回路〈金剛力〉の

効果を術者にも及ぼせるようになった……という意味だろう」

「違います~~~~~雷真（らいまこと）と夜々（やや）は男女の一线を超えたんです~~~~~」

半べそをかきながら主張する夜々。普段通りの平和な光景だ。

と、そこへ――

「ほう？ 何やら楽しげだな」

背後から、聞き覚えのある声がかかる。

夜々が警戒の色を見せ、周囲の学生からは感嘆の息が漏れた。

おそるおそる振り向くと、案（あん）の定（じやうてい）、見知った女性が立っていた。

胸元を強調するフェミニンなドレスと、犬のしっぽのようなポニーテールが特徴的だ。

年齢は二十そこそこだが、夜々やシャルに比べると大人（おとな）の色気がある。

前回の夜会（やかい）を制した《迷宮（マユ）の》魔王（マウ）、グリゼルダ・ウエストン男爵（だんしやく）

例によって、腰には大ぶりの剣をぶら下げている。

初対面のシャルが目に見えて硬くなった。雷真もまた、シャルとはまったく違う理由で

身構えてしまう。

「……よう、お師匠さま」

「何だその顔は。怪物にでも出くわしたような顔をしておって」

「魔王（マウ）に比べりゃ怪物だって可愛いもんだよ。頼むから、こんなところで刃物を振り回さ



ないでくれよ?」

「誰にもものを言っている。私は教授だぞ? そんな無分別なことをするか」  
あんたのどこを逆さに振ったら、『分別』なんて言葉が出てくるんだよ?

——などと考えた瞬間、鋭い手刀が振り下ろされた。

眉間を割られそうになり、真剣白刃取りの要領で、とっさに受ける。

「いきなり何だ! 分別はどこ行った!」

「剣は抜いていない!」

「もうっ、やめてください!」

見かねた様子で夜々が割り込んできた。

「いくら魔王さまでも、雷真を傷つけることは夜々が許しません!」

「……この私に生意氣を言う。貴様、何様のつもりだ?」

「夜々は雷真の妻です!」

「ほう。ところでバカ弟子、貴様のカリキュラムのことだが——」

「流されました!」

泣き出す夜々。グリゼルダはうるさそうに手を振って、

「大人をなめるな。自動人形が使い手に好意を寄せるのはごく自然なこと、人形の嫁宣言など信じるに足らん。事実なら解体してやるだけだしな!」

「全力で子どもじゃねーか！ 大人おとなつてほど年上じゃねーしな！」

「人形相手に欲情するなど不潔！ 斬り落としてソテーにしてやる！」

「何をだー つか、結局とばっちりはおれにくるのか!?」

「皆、落ち着け。公共の場だぞ」

シグムントが首をもたげ、低い声で注意する。

叱ふつたわけではないが、相手を論ず威厳がある。これこそ大人の言動だ。グリゼルダも雷真かみまことも、そろって赤面した。

「む、この自動人形——まさか（魔剣）か？」

グリゼルダが目丸くする。さすが魔王は博識だ。観察眼も鋭い。

そこでようやく、グリゼルダはシャルの存在に気付いたようだ。

「では、その娘は、プリュー伯爵はてしやうの……」

「エドガー・プリューの娘、シャルロットです。ウエストン男爵おとこさま」

シャルは腰を浮かせ、硬いお辞儀をした。

「いや、へりくだる必要はない。生まれではそちらが上だ。……ふむ、噂には聞いていた

が、大した器だ。それに、おまえには（精霊使い）の素質があるようだ」

精霊使い。雷真はほんやり記憶をたどる。確か、古い魔術の講義で聞いた。

「子どもの頃、妖精を見ただろう？ あるいは、ユニコーンと会話をしたか？」

シャルはうつむいてしまった。思い当たるフシがあるらしい。だが、その件にはあまり触れたくないようだ。雷真は氣を利かせて、

「それより、何の用だよ。俺のカリキュラムがどうしたって？」

「そうだった——貴様、私のゼミに一つとして参加しないつもりか！」

グリゼルダは戦史の知識を買われ、史学部の教授に就任した。ただし、座学はほとんど受け持たず、白兵戦演習、野戦演習、実戦下の生存術などが専門だ。

「いや……俺は一応二回生だしな。専門的なのは気後れするっつーか」

「心配無用だ。私のゼミは全学年に参加資格がある」

「だが、希望者が殺到してんだろ？ 俺は申請で出遅れたし……」

「案ずるな。貴様のために、あらかじめ空きを作つてあるのだ♡」

「逆差別じゃねーかー フェアにやれー」

「黙れ——最高の教育は最高の素材にこそ施されるべきだ。それがひいては、魔術世界の発展に寄与することになる。学院生なら、誰もがわきままえていることだ」

叫んだわけではなかったが、その声は食堂中の者に届いたようだ。

皆が嘖みしめるような顔をする。ただ一人、雷真だけが大いに不服だった。

グリゼルダは申請用紙をテーブルに叩きつけ、

「とつととサインして、学生課窓口に提出しろ。——それからシャルロット、おまえの席

も用意する。その気があるなら、くるがいい」

「えつ、私も……ですか？」

「少し稽古をつけてやる。(魔剣)の主がそんなざまでは、竜王に無礼だ」

シャルは痛みをこらえるような顔をした。たぶん、悔しかったのだろう。

(……さすがは魔王つてところか。まったく容赦しねえな)

シャルは(暴竜)と恐れられ、(十三人)に列せられる実力者。シャルにあんな言い方ができる者は、教授の中にもそうはいない。

言うだけ言うと、グリゼルダはミニのスカートをひるがえし、去って行った。

ふと気がつくと、夜々が目にいっぱい涙を溜めていた。

雷真……あの女狐の授業を受ける気ですか……？」

「飯にも俺が師匠と呼ぶ人だぞ？ 女狐なんて、そんな言い方するな」

「うつつ、個人授業なら夏休みにさんざんやって、たっぷりしぼられたはずなのに……しぼり取られたはずなのに……」

「妙な言い方するな！ 魔術の修行しかしてないからな!?」

「ふん。カラダ目当てで履修を決めるなんて、最低の色魔野郎ね」

「おまえまで何だシャル!? つか俺、あいつの授業は受けねーぞ」

「何ですって……!? 魔王がじきじきに誘ってくれたのに!?」

「まあ……な。深謀遠慮しんぼうえんりょつてやつだ」

「そ、そう言えば貴方あなた、時間割どうなってるのよ？ もう決まってるの？」  
シャルは急に挙動不審になった。あさつての方をにらみ、頬ほを染める。

「ゆ、優等生の私が相談に乗ってあげてもいいわよ？ み、見せなさいよー」

「別にかまわねーが……」

夜々が不自然に瞳孔どうこうを開く横で、雷真は手帳を開き、時間割を見せた。

シャルは引つたくるように手帳を奪い、そして、目を丸くした。

「何よこれー すつかすかじゃないー」

その通り、雷真が予定しているのは必修科目だけだった。

「こんなんじゃ卒業できないわー 卒業証書がなくちゃ、マグナスに勝つても魔王ワイズマンになれないのよ？ ただでさえ中途編入で単位が足りてないのに——」

「いや、いいんだ、それで」

「……どういう意味？ だって貴方、補講は真面目まじめに受けてたわよね？」

「前期末の成績次第じゃ、放校の危険があったからな」

あまりに成績が悪い者は、途中で退学になってしまうのだ。

「だが、もうその心配はない。夜会やかいは期末試験の前に終わる」

後期日程は三月まで。だが、夜会やかいはあと一か月少々——年を越す前に終わる。

年を越す前に、マグナスとの決着はついているはずだ。

「俺の目的はあいつを殺すことだ。卒業証書はいらない」

「……それならなおのこと、ウェストン男爵のゼミには参加すべきじゃない？」

確かに、グリゼルダの授業は戦闘の役に立つかもしれない。

だが、その前につぶされる危険もある。

万全のコンデイションを整えておくのも、実戦では重要な要素だ。せつかく傷が癒えたのに、マグナスとやる前に満身創痍では、ますます勝利が遠くなる。

その後は大して会話も弾まず、何となく気まずいランチとなった。

それぞれの皿がカラになり、シグムントが前脚で顔を洗っていると――

ざわつと学生たちにどよめきが起こった。

見れば、きらびやかな女子学生がひとり、食堂の入り口に立っている。

目立つ。とにかく、目立つ少女だ。

まばゆい金髪。しゃんと伸びた背筋。高貴な顔立ち。いかにも貴族的な雰囲気はシャルに似ているが、シャルのようにツンケンしたところがない。そして、ある部分がシャルとは決定的に異なっている。

肩飾りのついた白い礼服は、夜会執行部（専用）のもの。

「あれは学生総代――（十三人）の第三位、オルガ・サラディーンだわ」

「言われてみれば、見覚えがある。エドマンド叛逆<sup>イデオウ</sup>のとき、巨大結界バリアトライアルの構築を指揮していた少女だ。」

「雷真<sup>ライシン</sup>、こっちにきます」

夜々の言葉通り、オルガは堂々とした足取りで、雷真の前にやってきた。立体的に盛り上がった胸をそらし、悠然と見下ろす。

「（下から二番目）というのは君だな？」

周囲の注目が一斉に集まった。雷真はやれやれという気分で、

「今日は千客万来<sup>せんきゃくばんらい</sup>だな。天下の学生総代さまが、劣等生の俺に何の用だ？」

「今夜、君と話がしたい。二人きりでな」

食堂は蜂<sup>はち</sup>の巣を突ついたような騒ぎになった。

「（金色のオルガ）じきじきのご指名だぞー」「学生総代から夜のお誘いかよ!?」「そんな

……オルガお姉さまーっ」

オルガは周囲の雑音など意にも介さず、言葉が続ける。

「夜会が終わってからでいい。どうせ長くはかかるまい？」

「いや……それは相手次第だろ」

「かからんよ。まあ、遅くなってもかまわないがね。ここを訪ねてきて欲しい」

テーブルの上にカードを置く。名刺のようだ。裏には地図が描かれている。

こちらの返事も待たず、優雅にきびすを返す。颯爽と遠ざかる背中に、男子学生はもちろん、女子学生までもが目を奪われていた。

わけがわからず、雷真は呆然と見送った。

「何だ、ありや……」

夜々がにゅつと顔を突き出し、潤んだ瞳で見上げてくる。

「雷真……夜々が嫌いですか？」

「またそれか。嫌いじゃないって言っただろ」

「ぐすつ……でも、将来的には嫌いになります……っ」

「ならないって」

「嘘です……」

「嘘じゃない」

「……夜々が女狐どもを皆殺しにしても？」

「何とんでもない条件つけてんだ！ やめろー」

「もうっ、いい加減に自覚してくださいー 雷真はああいうタイプに弱いんですー 出るところが必要以上に出ているタイプにー」

「……どうしてそこで私を見るのよ？」

いきなり陰悪になり、火花を散らすシヤルと夜々。雷真はとぼっちりを恐れ、そそくさ



と椅子を引いて、二人の少女から距離を取った。

グラスの水を喉に流し込みながら、考える。

学生総代が、俺に何の用だろう？

そう言えば以前、似たようなことがあった。

学院に着いて間もない頃、この食堂で風紀委主幹に声をかけられた。

——嫌な予感がある。そして、決定的な違和感も覚えていた。

「（下から二番目）」というのは君だな？」

オルガは確かにそう言った。その言葉が引つかかる。

そう——それは決定的に、オルガらしくない。

「シャルロットさん——もう雷真のことはあきらめてください——」

「貴女こそあきらめたら？ わ、私はあきらめるも何もないけどね——」

にらみ合う夜々とシャルに閉口しつつ、雷真はグラスの水をあおった。

同刻。ロキは理学部裏手の林で、精神統一の訓練を行っていた。

念動を駆使して自らの体を浮かせ、ヨガの行者のように（座）を組む。

相棒のケルビムは大剣の姿で、近くの樹にもたれかかっていた。光点のような双眸が、

ロキのやることをじっと見つめている。

ふと、ロキのこめかみがぴくりと動いた。

鋭い視線を走らせる。その途端、木と木のあいだを、白い影が横切った。ふわりと揺れたのは、白いワンピース――

「ソフィ――」

既に駆け出している。ケルビムが機械の天使に変形し、あわててロキを追いかけた。百メートルほど行ったところで、ロキは足を止め、あたりを見回した。気配を見失った。確かに今、懐かしい気配を感じたのだが。

いや――無論、幻覚だ。

わかっている。そんなはずはない。

あいつはもう死んだ。このオレが殺したんだ。

だが、こういうことだろう。なぜ今になって、あんなものを見た？

何かの予兆か。あるいは、第六感が何かを感じ取ったのか。

「――誰だ――」

背後に誰かの気配を感じ、ロキは二十メートルの距離を一時で詰めた。

エプロンドレスの少女が驚き、腰を抜かしてへたり込む。

見覚えのある顔だった。シャルの妹、アンリか。

「ロキ……さん？」

自分でも不思議なくらい、ロキは失望した。

ソフィアではない——そんなことは、初めからわかっていたのに。

「あの、どうかしたんですか……?」

「……何でもない」

背を向けたとき、がうつ、と犬の吠え声<sup>こゑ</sup>がした。

複数の息遣いが駆け寄ってくる。そちらを見ると、黒いオオカミ犬に横座りした、姉の姿があった。真珠のように白い髪、紅い瞳<sup>ひとまへ</sup>はロキと同じ色だ。

オオカミ犬のラビを含め、十三頭もの半機巧犬（ガラム）を引き連れている。

フレイはラビから降り、とことこと歩いてきて、責めるような目をした。

「う……ロキが、アンリを泣かしてる」

「なに——?」

ロキが振り向くと、アンリはあわてて涙をぬぐった。

「ち、違いますー あの、ちよつとびっくりして……っ」

顔にこそ出さなかったが、ロキは内心、狼狽<sup>うろたへ</sup>した。

何だ、これは? オレの責任……なのか?

「その……すまない。驚かせた……ようだ」

「あ、いえー 私こそ、弱虫でごめんなさいー」

アンリもうつむいてしまう。お互いに気恥ずかしい沈黙。死ぬほど居心地が悪い。空気を変えようと、ロキは珍しく気を回し、フレイに別の話を振った。

「どうしたんだ。ライシンに昼飯を届けに行つたんだろう？」

ラビの背中にくりつけられた、大きなバスケットを示す。フレイはたちまち悲しそうな顔になり、しょぼん、と肩を落とした。

「お昼、終わってた……。学食で済ませたって……」

「相変わらず、トロいな。あんたは」

「う……」しょぼん。

「そ、そこまで落ち込むな！ 悪いとは言つてない！」

「あ、フレイさん。だったら、わたしが一緒にいたでもいいですか？」

アンリにそう言われ、フレイは嬉しそうにバスケットを持ち上げた。

「うん、一緒に食べよう。ロキも。いいでしょう？」

「悪いが、オレは訓練に戻る——」

「う、だめー」

腕をつかんで、「にこ」と微笑む。

「ね？」

……調子が狂う。だが、姉の笑顔には弱いのだ。

三人と十三頭で昼食をとる。ガルムには朝晩、専用に調合した固形飼料が与えられるが、おこぼれにあずかろうと、十三頭が（お座り）して待機していた。

「美味しいですー フレイさん、お料理上手ですねー」

サンドイッチを手に、アンリが歓声をあげる。ロキは半信半疑で、サンドイッチを口に放り込んだ。

……普通だ。普通に美味しい。少しは学習したのか、毒物混入はやめたようだ。

姉の手料理を食べる——そんな普通のこと、少し前まで、想像もできなかった。

心が安らぐのを感じる。らしくない。でも、悪くないとも思う。

穏やかな時間。その優しさを楽しむ一方で、ロキの心の奥には、得体の知れない不安が影を落としていた。

何かが起きようとしている。また。

先ほど感じた気配、あれは幻覚にすぎないかもしれない。

だが、その幻覚を見せた原因がある。

おそらく、ロキの第六感はとらえているのだ。

ソフィアが知らせてくれた、などと考えるのは感傷的にすぎるだろうか？

これが感傷ではないとすれば、ソフィアの残り香を連れてくるような連中——

あいつらが、近くで暗躍している？

ふと、ガルムたちが一斉に顔を上げた。耳を立て、鼻をひくつかせ、見えない敵を探すように、周囲に注意を向ける。

「……何か感じるのか？」

ロキは姉を振り向いた。フレイは困ったような顔をして、

「このあいだから、この子たち、ちよつと変」

「何を感じた？ あんたも感じるんだろう？」

「う……ひよつとしたら、だけど」

自信がないのか。フレイは視線を落とし、それからアンリを見た。

アンリは不思議そうに小首を傾げる。

「……あの人たちが、またくる。……騎士を名乗った、あの人たち」

ロキの全身に貫くような衝撃が走る。

やはり、魔術師とは因果なものだ。優れた魔術師の「気のせい」だとか、「虫の報せ」だとか、「嫌な予感」なんてものは――

ほぼ確実に、当たるのだ。



## Chapter 1 女王の寝室

1

秋の気配が深まる、一〇月初旬の王立機巧学院。

雷真、ロキ、フレイは順調に夜会を勝ち上がっていた。

たとえば、三日前の夜は――

「おい、決まるんじゃないか？」

「決まるって……まだ始まったばかりだぜ？」

交戦フィールドをぐるりと囲む客席で、学生たちが口々にささやく。

彼らがいるのは〈コロセウム〉。古代の円形劇場のようなそこが、夜会の舞台となっている。再開初日に比べれば少ないものの、けっこうな数の学生たち、街の名士たちが詰めかけていて、客席の埋まり具合は六分といったところだ。

舞台では立て続けに爆発が起き、黒煙が立ち込めていた。



「押し切れー 虎戦車ー」

清国からの留学生——劉リウが、車輪つきの自動人形オートマタシに命令している。

操っているのは虎に似た自動人形オートマタシ。虎の口から砲塔が突き出し、それがガトリリング式に回転して、ファイアーボールを次々と吐き出していく。きながら移動砲台だ。

凄まじい火力。空気があぶられ、客席にまで熱風が届いた。

あれならば、相手が誰だれであれ、一方的に押し切れる。だが――

「見る、（下から二番目）はダメージを受けていない」

言葉通り、火炎の中から、無傷の雷真らいじんと夜々ややが現れた。

着物の袖そでが焦やげている程度で、二人とも傷ひとつ負っていない。

「やつぱり、あんな程度の攻撃じゃ、あいつは倒せないんだ」

「誰だよ、（下から二番目）なんて名前をつけたやつは!」

客席の悲鳴を苦笑混くわくごじりに聞き流し、雷真は夜々に魔力を送った。

「裏うらから行こう。吹鳴八結ふいめいはちけつ」

「はいー」

雷真の魔力を受け、夜々は撃発された弾丸のように飛び出した。

舞台を高速で駆け抜け、弧を描いて回り込む。

虎戦車は生きた虎のように、機敏に跳んで向きを変えた。



「挟撃など、させるか」

「いや、決まりだ」

回頭した虎戦車の真後ろ、空中に雷真が出現していた。

劉の想像よりもはるかに速く、雷真が距離を詰めていた――

コマのように回りながら、ひねりを加えた斜め上からの蹴り。

虎戦車はもんどり打って吹っ飛んでいく。分厚い装甲は蹴りの衝撃に耐えたようだが、そのときにはもう、夜々が上空にいた。

高空から隕石のように落ちてくる。この一撃で、虎戦車はあっけなく砕けた。

「……僕の負けだ」

悔しげに吐き捨てる劉。それから弱々しく微笑み、雷真に手袋を放り投げた。

雷真が手袋をつかんだ瞬間、わっと客席が沸いた。

「ずいぶん手間取ったな」

フィールドの外から、雷真に声がかかる。

振り向くと、機械人形ケルビムを連れたロキと、ラビを連れたフレイが立っていた。

二人とも今の戦いを見ていたのだ。フレイはばちばちと拍手で祝福してくれたが、ロキは厳しい視線を投げてる。

「一撃加えるだけで開始から八分もかかっているぞ、愚図が」

「文句があるならおまえがやれよ！ 毎晩毎晩、俺たちにやらせやがって！」

「オレが手を下すまでもない相手だ！」

「俺を前座扱いするな！ 少しは勘げ怠慢バカ！」

「黙れ怠慢バカ。貴様から消されたいのか？」

「ケンカは、めっ！」

フレイに仲裁され、雷真らいまこととロキは同時にそっぽを向いた。

翌日は対戦者が現れず、翌々日——つまり昨日。

先の戦いとは打って変わって、雷真は思わぬ苦戦を強いられていた。

「夜々ー 下だ！」

警告より一瞬早く、地面から鋭い突起物が飛び出してくる。

剣のような物体。夜々がかわすと、地面に引っ込んでしまう。舞台と同化しているのか、突起が引っ込むと、舞台は元通りきれいな平面になった。

物質に「溶け込む」魔術だろうか。あるいは、物質を変形させる……？

「確かめてみるか。夜々、森閑八衛しんかんはつゑつかまえろ！」

夜々が構えを取って、タイミングをはかる。

直後、夜々の足もとから攻撃がきた！ 今だ！

夜々は剣をすれすれでかわし、すり抜けざま、つかまえた。

ところが、触れた瞬間、剣は泡が弾けるように消えてしまった。

「何だ、これは？　せっけんの泡……？」

しゃぼん玉のようなものが飛び散る。気を取られた瞬間、夜々の背後にハンマーが出現した。強烈な一撃が夜々を吹っ飛ばし、雷真を巻き込んで吹き抜ける。

しこたま背中を強打して、雷真は思わず顔をしかめた。

「くそ、面倒な相手だな……！」

本体が見つかからない。魔術の正体がつかめない。

昨日の相手は倒せていない——と言うか、現れなかった。うかうかしていたら、敵側の救援に駆けつける可能性もある。

急がなければ……と焦りを覚えたとき、誰かが雷真の横に立った。

「下がっている。オレが手本を見せてやる」

ロキだ。そのとなりに、作動音もなくケルビムが降り立つ。

「よく見ておくんだな。このオレと、今の貴様の隔たりを——ケルビム」

[I'm ready]

ケルビムの翼から練のような短剣が飛び出し、一直線に飛んだ。

フィールドの片隅に次々と突き立つ。泡が割れるような音がして、その一角だけ空気が

歪んだ。いや——歪んでいた空氣が、元に戻った！

そこに、一人の男子学生と、カニのような自動人形が潜んでいた。

カニが吐き出す巨大な泡で、可視光を歪めていたようだ。

ケルビムの短剣が再び宙に浮き上がる。相手が反応する暇もなく、短剣はカニの関節を精確に貫き、バラバラにしてしまった。

それで、魔術の効果は消えたらしい。フィールドにもう一体、別の自動人形が出現する。こちらは剣だの槍だの斧だのハンマーだの、無数の武器を全身にくくりつけた、重武装の自動人形だった。格闘戦に主眼を置いた、直接攻撃タイプか。

「あいつら……二人がかりだったのか！」

察するに、カニの魔術で姿を隠し、もう一体が攻撃していただけ——  
相手が一人だと思いついていたから、魔術の発生源がつかめず、正体が把握できなかった。実戦ならば絶対にしない油断を、いつの間にかしていたようだ。

タネが割れた以上、もう勝負は見えていた。

板状のパーツを噛み合わせ、ケルビムが大剣に姿を変える。

回転しながら炎をまとい、武装した人形を一刀両断。

かくして、ものの数分で、ロキは二体の自動人形を破壊してしまった。

ロキは雷真を振り向き、

「これがオレと貴様の隔たりだ」

「ドヤ顔やめろー！ 俺だつて二人だとわかつてりや——」

「気付かないのが今の貴様だ」

雷真は口をつぐんだ。悔しいが、その通りだ。

「直感に優れる者ほど、思考の死角に気付かない。せいぜい気をつけろ」

冷たく言い捨て、ロキはフィールドのすみ、フレイの方へと戻っていった。  
ちょこんと小首を傾げて、フレイがロキを出迎える。

「ロキ……ライシンにもっと、強くなつて欲しいの？」

「……何を言い出した、バカ姉貴。どこをどう考えたら、そうなる」

「だって、ライシンにアドバイス……」

「見ていてイラついただけだ。くだらんことを言うな」

吐き捨てて、不愉快そうに顔を背ける。

そんな弟を見て、フレイは嬉しそうに微笑んだ。

そして今夜は——

ロキと雷真はフィールドにも入らず、入場ゲートの前で言い争っていた。

「聞いたぞ、貴様。魔王<sup>ワイズマン</sup>じきじきの誘いを断ったそうだな」

「シャルのやつ……よりにもよってこいつに言いやがったのか……」

「魔王の授業を蹴るなど愚の骨頂だな。何のために学院に籍を置いている」

「うるせー俺の深謀遠慮に気付かないバカは黙ってるー」

「バカは貴様だ。オレは謙虚で寛大だが、どうにも許せないものが三つある。言葉の通じない阿呆、理屈を理解しない阿呆、そして何かと突っかかってくる阿呆だ」

「全部俺だろーつか、そっくりお返しするからなー」

横で聞いていた夜々が、あきれたようにため息をつく。

「どっちもどっちです……。あ、フレイさんが戻ってきました」

言葉通り、フレイがとことこと歩いてくる。

「おう、フレイ。今、フィールドの方に行かなかったか？」

「う……行ってた」

「今日の敵はどうした。まだきてなかったのか？」

「勝った……」

フレイはちよつと頬を紅潮させて、誇らしげに言った。オオカミ犬のラビも自慢そうにしっぽを振っている。

一人と一頭の力だけで、いつの間にか倒していたらしい。

「マジかよ。いつの間に……つか、すごいな」

「ふん。やはり注意力が足りんな。オレはとっくに気付いてた」

「うるせえー！ 気付いてたんなら手助けしてやれー」

「貴様にとやかく言われる筋合いはない。いざとなれば、フレイは（十三人）にさえ対抗できる。この階級の連中に一対一で敗れるものか」

「——何だつて？ いや、それは」

さすがに言いすぎでは？

雷真は改めてフレイを見た。フレイは「？」と疑問符を浮かべて、可愛らしく首を倒す。頭の横で結った髪が揺れ、胸がたゆんと揺れた。

確かにフレイは力量を上げた。それはこうして、向かい合っただけでもわかるほどだ。

だが、ロキやシャルに匹敵するかと言われたら——

（……そうか、やっぱフレイは）

強力な奥の手を隠しているのだ。二か月の夏休みが、彼女に切り札を与えた。

だとしたら——

「何を呆けている。オレたちには今日のぶんの特機義務がある。さっさと義務を果たしに行くぞ、最下位バカ」

「おまえとひとつしか違わねーよ九九位バカ！」

ロキと罵り合いながら、夜々を連れてフィールドに向かう。

舞台の上で一時間、時間をつぶさなくてはならない。

ふと、ロキの様子がおかしいのに気付いた。

じつと雷真をにらんでいる。仕掛けてくる気はないようだが、殺気……と言うか、攻撃衝動を感じる。それはもう、肌にびりびりくるほどに。

客席のギャラリ―はもう帰り支度を始めている。雷真とロキが戦わないことは、彼らにもわかつているのだ。

三人の連撃を止めるには、(十三人)の登場を待つしかないのでは？

そんな空気が垂れ込めて——この夜、四〇位の〈手袋持ち〉が脱藩した。

## 2

一時間の〈戦場待機義務〉を果たし、雷真はロキと別れた。

時刻は午後九時を回っている。舗装された小道を歩いて、雷真は学院の中心部に向かう。寮に戻らないのだと気付いて、たちまち夜々の機嫌が悪くなった。

「雷真……やっぱり……女狐のところに……!?」(ううい)。

「ああ。まあな」

気のない返事。夜々は嫉妬も忘れて、心配そうに主を見上げた。



「どうかしたんですか雷真。何か、気になることでも？」

「……ロキのやつ、言ったよな。フレイはもう〈十三人〉<sup>十三人</sup>に對抗できるってさ」

「はい。それが何か？」

「ロキはハッタリをかますような奴<sup>やつ</sup>じゃない。本当にそう思ってるんだ。フレイがこの短期間で、そこまでの実力をつけたんだとしたら……」

「訓練の成果とは考えにくいですね。何か機巧的な——あ！」

夜々も気付いたようだ。雷真はうなずき、

「あいつらの心臓は魔力を高める機巧装置って話だ。これまでとは違う、上手い運用方法を思いついたのかもしれない。だとすると……」

「……フレイさんだけじゃなくて、ロキさんも？」

ため息とともにうなずく。

夜会参加者の中で、フレイの実力はかなり下位だった。ロキの自主降格や雷真の参加によつて順位が動いてしまったが、本来なら第百位——最下位なのだ。

そのフレイが〈十三人〉<sup>十三人</sup>級にまで強化された「何か」。

その「何か」がロキにも適用されているのなら。

ロキの実力は、一体どこまで伸びているのだろうか？

「……考えてても仕方ねーな。とりあえず、学生総代に会いに行こう」

足を速める。夜々はいじけて小石を蹴りつつ、それでも素直についてくる。

歩きながらオルガの名刺を確認。地図に示されていたのは、意外な場所だった。

「この場所、よくよく見りゃグリフォン女子寮じゃねーか」

「よかったですね雷真……。こんな時間に、男子禁制の女子寮に入れて……」

「瞳孔を開くな。つか、寮監は入れてくれるのか？」

それでも、行くだけ行ってみる。整備された小道を抜けると、三階建ての瀟洒な建物が  
見えてきた。どの窓にも明かりがともっている。

シャルとアンリ、フレイもここに寄宿していると思うと、何となく落ち着かない気分になる。夜々が敏感に察知して、もの言いたげに顔を寄せてきた。雷真は逃げるように扉を開け、中に入った。

ぼわぼわした雰囲気「寮長先生」に事情を話す。

オルガの名前を出すと、以前のように「男子禁制ですー」と突っ返されることもなく、  
案外すんなり入れてもらえた。学生総代という役職は、雷真が思っている以上に、権力を  
持つ存在らしい。

オルガの部屋は三階の奥、二室ぶち抜きの大部屋だった。

明らかに特別待遇。おまけに、専属のメイドまでついている。

「ようこそそのお運び、いたみいます」

ドアの前でメイドが丁寧にお辞儀をする。魔力の流れは人間のそれだが、ひよっとすると超精密な自動人形かも知れない。目つきが鋭く、剣呑な気配を漂わせている。

メイドがドアを開け、雷真を中へと案内した。

入ってすぐは応接間兼書斎になっていた。重厚な本棚が設えられ、参考書が綺麗に整頓されて並んでいる。右手の壁にはドアがあり、となりの部屋へと続いていた。

「お連れの自動人形はこちらでお待ちを。奥にはおひとりでお入りください」

「えっ——夜々は雷真と一緒にいきますー」

「オルガさまは自動人形を連れておりません。ご理解くださいませ」

「ご理解ください——譲歩する気がまったくない、という意味だ。」

「仕方ないさ。侍だって、客に会うときは刀を置くだろ」

肩をすくめて、夜々をなだめる。何かあったとしても、雷真の魔力は壁一枚くらい貫通できる。夜々の《金剛力》は起動できるだろう。

「でも、夜々が側にいないと、雷真は……」

「言つとくが、別に変なこととはしないからな？」

「先回りするなんて、怪しい……」

「怪しくないー学習しただけだー」

夜々はしぶしぶ引き下がり、勧められるままソファに座った。

メイドが開けたドアを抜け、雷真は奥の部屋へ。

部屋は豪華だった。雷真が押し込められているトータス寮とは比べ物にならない。飾りつきのベッド、ゆつたりとしたソファ、魔具の照明に、大きなクロゼット。

シャルが使っている部屋より、さらに一段、クラスが上のような。雷真は気後れしながら、やわらかいじゅうたんとを踏んで部屋の中央へ向かう。

部屋の主は、ベッドに腰かけて髪をふいていた。

「こんな格好ですまない。ちょうど、シャワーを浴びたところだね」

バスローブ姿。湯上がりらしい匂いが漂ってくる。バスローブ越しにもオルガの起伏が見て取れて、雷真は赤面した。

「ん、この格好が気になるか？ では、寝巻に着替えようと思うが」

「好きにしてくれ——って待て待て待て——」

きょとん、として手を止めるオルガ。

彼女がクロゼットから取り出したのは、うっすら透けたベビードールだった。

「そのどこの寝巻さだ！ 下着じゃねーか！」

「だが、私は普段、これで寝ているんだ」

「知るか！ そのままでいろ！」

「意外と純情だな。相当な女たらしだと聞いていたのに」

「それは風評被害だからな？ 名誉毀損で訴えたいレベルだからな？」

言い合っているうちに、メイドが飲み物を持ってくる。

オルガに視線で勧められ、雷真はソファに座った。

メイドはガツン、と叩きつけるようにカップを置いた。熱い紅茶がはねて、狙ったように雷真の顔にかかる。メイドは非礼を詫言びるところか、ムスツとした顔で雷真をにらみ、憤然として退出した。

雷真は顔を手の甲でぬぐいながら、

「それで？ 天下の学生総代さまが、俺に何の用だ？」

「言っただろう。話がしたいんだ。君に興味があるんだよ」

オルガはゆっくりと歩き出し、雷真の背後に回った。

「編入間もない君が《暴竜》に戦いを挑んだとき——誰がこんな事態を予想しただろうな。各国選りすぐりの秀才たちが、夜会の舞台で子ども扱いされるなど」

雷真が黙っていると、オルガはくすりと笑って、雷真のとなりに腰を下ろした。

近付くとますますいい匂いがする。ぐらつく理性を立て直し、平静を装う。

「言いすぎだぜ。実際、子ども扱いされたのは俺の方だ——ロキにな」

「あのときは、そうだ。でも今は、その彼にも力を認められている」

ぐつと、オルガが腰を押しつけてくる。さらには胸元を広げ、谷間を見せつけるように、

こちらに突き出してきた。雷真は必死に自制しながら、

「まわりくどいぜ。俺に何の用なんだ。俺の何があんたの興味を惹いた？」

「こういう興味だ——と言ったら？」

言うが早い、オルガがしなだれかかってきた。

## 3

その夜、シグムントはグリフォン女子寮の屋根に上がって、月を眺めていた。冷たい風が吹いているが、北国育ちのシグムントには心地よい冷気だ。

「……月は変わらん。いささかも」

淡い月光に目を細めると、不意に、懐かしい声が耳に甦った。

「竜よ、名は何という？」

彼女と出会ったのは、今くらの季節だった。百年以上も前の話だが。

彼女は正面から巨竜を見上げ、臆することなく笑って言った。

「私はエレイン・ブリュー。放浪の騎士だ」

「……産業革命と言われる時代に、放浪の騎士とは時代錯誤だな」

「そうか？ 魔の山の暴れ竜というのも、ずいぶん時代錯誤だと思ふぞ？」

裏表のない、まぶしい笑顔。

シグムントは苦笑した。おかしなものだ。作り物に過ぎない自分が、人間と同じように、過去を懐かしみ、そして愛しく思っている。

回想を打ち破ったのは、どす黒い魔力だった。

黒い風が吹きつける。何だ……と思う間もなく、魔力は消えた。

続いて、今の寒寒とはまったく別の感覚がシグムントを襲う。

呼ばれるような、この感じ――

近くにいる。私と同じものが。

すいっと滑空してきた影が、翼をはためかせ、寮の尖塔に降り立った。

「よう、兄弟」

月を背負って、こちらを見下ろす小さな姿。

体を覆うウロコは赤く、金属的光沢を放っている。四枚の翼に、発達した角。どこからどう見ても（仔竜）といったその姿は、シグムントにそっくりだった。

シグムントは突然の再会に驚き、親しみを込めて微笑んだ。

「ずいぶんと懐かしい顔だな、ツール」

「お互いにな。ざっと七十年ぶりか？」

「七二年ぶりだ」

「相変わらず細かい奴だよ、おまえは」

けけけ、と笑う。それから、赤い仔竜はふくろうのように首をひねった。

「何つったかな——そう、プリューだ。まだプリューに飼われてんのか？」

「飼われるとは言い得て妙だ。私は気に入っているがね」

「風の噂に聞いたぜ。プリュー家は没落して、今じゃ土地も屋敷もないってな。困窮してるんだろう？ まともに肉を食えてるか？」

「いざとなれば自分で獲るさ。野鳥をね」

「そりゃあいいー 天下の《魔剣》が鳥野郎のマネゴトかー」

馬鹿にしたように笑う。しかし、不思議と腹が立たない。シグムントは穏やかな気持ちで、無作法な兄弟を見上げた。

「零落したとき、シャルには私を売り飛ばすという選択肢もあったのだ」

「バカ言え、売り飛ばすわけがないだろう。俺たちは魔剣だぜ？ 俺たちが手元になれば、金も名譽も思うがままだ」

「それはどうだろうな。いずれにせよ、我が主は《家族》を売り飛ばすような真似はしない。ゆえに、私も彼女の《家族》でありたい——それだけだよ」

「……そりゃあ面白いね」

宝石のような目を細め、にたり、と笑う。



「せいぜい気をつけるこつたな、兄弟。魔剣マジウムが生まれて一五〇年——七本あった魔剣マジウムも今じゃ三本だ。主を気に入った奴から死んで行く」

「気に留めておこう。君も、よき主に巡り合えることを願っているよ」

「相変わらず人がいいな、おまえは。……まあ、ここで会ったのも兄弟の縁、大サービスで情報をくれてやるよ」

「情報？ 聞こう」

「この街に、あいつがきてるぜ。三七番目の大いなる侯爵こうしやく、不滅の存在、ムスベルの炎に唯一耐える者——いろいろ呼ばれちゃいるが、魔術師連中に通りがいいのは」

「(コードPX)……だど？」

「ヤツが魔剣マジウムに耐えるとは思えんがね。用心に越したことはない」

シグムントの頭脳に直感ちくかんが閃いた。それほどの自動人形オートマタが用意されたのは何のためか。ひょっとして、シャルを襲うためではないのか？

「……貴重な情報、感謝する」

「俺も野暮用があつてね、しばらくはこの街にとどまる。また会おうぜ」

赤い仔竜は翼を広げ、尖塔せんとうを蹴けって飛び立った。

その後ろ姿を目で追って——ふと真下を見ると、窓から顔を出す少女がいた。

寝巻き姿のまま、不安げに外を眺めている。シャルだ。

シグムントは屋根を蹴り、ばさばさと降りて行つた。

シグムントに気付くと、シャルは肩を吊り上げて怒つた。

「シグムントー どこ行つてたのよー お昼のチキンを生麦にするわよー 勝手にいなくならないでついても言つてるじゃないー」

「シャルよ、気持ちちはわかるが声が高い。アンリが起きてしまう」

シャルははつとして口を押さえた。奥のベッドでは、アンリが眠っているのだ。

気持ちちが収まらないのか、シャルはシグムントを抱き上げ、ぎゅつとした。逃がすまいとするかのように。シグムントは苦笑しながら、されるがままになる。

シャルはベッドには戻らず、しばし、意欲でシグムントを抱いていた。

「シャルよ。昼間のことなら、気に病むことはない」

「な、何も気に病んでなんかないわ」

「魔王に言われたことが気になって、眠れないのだろうか？」

「……貴方には、随しても無駄ね」

「君に逆湯をつかわせたのは私だ。君の父、エドガーの代わりにな」

「その話はやめて。お父さまったら、血を見て失神しちゃったんでしょ？」

「君は（十三人）に名を連ねる才媛だ。十分に（魔剣）を使いこなしている」

「……でも、ミス・ウェストンが貴方を使えば、どう？」

シグムントは沈黙した。シャルはうつむいて、

「（魔剣）は伝説級の魔術回路。使うべき者が使えば、マグナスにだって勝てるかも知れないわ。少なくとも、今の私じゃ……マグナスには全然歯が立たない」

雷真が学院にきて間もない頃、マグナスと一触即発の場面があった。

あのとき、シャルとシグムントもマグナスの力を目の当たりにしている。今ぶつかれば、シャルに勝ち目はない。それは、間違いない。だが――

「焦ることはない。人間は二十年、ねずみは二か月だ」

「……何それ？」

「成熟に必要な年月だ」

「ねずみの成長ほど単純じゃないわー」

怒り出すシャルに、噛んで含めるように言う。

「私はかれこれ百年以上プリュー家にいる。代々のプリュー家にはさまざまな人形使いがいた。幼い時分には天才と呼ばれながら、大成しなかった者もいる。一方、凡才と呼ばれながら、五十年かけて名声を得た者もいる」

「大叔父様と、ひいおじいさまね？」

「うむ。彼らと比べても、君の才覚は見事なものだ。じきに力がつく」

励ましたつもりだったが、シャルは悲しそうな目をした。

「じきに」じゃ遅いわ。私は今すぐ強くなりた——うつ」

「シャル？ どうした？」

シャルはシグムントを取り落とし、その場にうずくまった。

あつと思う間もない。シャルは空気に溶けるようにいなくなつた。ばさりと、と小さな音を立てて、シャルのネグリジェが床に落ちる。

## 4

オルガに体重をかけられて、雷真らいしんはあつけなく押し倒された。

相手に殺氣がなかったので、油断したようだ。そう、油断だ。むにょんむにょんと心地よい、胸の感触に氣を取られたからではない。断じて違う。

生乾きの金髪が、雷真の鼻先をくすぐる。オルガは髪をかき上げながら、芸術的な美貌びようめいを近づけてきた。雷真は本能の暴走を必死に押しとどめ——桜色の唇が触れる前に、冷靜ぶった声で言つた。

「芝居はやめろ、アリス」

びたり、とオルガの動きが止まつた。

「野暮じゃないか、ライシン・アカバネ。ほかの娘の名を——」

「死んだはずはないと思っていた。さっきのメイドはシンだろうか？」

ふう、とため息をひとつ。

オルガは人が変わったように、不敵な笑みを頬に刻んだ。

「さすがだね。どうして僕だとわかったんだい？ 誘惑の仕方があまりにも僕らしかったかな？ それとも、僕のおっぱいを覚えていた？」

「違うー 怪しいと思ったのはもつと前、最初におまえと話したときだ」

「最初？ この部屋に入ったとき？」

「昼間、食堂で会ったときだよ」

「……冗談だろうか？」

「おまえ、最初に言っただろ。『（下から二番目）』というのは君だな？」

「言ったね」

「まるで、俺の顔を知らないような口ぶりだ」

それで、アリスは自分のしくじりに気付いたようだ。

「なるほどね。オルガは極めて優秀な人物、学生全員の顔を覚えてる。まして君は夜会の参加者——本物のオルガが君の顔を把握してないはずがない」

苦笑するオルガの姿がばやけ、その下から見覚えのある顔が現れる。

ブラチナを延ばしたような銀髪。体つきはオルガよりもいくぶん細身だ。

雷真はアリスの眼を見つめ、わずかに微笑んで言った。

「言いたい文句は山ほどあるが——とりあえず、生きててよかったな」

「……すぐに考えを改めるさ。死んでいた方がよかった、ってね」

「事は露見したんだ。とつとと、俺の上からどけ——」

セリフの途中で、ちゅ、つとやわらかいものが雷真の唇をふさぐ。

たっぷり三秒。いや、もつとか。

アリスははむはむと甘噛みするように、雷真の唇を食った。

「な、な、な……何しやがる！ おまえ！ いきなり！」

「直前まで余裕たっぷりだったのに、実際にされてしまうと動揺するんだね」

べろりと唇をなめ、楽しげに笑う。ほんのり染まった頬が実に媚情的だ。

「僕も照れたよ。本気のキスは初めてだったからね」

「いいからどけ！ 振り落とすぞー」

「はいはい。——ちゃんと撮れただろうね、シン？」

雷真はぎょつとして飛び上がった。

ドアの前にメイドが立っている。その手には写真機があった。

「もちろんです。変態のお嬢さまが別の用途に使えるような一枚を撮りました」

「OK、シン。後で泣かすからね」



「てめえ！ ハメやがつたな！」

雷真かみじんはシンに飛びかろうとした。だが――

「待ちなよライシン。さもないと大声を出しちゃうよ？」

そう言われてしまつては、もう身動きが取れない。

「寮長や学生たちはともかく――可愛い相棒カマドさんに知れたら、困るよね？」

どつと冷や汗あせが出た。そうだ、ドアの向こうには殺人鬼がいる――

アリスは小悪魔っぽく笑つて、雷真を自分のとなり座らせた。

「平和的にいこう。なに、君のポリシーに反することは要求しやしない。ただちよつと、僕のお願いを聞いて欲しいだけさ」

「断る！」

「いいのかい？　すぐにでも現像して、相棒さんに見せちゃうよ？」

「俺おれの相棒をナメるなよ。そんな手に引つかかるわけが……」

夜々がどんな誤解をするかは、火を見るより明らかだった。

結局、雷真は大幅に譲歩した。

「お……おまえの言いなりになるつもりはないが、一応、話だけは聞いてやる」

「なに、簡単なことだよ」

雷真はげんなりした。そんな前置きをされて、簡単だったためしがない。



「僕と（婚約）して欲しいのさ」

言われたことが理解できるまで、数秒かった。

「……婚約？ おまえと？」

「オルガ・サラディーンとね。と言っても、夫婦になるのは僕だけだ。悪い条件じゃないだろう？ 僕はきつと、床上手になるよ？」

「俺がそんな要素に釣られると思うな——」

「重要な要素さ。それに僕は面倒な女じゃない。君が色魔の悪癖を發揮して、よその女に悪さをしたって、八分の七殺しくらいで許してあげるよ」

「七転八倒してるじゃねーか——つか、色魔扱いするな——」

「どうだい？」

じつ、と目をのぞき込んでくる。

婚約と聞いて、真っ先に夜々の顔が浮かんだ。

空想の夜々は真っ暗な目をして、雷真の首を絞めようと——

ぶるぶるとかぶりを振って、夜々のイメージを頭から追い出す。すると今度は、親同士が決めた許婚の顔が浮かんだ。

楚々として穏やかな微笑み。「お姫さま」という言葉が似合う、たおやかな、しかし凛々

として美しい、一輪挿しの白菊のような少女。

「日輪は雷真さまをお慕いしております。それは終生、変わらない気持ちです」  
そつと雷真の胸に手を触れ、彼女は言った。

「ですから、どうか——雷真さまの胸のうちにも、日輪の居場所をくださいませ」  
それで、覚悟が決まる。

「断る」

「おや、断っているのかい？」

「おまえと婚約するなんぞ、ごめんだ」

アリスは意外なほどすんなり引き下がり、顔を背けた。

頬を涙のしずくが伝い落ちる。雷真は仰天し、そして狼狽した。

「おいちよつと待てー 何だよそれー」

「……ひどいじゃないか、ライシン。女の子が勇氣を出して、結婚してくれって言っただよ？ それをそんな言い方でソデにするなんて」

たまらなくなつたように口を押さえ、すん、すん、と鼻を鳴らす。

「おい待てよー 嘘泣きやめろー 勇氣なんか出してねえだろー あと、おまえの場合は求婚じゃなくて脅迫だからなー」

「まあそうだね」

ケロツとして振り返る。本当に嘘泣きだったー

アリスは一転、ふふふ、と凄みのある笑みを浮かべた。

「返事は明日でいいよ。ひと晩じっくり考えるといい」

「……いやに余裕だな」

「あせることなんて何もないさ。君はもう、とつくに僕のものなんだ。将を射るにはまず馬から——東洋の格言だよ」

意味ありげにウインクする。悔しいが、それは極めて魅惑的な表情だった。自然と視線が唇に吸い寄せられてしまう。

先ほどの感觸を思い出し、いても立ってもいられなくなる。雷真は急いで立ち上がり、メイドの殺氣に追いついて立てられるようにして、オルガの部屋を後にした。

## 5

女子寮を出た雷真は、トータス寮近くの林で、三時間ほど自主訓練を行った。そうして、すっかり夜も更けた頃、夜々が怒ってぶつかってきた。

「もー雷真ー 夜々の話を聞いてますかっ？」

とすつと背中当たってくる。雷真は前につんのめりながら、

「……悪い。何の話だっけか」

「雷真が夜々のお布団に潜り込んできて、結婚を迫ったときの話です」

「そんな過去はない！ 捏造するな！」

「雷真……さっきの女狐と何かあったんですか？」  
ぎくっ。

唇に意識が向いてしまう。雷真は即座に否定した。

「何もない……ぞ？ おまえが気にするようなことは何もない……ぞ？」

「視線が泳いでる……っ」

迫及されるとボロが出そうだ。雷真は訓練を切り上げ、寮に戻ることにした。早足で歩きながら、アリスとの会話を思い返す。

「君はもう、とつくに僕のものなんだ」

あれは一体、どういう意味だろう？

……胸騒ぎがする。

何か仕掛けてくるのか。仕掛けてくるとすれば、何を……？

考え込んでいるうちに、林を抜けた。

月明かりの中、古びたトータス寮が見えてくる。

エントランスの手前に、男子寮には不釣り合いなものを発見した。

少女だ。こんな時間に、制服姿の女子が立っている。

一瞬、シャルかと思った。背格好がよく似ているし、肩に仔竜こりゅうが乗っている。

だが、魔力の波長が全然違う。シャルに比べると、彼女の魔力はひどく平凡だ。それで、正体がわかった。シャルの妹アンリだ。

初夏以来の制服を着て、玄關くわんわきの間に潜ひそんでいる。こんな時間にたずねてくるなど、尋常ではない。雷真は急いで駆け寄り、小声で呼びかけた。

「アンリ、どうした」

「ライシンさんー ああ、大変なんです！ 気がついたら、その——メイドの衣装は洗濯しちゃっててだから、急いで走ってき——」

「落ち着け、アンリ」

低い声でシグムントが助言する。つんつん、とアンリの腕を口で突ついて、

「説明するより、見せた方が早い」

「……そうだね。ありがとう、シグムント」

アンリはそつと、水をすくうような手つきで、両手を差し出した。

「あの……お姉さまが大変なことになったんです」

「あ？ シャルが大変なことに……って」

大変も何も、シャルの姿が見当たらない。わけがわからないまま、雷真はとりあえず、アンリの手に視線を落とした。

アンリが両手で持っていたのは、丸めたハンカチだった。

いや、丸めたと言うより、巻きつけたと言うべきか。小さな人形のようなものが、ハンカチにくるまっている。

月光を受けて、さらさら光っているのは——金髪だ。

「何だこりや？ 妖精……？」

「雷真——これ——」

夜々の方が先に気付き、小さな悲鳴をあげた。

「シャルロットさんです——」

「……………あ？」

雷真は間の抜けた声を出し——一瞬後、びくつとのけぞった。

アンリの手の中にいたのは、確かに、人形サイズのシャルだった。





## Chapter 2 おとぎ話の小妖精



### 1

時間は少し戻って、夕刻。夜会ヤカイが始まる前のこと――

ロキはコロセウムに向かうべく、ケルビムとともにラファエル男子寮を出た。

学院を南北に貫くメインストリートを南へ。中央食堂を通り過ぎたところで、人待ち顔の女子学生に気がついた。

学生総代、オルガ・サラディーン。執行部役員専用の白い礼服ゴーストを着ている。身にまとう雰囲気はきらびやかで、ある種の威圧感すら放っていた。

「待っていたよ、（剣帝）ロキ」

誰だれに対してもわけ隔てなく向けられる（金色のオルガ）の微笑み。

これほど近くで見たのは初めてだ。彼女の気品に、ロキは若干、鼻白む。

「君と話がしたい。少し時間をくれないか？」

「悪いが、オレはこれから夜会に向かうところだ」



「では、歩きながら話そう。ライシン・アカバネのことだ」

びくり、とロキの眉が動く。

その変化を楽しむように、すうつとオルガの目が細められた。

「君はなぜ彼と戦わない？」

いきなり核心を突いてくる。

「学生たちは君と彼が〈仲間〉だと言っている。だが、そうではないだろうか？ 少なくとも君には、彼に対する敵意がある。いや——怖れと言うべきかな？」

（怖れ……？）

少し前のロキなら、むっとしたかもしれない。

だが今は、オルガの言葉を胸中で笑い飛ばす余裕が生まれている。

「気を悪くしないで欲しい。だが、君はライシンの実力を誰よりも認めているはずだ。君の道を阻む強敵だとね。なぜ、彼を倒そうとしない？」

「あんたの知ったことじゃない」

「当ててみようか。一対一で勝ちたいからだ」

「——どういう意味だ？」

「今の君では返り討ちに遭う。お姉さんの手助けが必要だろう？」

「……ふん。何とでも言え」

「このままでいいのか？ 君は彼を利用してゐるつもりかもしれないが、彼は戦いを経るたび、ますます力をつけていくぞ。君を上回る速さでな」

ロキはびたりと足を止め、うすく笑つて反撃した。

「煽つても無駄だ。あんたの方こそ、なぜオレたちを戦わせたんだ？」

「挑発には乗つてこない……か。手ごわいな」

オルガは両手を軽く上げ、降参のポーズをした。

「私の椅子は執行部にある。余計な気遣いを要求される、つらい立場でね。君とライシンが共闘してゐては、夜会がつまらなくなるだろう？」

「ふん、賭け試合か。いい気なもんだな、金持ちどもは」

「ロンドンのブックメーカーはここのとこ大忙しだよ。今から売りに出すぶんは、大幅なオッズの修正が必要だからね」

蜂蜜色の金髪をかき上げ、あきらめたようにきびすを返す。

「できればライシンと戦つて欲しいものだが——無理にとは言わない。友達はかけがえないものさ。今夜の試合も健闘を祈る」

「待てー オレとあいつが友達だと？ オレたちは——」

今度はオルガが取り合わず、手を振つて去っていく。

腹立たしいほど優雅な所作。色づいた街路樹の下、去り行く背中は絵画のようだ。

ロキは遠ざかるオルガをにらみ、しばし、込み上げるいら立ちに耐えていた。そんな主を、あるにケルビムが光点のような目で、不思議そうに見つめていた。

## 2

雷真らいこは忍び足で階段を上がり、アンリを自分の部屋に招き入れた。

室内は相変わらずオンボロだったが、夜々が徹底的に掃除したおかげで清潔だ。

その夜々は一階のエントランスで硝子しょうこに電話をかけている。今この部屋にいるのは雷真とアンリ、シグムント、そして小さなシャルだけだ。

雷真はアンリに向き直り、勢い込んで言った。

「それじゃ話してくれ。これは本当にシャルなんだろうな？」

アンリの手にあるものを示す。仔細しじみなみほどのサイズのシャルが、不機嫌そうに腕組みをして、雷真をにらんでいた。

「そつくりに作ったミニチュア自動人形とか、幻術のたぐいじゃないかな？」

「違うわよ無礼者！ ああ、その目は節穴なのね？ チーズの穴なのね？」

小さくなったシャルは、声が小さく、波長も高い。だが、耳を近づければ、それとなく言葉がわかる。鵜島うじまのさえずりに似ていた。

アンリは途方に暮れた様子で、姉の小さすぎる頭を見下ろした。

「お姉さまです……。小さくなる瞬間を、シグムントが見ています」

「じゃあ何だ。魔術か、これ？」

雷真（らいしん）はシグムントを振り向く。シグムントはこくりと首を上下させ、

「消去法でな。魔術でなければ、これはできない？」

「魔術なら、別の魔術を重ねがけすれば、解けるんじゃないか？」

魔活性不協和の原理を連手に取る発想だ。だが、シャルはかぶりを振った。

「とつくにやってみたわよ。でも、だめなの。私の魔力は全然安定しなくて、上手く発現しないし……。アンリの魔術はかからないし」

「任せろ。俺（おれ）の新技で、ありったけの魔力をブチ込んでやる」

「待て、雷真。素人考（しらひとこう）えで無茶（むちゃ）をするな」

シグムントが雷真の肩に飛び移り、慎重な声で制止した。

「効果の強さから言って、単純な現代魔術ではない。儀式魔術に近いようだ」

「儀式……。大昔の？」

「術式がわからないまま、別の魔術をぶつけるのは危険だ。魔術と魔術が打ち消し合ってくればいいが、下手をすれば、シャルの体に反動がくるかも知れん」

「……反動、って言うところ？」



先ほど以上の抵抗。シャルの意外な剣幕に、アンリも雷真も面食らった。

「クルーエル先生に診られるのだけは嫌——あんな変態——」

「いや……あの医者、あれで腕は確かなんだぞ？」

「雷真よ、シャルが言っているのは技術のことではない。シャルは入学早々、あの医者 of 股間を思いきり蹴り上げていてな」

そう言えば以前、クルーエルはシャルを見て内殿になっていた。

「だから、あの医者は絶対ダメ——診察と称して何をされるかわからないもの——」

「おい、それじゃ全然話が進まねーだろ。夜会執行部は駄目、医務室は駄目」

「だから、私たちが解決するのよ！」

「そんな無茶な……」

雷真が困惑していると、かちやりとドアが開いて、夜々が戻ってきた。

「おう、夜々。硝子さん、何だつて？」

「はい。おそらくこれは（呪い）や（黒魔術）のたぐいだろうと」

「シグムントが言ったのと同じ結論だな。それで？」

「硝子は、『呪いは専門外』だつて……」

「……だよな」

機巧魔術が体系化される前——中世以前の魔術は謎が多い。失われた秘術も多いと聞く。

洋の東西で形式もかなり違う。専門家に当たらなければだめだ。

黙っていたアンリが、おずおずと口を開いた。

「あの……キンバリー先生に診ていただくのはどうでしょうか？」

「ああ。俺も、それしかないと思つてたところだ」

「嫌よー これ以上、キンバリー先生に借りを作りたくないわー」

やつぱりシャルが反対する。雷真はついに怒った。

「わがまま言うな！ 誰のためにやつてると思つてるんだ！」

「何よー これくらい当然でしょうー 私のディフェン……」

「ディフェン……何だつて？」

「なっ、なな何でもないわよ変態——」

どんとんとと乱暴にドアが叩かれて、一同に緊張が走った。

「おいライシンー さつきから何か話し声がするぞー てめえまさか、女子を連れ込んで

るんじゃないよな!?」

寮監が嗅ぎつけたようだ。雷真はあわてて、

「悪いー いつもの調子で夜々が暴れてるだけだー」

がーん、と衝撃を受け、夜々は涙ぐんだ。

「ひどいです雷真……夜々をそんなふうに使うなんて……」めぞ。

「あつ、すまんー いや、でもほら、普段のおまえの言動がだな——」

「雷真は馬鹿です……。うっ、うっ……」

「ひどい男。最低の変態野郎ね。女の敵ね」

「おまえのせいだろ!?」

「おいライシン——」

「何でもねえ——」

そうして、いたずらに夜は更けていく——

## 3

「シャルよ、もう起きろ」

ベッドがぐらぐら揺れて、シャルは目覚めた。

ベッドだと思っていたのは、シグムントの体だった。小さな体が凍えてしまわないように、シグムントにくっついて寝ていたのだ。

「寝たって気がしないわね……」

ふわ、とあくびをした途端、巨大な雷真の顔が視界を埋め尽くした。

「ようシャル。起きないから心配したぜ」



寝起きの顔を——しかもあくびの瞬間を——見られてしまった。

しかも、シャルは半裸だ。ハンカチを巻いただけで、下着もつけていない。シャルはかあああつと赤面し、とりあえず、思いつくまま罵った。

「変態——最低の変態ね！ レディの寝起きを襲うなんて、ほんと最低——」  
「ずいぶんだな。つか俺の部屋だからな？」

雷真は笑って受け流す。シグムントがシャルの代わりに非礼を詫びた。

「すまん、雷真。シャルは寝不足気味で機嫌が悪いのだ」

「ああ、そうか。こんな状態じゃ、不安になるよな」

「いや。君の部屋で眠るという行為が、いささか刺激的すぎて——」

「ただ黙りなさいシグムント——おかしい妄言を言わないで——」

背中によじ登り、翼を引っ張る。シグムントは愉快そうに笑った。

ふと、雷真がまじまじとこちらを見ているのに気付いた。

「な、な……何見てるのよ……」

「いつまでもハンカチ一枚つてのは可哀相だな。何か着るものはないのか」

「そ、そんな卑猥な目で見てたのね——こっち見ないでよ——変態——」

「卑猥じゃねえ——つか、おまえこないだ水着でウロついてたじゃね——か——」

「雷真……シャルロットさんで着せ替え遊びなんて……」

怒った夜々が乱入してくる。

「雷真のお人形は夜々なのにーっー 夜々も着せ替えしてくださいー さあー」

「脱ぐなー そして自分で着ろー」

雷真は半裸の夜々を押し返しながら、シャルに向かって言った。

「とりあえず、今日はキンパリー先生のところに行くからな。昼休みか——最低でも五限が終わったらすぐ行くぞ。いいな？」

「わ……わかったわよ」

シャルは不承不承うなずいた。

「そんな顔するな。キンパリー先生なら、きっと知恵を授けてくれるさ」

「……そうね」

「雷真のシャルロットさんを見る目……いやらしい……性的……」

はっこりした空気を、夜々のひと言が台無しにする。

「妙な言い方するなー 性的も何も、どうしようもねえだろこんなのー」

「できますー 綿棒で突ついて遊んだりー 全裸にして一緒に握ったりー」

「はあ？ 全裸……はいいとして、握るって……何を？」

「いやっ、ライシン、くるし……っ」とかそんなこと言わせて~~~~~

「ちよっと待て？ 何の話だ？」

「そして……ドロドロのぐしょぐしょに……雷真……」

その光景をイメージしてしまい、シャルの顔から火が出た。

「さ、最低の変態野郎ね！ 脳みそがわいてるんじゃない!?」

「おまえらだからな!? おまえら、俺の想像のはるか上をいつてるからな!?」  
雷真は頭をがしがかきむしり、しばし煩悶した。

やがて力尽き、悟ったような表情になって、

「……もういい。とりあえず、何か食い物取ってくる」

「あ、夜々が行きますー 雷真がハチミツを取ってこないようにー」

「……ハチミツの何が駄目なんだ？」

「シャルロットさんに垂らして舐めようなんて、考えが甘すぎますー」

「しねえ！ あと全然上手くねえ！」

シグムントが立ち上がり、翼を広げて、窓際へ飛んだ。

「では、私はアンリのところへ行く。シャルを心配しているだろうからな」

「ちよつとー 私を置いていくの!?」

「君は雷真とここに残れ。その方が安全だ」

言うが早いか、窓枠を蹴り、外に飛び立つ。

シグムントがいなくなつて、シャルはたちまち不安になった。

「……何よバカー！ 外道！ 冷血漢！ 人でなしーっ！」

「まあまあ。大人しく俺と留守番してようぜ」

雷真が慰めるように言う。そんなふうに言われると、それも悪くないかと思ってしまう。

シャルはあわててかぶりを振って、いつも通り憎まれ口を叩こうとしたのだが……。

あいにく、罵倒の言葉は出てこなかった。

それが何だか屈辱的で、シャルは赤くなつた顔を背けた。

4

雷真は夜々、シャルと一緒に、自室で朝食をとることにした。

シャルの食事は困難を極めた。第一に、彼女のサイズに合う食器がない。そして何より、

シャルに比べて、食べ物がいまにも巨大なのだ。

シャルは山のような黒パンを小さな手でむしり、口に運んだ。

「どうだ？ 食えるか？」

「……苦い」

「苦い？ そーいや黒パン出すのつて、このオンボロ寮くらいか？」

「そうじゃなくて……ああもう、ハチミツー ハチミツを頂戴！」

「はいはい。かしこまりました、お嬢さま——」

席を立とうとしたとき、すっと横からピンが差し出された。

「何だ夜々。取ってきてたのか」

「……シャルロットさんは小さいので、ものがのみ込みにくいかと思って」

そつばを向いたまま、ぼそりと言う。不機嫌そうだが、何だかんだでシャルを気遣っている。雷真は嬉しくなつて、普段は言わないようなことを口にした。

「優しいな。おまえのそういうところ、俺は好きだぜ」

「雷真……っ♡」

きゅん、と夜々の心臓が鳴る。夜々は頬を紅潮させ、興奮のあまり、ハチミツのピンを握りつぶした。幸い、ピンの破片は誰にも当たらなかったが——皿の上につつとりとハチミツがこぼれ落ちた。

皿の上には、黒パンにしがみついた、シャルがいた。蜜に足を取られ、あっけなく転倒。ものの数秒で、髪といい肌といい、とろとろのベタベタになってしまう。

重苦しい沈黙。やがて、はつとしたように夜々が口を覆った。

「雷真……やっぱりシャルロットさんを舐めようと……っ!?」

「ピンを割ったのはおまえだろー」

「そうなるように仕向けたのは雷真ですー おかしいと思っただんです、雷真があんな甘い

言葉を言うなんて……っ！」

二人のやり取りをよそに、シャルは皿の上でぶるぶる震えていた。

「シャル……まあ、その、洗ってやるよ」

「ふざけないで変態——自分で洗うわよ——」

シャルは両手を振り上げて怒った。……が、力なく手を下ろし、皿の上にへたり込んだ。怒りが限界を超えて、むしろ悲しくなってしまうたようだ。普段なら「こっち見ないでよ変態——」くらい言いそうなのだが——

「ちょ……おい、泣くなよ」

「だって……情けないじゃない、こんなの……っ」

天下の《暴竜》と恐れられたシャルが、今はあまりにも無力な存在だ。

雷真はシャルに顔を近付け、できるだけ優しく言った。

「もうアレだ。今すぐキンバリー先生のところに行こう、な？」

シャルは反論せず、こくんとうなずいた。可哀相なくらい弱りきっている。

そんな彼女を、小鳥を抱くように両手で包み、雷真は部屋を後にした。

すまなそうな夜々を連れ、寮を出て理学部の校舎に向かう。

最上階、キンバリーの研究室に直行。ノック数回で、「入れ」と返事があった。

キンバリーは在室していたようだ。ずいぶん、朝が早い。あるいは徹夜明けか。いずれ

にしても、キンバリーに疲労の色はなく、普段通りの顔色だった。

「早いな、先生」

「私にも眠れない夜はあるさ。新しいおもちゃが届く、その前日とかな」

「——何か届くのか？ 邪魔したか？」

「かまわんよ。君も楽しみなおもちゃのひとつだ」

「雷真……キンバリー先生のおもちやだなんて……っ！」

「こら夜々ー 何とんでもない勘違いしてんだー」

「それで、今朝はどんなお楽しみに巻き込まれたんだ？」

雷真は無言で両手を差し出した。

手の中に座っていた少女を見て、さすがのキンバリーも目を見張った。

いつもの銀縁眼鏡をかけ、シャルに顔を近付ける。

「どうした、シャルロット。昨日よりもずいぶん小さくなったな？」

シャルは応えず、しくしく泣いていた。

「ずいぶん弱っているな。それに、ハチミツまみれじゃないか。まさか舐め——」

「違うー あんたまで妙な勘違いするなー」

「ふむ……。まずは裸にひんむいて、目視で確認だ。男は出て行け」

研究室を追い出されてしまう。雷真は仕方なく、フロアのすみに向かった。

休憩所のソファに座って、窓の外を眺める。

静かな朝だ。太陽の光も、小鳥の声も、普段と何も変わらない。

ふと、昨晚、シャルが言いかけた言葉を思い出した。

(ディフェン……って何のことだ?)

わたしのディフェン——

「ディフェン……防衛印か!」

シャルにもらった銀のペンダント。ルーンが刻まれた護符のことだ。

そう言えば、夏休み——そのことでシャルとケンカした。

つまり、シャルはこう言いかけたのか。「私の防衛印を失くしたくせに」と。

「シャルのやつ、まだ根に持ってたのか……」

「お姉さまがどうかしましたか?」

階段から声がかかる。見れば、アンリが上がってくるところだった。エプロンドレス姿で、大きな洗濯かごを抱えている。

「おはようございます。ライシンさん」

「おう、朝から洗濯か。働き者だよな、おまえ」

アンリは嬉しそうにはにかんで、それから、心配そうに肩をひそめた。

「あの、お姉さまは?」



「今、キンバリー先生が診てくれる」

「よかった——あ、でも、それじゃ、お姉さまが根に持ってるっていうのは？」

「シャルにもらったお守りを、俺が失くしたっつーか、壊しちゃってさ」

「お守り？」

「夜会の前にもらったんだ。ペンダントでさ、護りのルーンが彫ってある」

アンリの顔色が変わった。アンリは少し青ざめて、

「それは、銀の……六芒星が刻まれた……？」

「知ってるのか？」

「それ……イライザおばあさまの形見です」

「」

「おばあさまはルーン文字に造詣が深くて。コレクションしてらしたんです。私もルーンの指輪をもらいました」

「……マジかよ。買ったもんだとばかり……だって、ピカピカだったぞ？」

シャル自身、買ったような口ぶりだったのに。

だが——シャルの性格なら、自分から「形見だ」なんて言うはずがない。

新品に見えるくらい、大事にしていたのだ。

黙り込む雷真に気を利かせたのか、アンリはもう何も言わず、階段を上がって行った。

洗濯物を干しに、屋上に向かったようだ。

(ばあさまの形見かよ……そりや怒るよな……)

シャルに謝った方がいい。だが、蒸し返すのも気まずい。どうしたものかと頭を悩ませていると、廊下の向こうから夜々の声がした。

「雷真、キンバリー先生が呼んでますよ」

雷真は立ち上がり、重い気分で研究室に戻った。

## 5

ドアを開けると、先にシグムントが到着していた。

奥の机の上で、シャルと並んで座っている。そのシャルはと言えば、汚れたハンカチの代わりにリボンを体に巻きつけて服にしていた。「プレゼントは私よ♡」なんていうバカな台詞が脳内再生されて、雷真は自分を絞め殺したくなった。

机の前には部屋の主、キンバリーがいる。分厚い医学書のようなものを広げ、難しい顔で考え込んでいた。

「どうだ、先生。解説の方法は見つかったのか？」

キンバリーはくると椅子を回し、落ち着いた声で答えた。

「まずは診断結果を伝えよう。結論から言えば、**（呪い）**だな」

呪いは魔術の一カテゴリーだが、その定義、区分はわりと曖昧だ。

「付与魔法、もしくは制限魔法と呼ばれることもある。機巧魔術以前の黒魔術を指すことが多い。効果持続時間がべらぼうに長い半面、複雑な手順や多様な材料を必要とする」

「……俺の田舎にもあるぜ。わら人形を相手に見立てて、釘を打つ」

「典型的な**（類感）**スタイルの呪術だな」

「しかし、女史よ」

シグムントが疑問を口にする。

「シャルほどの魔術師に呪いをかけるなど、容易ではない。ブリューの一族は霊的に強化されているし、シャルもまた、日常的に防御している」

「相手はかなりの使い手だろう。そして、驚嘆すべきは技量だけではない。呪いは概して強力なものだが、リスクもある——そうだな、シャルロット？」

講義中のような口調。シャルはびっくりしたようだが、きちんと答えた。

「呪返し……とか」

「そうだ。呪いの原動力は術者の怨念……かけた者と術の結びつきが強いぶん、プロクサされると効果がはね返ってくる。効果がなかった場合も同様だ。つまり、敵は相当な覚悟を持って使ったということだ」

首筋に刃物を当てられたような気がして、雷真は硬直した。

ひょっとしたらと思つていたことが、今はつきりと、確信に変わった。

リスタなどおかまいなしで、効果的な手段を好む者——心当たりがある。

シャルは不安げに、しかしはつきりとした声でたずねた。

「それで、先生。私は何の呪いをかけられたんですか？」

「著明な症状——身体構成物質のトータルな縮小——から見ても、（ニーベルングの呪い）か、その亜種と見て間違いないだろう。源流はドイツの片田舎に伝わる強力な呪いだ。敵を小妖精に変えてしまう」

小妖精。聞き慣れない単語に、夜々が首をひねった。

「おとぎ話に出てくる……宝物を守つてゐるつていう、意地悪なおじいさん？」

「そのステレオタイプは呪いを受けた敵部族のイメージだろう。この術の厄介なところは、弱い怨念で発動でき、無差別な攻撃が可能な点。それから、肉体との親和性が極めて高く——現代に至るまで解呪の方法が確立していない。蛙や白鳥は王子に戻れるが、小妖精が人間に戻るといふのは、あまり一般的じゃないだろうか？」

「待つてくれー それじゃ、呪いを解く方法はないのか？」

雷真はあわててキンバリーに詰め寄つた。キンバリーは真顔のまま、

「いや、ある。実に簡単な方法だ」

「ビビらせんなよ。それを早く教えてくれ」

「呪いをかけた本人に、解除の呪文コウモンを教えてもらえ」

「ヘイトディスプレイ（強制的解呪）は金庫を鍵カギなしで開けようとする行為だ。金庫に傷をつけたら、中身を

ダメにしてしまうこともある。だが、鍵があれば、そんな心配はいらん」

目の前が真っ暗になった。それは実質、敵に屈服することを意味する……。

キンバリーはシャルに向き直り、確かめるように訊いた。

「シャルロット。相手に心当たりはないのか？」

「……ないわ。って言うか……ありすぎるわ」

「敵意や違和感を感じたことは？　そういう物体に触れたことは？」

「わからない……わからないわー」

シャルはうずくまり、頭を抱えてしまった。極度の不安にさらされている。

あまりにシャルが気の毒で、雷真は良心の呵責カシヤクに苛いらまれた。

もういつそ、事情をぶちまけてしまおうか？

……いや、果たしてアリスがそれを許すだろうか？

キンバリーは頬杖ほおづえをつき、ため息混じりに言った。

「手詰まりだな。せめて感染経路がわかれば、犯人の手がかりがつかめるのだが」

「……感染って何だよ？ 流行り病じゃあるまいし」

「（接触禁忌）——穢れに触れば必ず災いを受ける。呪術の基本原則だ、馬鹿者」

あきれ顔で新聞を丸め、べしつと雷真の頭を叩く。

「シャルロットほどの魔術師に呪いをかけるなら、接触感染に訴えるのが確実だ」

「……女史よ、私を調べてくれないか。私が媒介となった可能性がある」

シグムントが苦しげにつぶやく。シャルは飛び上がって驚いた。

「何を言ってるのよ。貴方が呪いの媒介になるなんて——」

「可能性はあるのだ。昨夜、異変が起こる前、君は私を抱えただろう？ あのと既に、

私に呪いが感染していたと考えれば、つじつまが合う」

「でも、誰から？ どうして……？」

「……それはわからんが、直前に、瘴気のようなものを感じたのは事実だ」

キンバリーはシグムントをじつと見て、うなずいた。

「あり得るな。自動人形に仕掛けることができれば、早期の接触を期待できる。禁忌人形

は主から離れて行動できるし——単独行動中を狙ったか」

キンバリーは勢いよく立ち上がった。

「早速調べてみよう。（下から二番目）、君はどうする？」

「俺は……心当たりを探してみる」

「そうか。無茶をしてもいいが、無謀はするな」

「ああ。夜々……悪いが、おまえはここでシャルを守ってくれ」

「あ……はい」

夜々は怪訝そうにしたが、追及せず、大人しく従った。

出て行こうとした雷真に、背後から声がかかった。

「言っておくがな、（下から二番目）。時間的猶予はそうないぞ。呪いが完全に効果を発揮するまで、せいぜい三日だ」

しん、と背筋が凍えた。答えがわかっていたのに、試いてしまう。

「……三日経つと、どうなるんだ？」

「二度と元の姿には戻れない」

予想通りの返答。

雷真は奥歯を噛みしめ、キンバリーの研究室を飛び出した。

## 6

雷真は急いでグリフォン女子寮に向かった。

残念ながら、オルガは既に登校した後だった。

あせつているときは何もかもが上手く行かない。走り回っても見つけることができず、仕方なく上級生をつかまえて、オルガが受けている授業を聞き出す。講堂に行けば講義は休講で、そうこうするうちに昼休みになり、学生総代の執務室に行けば行き違い、あれやこれやで午後の授業が始まってしまった。

そうして、午後四時過ぎ——五度目の執務室訪問で会うことができた。

大講堂の三階、執行部のためのエリア。重厚な扉の向こうから「どうぞ」と返事が聞こえた瞬間、雷真は蹴破る勢いで飛び込んだ。

「アリス！」

「オルガと呼びなよ」

オルガの顔をしたらアリスが、苦笑を浮かべて座っていた。

ずんずん踏み込む雷真の前に、メイド姿のシンが立ちはだかった。

「通してやれよ、シン」

アリスに言われ、シンがしばしば道を開ける。雷真は足を踏み鳴らして執務机の前まで進み、ばしんと机を叩いた。

「……おまえが、やったのか？」

「何を？」

「とほけるな！ シヤルのことだ！」



「そうだと言ったら？」

「呪いを解けー 今すぐー」

「嫌だね」

「なら、力尽くで解かせてやるー」

「それは無理だよ」

「……試してみるか、俺の覚悟を？」

「試したいのかい、僕の覚悟を？」

視線がぶつかり、火花が散る。

だが、切り札を握っているのはアリスの方だ。アリスがその気になれば——もし自害でもしようものなら、シャルはもう助からない。

そのことに気付き、雷真はそれ以上、何もできなくなる。

雷真の心情を見抜き、アリスはなぶるように言った。

「さあ困ったね？ 解除コマンドは僕しか知らない。さぞかし僕が憎いだろうけど、僕を殺せばシャルロットは助からない」

「……やめてくれ」

「それが人にものを頼む態度かい？」

怒りをぐっと抑え込み、机に手について、頭を下げる。

「頼む。シャルの呪いを解いてくれ」

「じゃあ、僕と婚約を？」

「……する」

アリスは、すぐには応えなかった。

どんな顔をしているのかと、そつと盗み見ると――

アリスは冷めた目で雷真を見ていた。なぜか、失望しているようにも見えた。

「シャルロットの呪いは解くよ。ただし、僕の用事が終わってからだ」

「な――今すぐじゃないのか！」

「エサだけ取られたんじゃ、釣りは失敗だよ」

「俺は約束を守る――」

「嘘だね。君ほど約束を無視できる男を僕は他に――一人しか知らないよ。なに、心配はいらないさ。僕の用事は二日もあればカタがつく。そっちには協会の番犬がついているんだろう？　呪いの効果はかなり遅延するはずだ」

何もかもお見通しというわけか。

「勝手にしろ――だが、シャルに何かあったら……俺はおまえを殺すぞ……!?」

真止面から、にらみつける。

一瞬、アリスの蒼い瞳の奥に、痛みのようなものが透けて見えた。

気のせいかもしれない。アリスはばしつと雷真の頬を張って、

「彼女を救いたいなら、僕の機嫌を損ねないことだよ、ライシン？」

嗜虐的な笑みを浮かべ、ゆつくりと席を立つ。

「まずは忠誠の証をもらおうかな」

雷真の真横まできて、そつと手を出した。

意味がわからず、まごついていると、今度は手の甲で雷真の頬を張った。

「ひざまずいて、手にキスをしなよ」

抗うだけ無駄だ。無駄どころか、逆効果だ。

雷真はその場に膝をつき、中世の騎士よろしく、アリスの手にキスをした。

「お利口だね。じゃあ、今度はここにしてみようかな？」

唇を示す。雷真はさすがに躊躇した。

「おや、嫌なの？　じゃ、代わりにふとももを舐めてもらおう——」

「お嬢さま。そのくらいに」

鉄しい声でシンがとがめる。アリスは不満げに舌打ちして、執務机に戻った。

助かった。まさか、シンに助けられる日がくるとは思わなかった。

「続きは今度にしよう。そろそろ夜会の時間じゃないのかな？」

もう行け、ということか。

雷真はこぶしを握り、しかしどうすることもできず、立ち上がった。

「そうそう、わかつているだろうけど、このことは他言無用——君の飼（か）い主（ぬし）にも、相棒（さへだ）にも、漏らしちゃ駄目だよ？」

「……わかつてる」

「忘れないでよ。君はオルガの婚約者——この僕（め）のものだ」

うなづくことしかできない。雷真は暗澹（あんたん）たる気分で、執務室（しつむしつ）を後にした。

足を引きずるようにして、学内を彷徨（さまよ）う。どこをどう歩いたのか、気がつく、理学部の近くまで戻（かえ）ってきていた。

屋外灯（やがいとう）の光を浴びて、黒髪（くろかみ）の乙女（おんな）が立っている。

「雷真！」

夜々（やや）だ。夜々は雷真（らいしん）に気付（き）き、とてとてと駆け寄（よ）ってきた。

「どこ行（い）ってたんですか、急に飛（と）び出（で）して——はっ！ まさか昨日（きのう）の女狐（おんなきつね）のところに……シャルロット（シャルロット）さんが大変（たいへん）なときに……っ」

図星（ずせい）だったが、雷真（らいしん）にはもう、言い訳（わけ）を探（さが）す余裕（よゆう）もなかった。

「悪い。今（いま）から夜会（やかい）、頼（たの）めるか」

「もちろんです……けど、どうかしたんですか？ 雷真（らいしん）、変（へん）です」

「何（なん）でもない。行（い）くぞ」

夜々には悪いが、説明はできない。

心配そうな夜々を引き連れて、夜会会場のコロセウムへ向かう。

コロセウムに向かう小道は、戻ってくる学生たちで賑わっていた。

もう今夜の決着がついたようだ。ロキかフレイがやったのだろう。

交戦フィールドに到着してみると、舞台にはロキとケルビムが立っていた。フレイの姿は見えない。自動人形の残骸が、舞台の外に運び出されている。

「ふぬけた面をしているな」

雷真を一瞥するなり、ロキは冷ややかに言い捨てた。

ビリビリするような気迫が伝わってくる。昨日と同じく、殺気を感じる。

「何だよ、もうやっちまったのか。フレイはどうし——」

雷真がフィールドに足を踏み入れた、その瞬間。

ごうっ、と灼熱の炎を上げて、ケルビムが飛んだ。

空中で変形し、大剣となって夜々の頭を狙う。

間一髪、雷真は夜々を突き飛ばし、跳躍してかわした。

信じられない気分でロキを見る。夜々も同じ気持ちだったのだろう。目をまん丸にして、

ロキと雷真を交互に見ていた。

誰も予想しなかった事態に、ガラガラの観覧席がざわめく。

今の一撃は本気だった。かわさなければ、夜々の首は千切れ飛んでいた。

「どうした、何を驚いている？」

ロキは底冷えのするような声で言った。

「もとよりオレと貴様は〈手袋持ち〉。ひとつしかない〈魔王〉の玉座を巡って、つぶし合う存在だろう？ 遅かれ早かれ、こうなる宿命だ」

そんなことはわかつている。

だが、どこかで。ロキとは上手くやっていけるんじゃないかと——  
味方として、ともに戦っていけるんじゃないかと、思っていた。

「オレたちは敵同士——ゆえに」

ロキの肩から青白く、目に見えるほどの魔力が立ちのぼる。

「今夜、貴様を蹴落とすことにした」

ごうっ、と轟音を響かせて、ケルビムが襲いかかってきた。



## Chapter 3 魔女と騎士の盟約



### 1

炎をまとった大剣が、空中を自在に飛んで、夜々の首を落とそうと迫る。

動きは鋭い。その上、以前とは段違いになめらかだ。

次々と繰り出される斬撃を、夜々は際どくかわし続ける。かつてケルビムは〈金剛力〉を貰き、夜々の体を切り裂いている。直撃を喰らうわけにはいかない。

客席が静まり返る。夜会初日のあの凄惨な光景は、学生の多くが知っている。皆が固唾をのんで、戦いの推移を見守っていた。

気がつけば、夜々は舞台の端に追い込まれていた。

背後に気を取られた瞬間、ケルビムがさらに速度を上げた。ぎゅんつと回転して、夜々の脳天をかち割る——寸前、がいんつ、と音がして太刀筋がそれた。

雷真が横から剣を蹴ったのだ。客席がとよめく。高速の刀身を精確に蹴り飛ばすなど、こちらも並の技量ではない。

蹴られたケルビムは空中で人間型に戻り、両手のブレードを構えた。

「ふん、一対二とは面倒だな。ならば——これでどうだ？」

ロキが魔力を練る。その高まりに呼応して、ケルビムの翼が展開した。

翼は短剣のコンテナを兼ねている。棘のような形状の小さな刃が十二本、一斉に翼からせり出し、切り離されて、滞空した。

（まずいな……）

雷真のあごを冷や汗が伝った。短剣は別々の標的を一度に狙える。雷真と夜々が同時に狙われることがあれば——謎を解かれる危険がある。

「ロキー やめてー」

不意に、誰かの叫び声が聞こえてきた。

フレイだ。フレイがラビの背中にしがみつき、舞台に飛び上がってくる。

「やめて、ロキー どうして、ライシンと……!?」

「寝言を言うな。オレたちは敵同士だ」

「でも——」

「こい、ケルビムー」

フレイを無視して命令を下す。ケルビムは大剣に戻り、ロキの手に収まった。手が触れた瞬間、魔力が刀身に行き渡り、支配力が格段に跳ね上がった。



一拍置いて、夜々ばりの速度で踏み込んでくる。

巨大な剣がうなりをあげる。と同時に、十二本の短剣が猛禽のように襲いかかってきた。雷真と夜々は必死でかわし、そらし、手刀で叩き落とす。

その隙を、ロキは決して逃さない。

大剣を振って、雷真と夜々を一度に狙う、袈裟がけ気味のなぎ払い。ギリギリかわすと、太刀風が舞台に激突し、一メートルもの亀裂を生んだ。恐るべき威力。グリゼルダのひと振りに伍するのではないか。

そして、激しい肉弾戦が始まる。激突しては離れ、さらにぶつかる両陣営。一方が天に逃れれば、もう片方がただちに追撃する。お互いの攻撃は直撃しない。一寸を見切り、的確にいなして、かすり傷ばかりが増えていく。

ここまでの夜会が前座の余興に見えるほど、それは次元の違う戦いだった。のみならず、両者の戦いは相当にあやうい。

雷真の首筋を短剣がかすめ、夜々の蹴りがロキの眉間をかすめる。

二人とも前線で暴れるスタイルだけに、一歩間違えば術者の命がない――そうして、お互いに決定機を作れないまま、時間ばかりが過ぎていった。

既に両者とも息が上がっている。汗だくになりながら、しかし魔力は衰えない。したたる汗を拭いながら、ロキは挑発的に笑った。

「そんなものじゃないだろう。そろそろ見せろ、貴様が得た力を」

「何のことだ？」

すつとほける雷真。ロキは雷真の右腕——布でぐるぐる巻き——を示し、

「貴様が利き腕を痛めて、怪我をしただけ、なんてことはあり得ない」

「……えらく買われたもんだな、俺も」

「誰が貴様など買うか！ 自意識過剰バカが！」

「今買ってたよな？ 明らかに俺を評価してたよな？」

雷真は右腕の布に手をかけ——にやっと笑って、手を離した。

「ここはまだ、使うところじゃない」

「……なら、隠したまま消えろ」

ロキの紅い双眸が光を放つ。雷真は残り少ない魔力を高め、夜々に送り込んだ。

「吹鳴四結！」

夜々は雷真の意図を敏感に感じ取り、思いきり跳躍した。

——エリアの外、客席へと。

観衆が驚く間もなく、雷真も後方に跳躍している。くるりと宙返りをして、客席に着地。近くの名士たちがわたわたと逃げ感った。

「……ふん」



雷真が逃げたことを知ると、ロキは興奮した様子で舞台から降りた。

既に戦闘開始から一時間以上が経過していた。雷真がフィールドを離脱した以上、今夜のところは引き分けた。

戦闘終了。観客は興奮醒めやらぬ様子で、帰り支度を始めた。

雷真のとなりで、夜々が大きく安堵の息をついた。

「夜々、疲れたか？」

「それは大丈夫です。でも、ロキさんが……」

「大丈夫だ。俺に任せとけ」

笑って請け負う。夜々は深刻そうな顔をしていたが、それでも素直にうなずいた。

雷真は交戦フィールドの一角に視線をやる。

そこで、フレイが途方に暮れていた。背中が頼りないくらい細く見える。

雷真とロキが本気でやり合うことになって、悲しむのは彼女だ。

フレイのことは心配だが、雷真には急ぎの懸案事項がある。

「シャルが心配だ。戻ろうぜ」

雷真は夜々を連れ、急いでコロセウムを後にした。

キンバリーの研究室は無人だった。

開けっ放しのドアから中に入ることはできたのだが——キンバリーの姿がない。

「何だよ、誰もいないな。晩飯でも食いに行ったのか？」

「でも、シャルロットさんもしませんけど……？」

夜々が心配そうに室内を見回す。

雷真もぼんやり部屋を眺めて、それに気付いた。

キンバリーの机の上に、深めのスープレ皿が置いてある。

「何だこれ……牛乳？」

なみなみと注がれたミルク。ぶかーつと浮かんでいる何か。これは——

「雷真——これ、シャルロットさんです！」

「おい、溺れてるんじゃないのか？」

指で突っついて、上を向かせる。

やつぱりシャルだ。ぐったりしている。

「おいシャル——しっかりしろ——」

指先を小さな顔に近付けてみる。呼吸——していない！

「何やってんだこいつは——急いで人工呼吸……ってやりようがねえ——」

「夜々が心臓マッサージします—」

「そうだな、女同士なら触っても——」

「うっかり力加減を間違っても事故ですし」

「やめろ— やっぱダメだ—」

「騒がしいな、どうした」

「シグムント—」

開け放たれた窓から、ばさばさとシグムントが入ってきた。

外を見張っていたらしい。

シグムントはすぐに状況を見て取って、

「私がやろう。案ずるな、私はシャルに産湯をつかわせたこともあるのだ」

前足とあとで器用にシャルを引き上げ、仰向けに寝かせる。

腹部に顔を押しつけ、一秒。タメを作ってから、ぐっと押す。

ぶふっと、シャルが牛乳を吐き出した。

げほげほとむせる。人工呼吸をせずとも、息を吹き返した。心臓は動いていたようだ。

マッサージをしなくて正解だった。

雷真はほっとして、シャルに顔を近付けた。

「心配させやがって。何やってんだよ、おまえ」

「ライ……シン……？」

シャルは涙目で雷真を見上げ、そして、自分が全裸であることに気付いた。

「ら……ラスターカノン！」

不安定な魔力がシグムントの体に流れ込む。不安定でも、さすがは（十三人）のひとり。魔術はきっちり発動し、シグムントの口からまばゆい光が放たれた。

五分後、雷真はぶすつと仏頂面で、崩れた本棚を始末していた。

ちりちりになった髪、火傷のあとが痛々しい。

雷真と夜々、駆けつけたアンリが後片付けをしている。

「そ、その……だから、謝ってるでしょう！」

シャルは机の上に立ち、顔を赤くして、か細い声を張り上げた。

「小さくなくても、お風呂くらい入りたいじゃない！」

「何で牛乳なんだよー 固まった牛乳で窒息するとかどういうギャグだー」

うっ、と返事に詰まる。夜々が何かに気付いたらしく、はたと手を止めた。

「まさか——こないだシャルロットさんが言ってたアレ……!?」

「言っちゃだめー 言ったら絶交よー」

「ふむ。牛乳風呂に入れば、胸が大きくなるという伝承か？」

「ただ黙りなさいシグムントー お昼のチキンをはちの巣にするわよー」

雷真らいしんはずるり、とすべって、半眼になった。

「……大きくなるとか初耳なんだが。肌が綺麗きれいになるんじゃないか？」

「なるほど、事情はわかった」

冷え切った声が聞こえてきて、一同はそろって硬直した。

青ざめたキンバリーが、ドアにもたれて立っていた。

「つまりだ、シャルロット。多忙どうぼう極まる私が講義を休講にし、厚意で解決法を探し回っているあいだ、君は小さくなったのをいいことに遊び半分で牛乳風呂ぎゅうにふろなど試し、あげく、私の研究室をこんなにしてくれたというわけだな？」

キンバリーが怒るのも無理はない。本棚は熱にあぶられて煤すすけ、魔術書や資料が散乱している。燃え尽きなかったのがせめてもの救いだ。

「……すみません」

小さな体をますます小さくするシャルロット。このまま消えてしまいうさうだ。

雷真は少し気の毒になって、シャルをかばって頭を下げた。

「俺おれからも謝る。許してやってくれ、先生」

「他人事ひとことのような口をきくな。責任の半分は君にあるんだぞ」

「何でだー 俺は被害者の側だろ!?」



「まあいい。貸しということにしておく」

「またか!? 俺、あんたに何個の借りがあるんだよ!?」

「借りの中には、今回のシャルロットの件も含めておけ」

キンバリーは表紙の焦げた本を拾い上げ、

「棚を引っくり返して、失われたものがないか確認したい。君は邪魔つけなシャルロットを連れて、外に出ている。絶対に目を離すなよ」

「わ、わかった……」

シャルは小さいが、そのぶん自由が利かない。分厚い本に挟まれてもしたら一大事だ。かと言って、放置して何かあつても困る。

雷真は大人しくシャルを抱き上げ、両手に包んで、階段前の休憩所に向かった。

「シグムントは残ってくれ。話がある」

キンバリーに呼び止められ、シグムントがそちらに戻る。

夜の校舎はひどく静かだ。休憩所で二人きりになると、その静けさがいつそう重く感じられる。シャルは急に弱気になったらしく、ぼつりとこんなことを言った。

「……私、一生このままなのかしら?」

「そう悲観的になるな。キンバリー先生が何とかしてくれるさ」

「そんなの、わからないじゃない」

感情的に反論する。不安のあまり、いら立っているようだ。

雷真は方向性を変えて、明るく慰めを言ってみた。

「小さくたって、いいことはあるだろ。さっきの牛乳風呂とかさ」

「簡単に溺れたわよー それに……あの量じゃ、冷えるのがすごく早いのに」

「け……ケーキ食い放題だぞ？ おまえ、甘いもの好きだろ？」

「スポンジがガッサガサで、すごくのみにくいわ。それに……何を食べても美味しくないの。えぐかったり、痛かったり……」

小さくなるということは、全然、いいことじゃないのかもしれない。

雷真はシャルの肩をそつと小突いて、

「大丈夫だ。助けてやる。絶対」

「……ごめんなさい」

「何を謝ってんだ。おまえのせいじゃないだろ」

じわつと涙ぐむシャル。小さすぎて雪にはならないが、間違ひなく泣いている。

「……泣くなよ。バカだな」

「だって……私、貴方の足を引っ張ってばかりじゃない……っ」

「違う。おまえには何度も命を救われた。あの防衛印だって、俺を護ってくれた」  
雷真はシャルを見下ろし、優しく笑いかけた。

「悪かったな。おまえの大事なものを、壊しちゃって」

「……おばあさまが言ってたわ。お守りは、なくなったり、壊れたりしたときに、本当の力を発揮するんだって」

シャルは目元をぬぐい、雷真の手の中で微笑んだ。

「貴方の身代わりになったのなら、いいわ」

ふたりのあいだを、あたたかな感情が流れる。そのとき――

「いい雰囲気のところ悪いがね、（下から二番目）。君の相棒が私の研究室を現在進行形で破壊しているんだが？」

突然、廊下の向こうからキンバリーの声がかかった。

そのすぐ横で、のぞき見中の夜々が、ばさばきとドアを握りつぶしている。

「な、何もない雰囲気じゃねえー でもわかったー すまなかったー」

その夜はシャルをキンバリーにあずけ、雷真は寮に戻った。

シャルのこと、ロキのこと、そしてアリスのこと。

さまざまな思考が眠りを妨げ、なかなか寝付くことができない。

だが、眠れないくらいなら、まだよかった。

翌朝、雷真は最悪の目覚めを迎えることになる――



「らういりしうんうっ」

ぞくり、と真冬のような冷気を感じて、雷真は飛び起きた。

髪を逆立てた夜々が寄ってくる。今ならドラゴンだつてひねり殺せそうだ。

「何だい？ 何で朝っぱらからキレてんだ!?」

夜々の後ろで、がるるるっ、と犬のうなり声が聞こえた。

驚いて見ると、部屋の入り口にガルド犬がたむろっている。犬に囲まれているのは真珠色の髪の乙女。フレイが目一杯涙を溜めて、立ち尽くしていた。

「フレイまで……何の騒ぎだよ？」

「これです！ フレイさんが持ってきてくれたんです！」

夜々が紙切れを突きつける。学生新聞の号外らしい。見出しは――

「祝☆オルガ・サラディーン嬢ご婚約！」

オルガの美しい顔写真に添えて、雷真の顔写真も掲載されていた。

「お相手は、日本からの留学生、ライシン・アカバネ……！」

声が震える。ついでに体も。雷真は新聞を奪い取り、あわてて記事を読んだ。

苦手な英文を必死で読み取る。記事は雷真を讃える内容だった。いわく、編入当初こそ最低の成績だったものの、魔術噴い騒動を解決に導き、夜会でも快進撃を続けている実力派。その才能は学院生も広く知るところとなり——うんぬん。

オルガの談話「彼はとても情熱的なんだ。昼も、夜もね」。

「あいつめ……あることないこと……」

昨日、食堂で話しかけてきたとき、オルガは初めて会うような口ぶりだった。あの場に居合わせた者は、二人が何でもないことくらい、すぐにわかりそうなものだ。

それなのに、この記事。アリスは前もって新聞部に手を回していたのか。そうでなければ、こんなタイミングで、こんないかがわしい記事が出るはずもない。

夜々は泣きながら、雷真の腰にしがみついていた。

「こんなの嘘ですよ？　だって雷真には、許婚さんがいるんですよっ？」  
 「当たり前だ——と喉まで出かけた言葉を、雷真は理性でのみ込んだ。

「ほ……本当だ。俺は……オルガと婚約……した」

「そんな——あの女狐にどんな弱みを握られたんですかっ!?」

「弱みなんざ……握られてない。俺は本当に……あいつに惚れたんだ」

「じゃあ雷真——本当にあのひとをはらませたんですか!?」

「はらむって言い方やめろ——つか、そんなの記事になつてないだろ!?」

「本当のことを言ってくださいー」

「その……まあ……そうだー」

やけくそで叫ぶ。夜々はびきーんっと硬直した。

フレイの眼から大粒の涙がこぼれる。あふれる涙を拭おうともせず、フレイはとぼとぼと部屋を出て行った。思わぬシヨックを与えてしまったようだ。

「あ、おい、フレイー ちょっと待て——」

追いかけようとする雷真の腕を、夜々が「がしっ」とつかんで止める。

夜々の瞳に輝きはなく、古井戸みたいに真っ暗だった。

「おい……無茶するなよ、夜々……？」

「うふふ……雷真は……馬鹿です……本当に……ふふふ……♡」

夜々は雷真に手を伸ばし、首を絞めようとして——やめた。

ひくつとしゃくり上げ、うわーんと泣いて走り去る。

珍しい反応だ。こちらも、よほどシヨックだったのか。

二人とも、完全に誤解させてしまった。先のことを考えると頭が痛い。

「朝っぱらからうるせーぞ、ライシンー」

寮監が怒鳴り込んできたが、雷真にはもう、言い返す気力もなかった。

「悪かった。気をつける……」

「何かあったのか？ まあいい。おまえに客だ」

顔を上げると、寮監の後ろに見覚えのあるメイドがいた。

雷真を見る目が冷ややかだ。あふれる敵意を隠そうともしない。

「ミスター・アカバネ。本日午後、お嬢さまが紅茶をご一緒したいと」

「……ちよいどいい。俺もぜひオルがお嬢さまに会いたいと思つてたところだ」

「では、お迎えに上がります。貴方がどこにいらしても」

慇懃に礼をして去っていく。寮監は怪訝そうにしたが、何も言わなかった。

その日、夜々が戻らないまま、雷真はひとりで授業を受けた。

午後の授業を終え、講堂で惴然としてゐると、予告通りにシンが現れた。

「お迎えに上がりました。ミスター・アカバネ」

「さすがだな。俺を見張つてるのか」

「左様で」

「……徹底してるよな、あんたも。あのお嬢さまの言いつけとあらば、そんな格好も辞さないってんだから」

「お嬢さまのご命令とあらば、たやすいことです」

先に立って歩き出す。雷真はため息をついて、シンの背中を追った。



アリスの変身魔術（虚像）の効果で、シンの背丈は雷真より少し低くなっている。だが、威圧感はない。

「あんた、体はもういいのか？」

「私は（完全なる個）——ではありませんが、それを目指して創られた者です。あの程度の損傷は、とうに修復されました」

「そうか。よくはねーが、よかったな」

「ありがとうございます」

「……前から思ってたんだがよ」

シンは不審そうに、肩越しに視線を寄越した。

「俺にそんな態度を取る必要はねーぞ。普通にしろ」

「……とおっしゃいますと？」

「その回りくどい敬語をやめろって言っただ。敬意ゼロなんだしよ」

「それはできません。主が下に見ている者となら、私も対等に付き合いたしましょう。ですが、主が対等に見ている方は、私と対等ではありません」

「あいつ……俺のことを対等に見てるか？」

「見ていますよ」

嘘つけ。獲物か、玩具くらいに思ってるだろ。

「ですが、サラディーン家のメイドは完全無欠ではありません。主従の分を踏み越えて、下衆な男の厚意を優先することもあるというもの」

シンは足を止め――

「くたばれ、くそ野郎」

振り向きざま、こぶしをぶんと振った。

魔術による攻撃ではない。だが、見た目と実際のリーチに大きな差がある。余裕をもつてかわしたつもりだったが、雷真の鼻先を風圧がかすめた。

「おや、お気に召しませんでしたか。対等に扱ってみたのですが」

「明らかに下に見たろ！ あわよくば、ぶん殴る気だっただろ！」

シンは愉快そうに笑って、再び歩き出した。戸惑いながら、雷真も後を追う。

ふざけた？ このシンが？

今――ほんの一瞬、シンの内面に触れたような気がした。

4

シンが案内したのは、学生食堂の裏手にある〈大庭園〉だった。

いくつかの噴水を中心に庭木の迷路が造られ、芝と花壇が広がっている。講義を終えた

学生たちが、思い思いの場所ですわらっていて、華やかだ。庭園の中央には屋根つきの休憩所があり、そこにオルガ——否、アリスが座って待っていた。

「やあ、きてくれたね、ライシン」

「……こないわけにいくか」

「そんな願するもんじゃないよ。ほら、みんなが見ている。笑顔、笑顔」

彼女が言う通り、好奇心いっぱい視線が無數に突き刺さっている。

ひきつった笑顔を浮かべながら、雷真は声を殺して怒鳴った。

「おまえの目的は何だ！ 何で婚約する必要があつた！」

「なぜって、君のことが好きだからに決まってるじゃないか」

ぼつと頬を染めて、雷真の胸を突つく。

「つまんねえ猿芝居をしやがって……」

ぶん殴りたい。できるわけもないが。

「さあ、こっちへ。ティータイムといこう」

休憩所には既にティーセットが用意されている。シンのほかにも使用人がいるのだろう。淹れたばかりの熱い紅茶がポットで湯気を立てていた。

雷真は乱暴に腰を下ろし、作法もへつたくれもなく、スコーンにかじりついた。

「さっきの質問に答えろ。何で婚約なんだ。新聞部にまで書かせやがって」

「実は今、オルガに見合いの話が持ち上がったってね」

優雅な手つきでカップを持ち上げ、然らすような間を取る。

「相手は名家のご嫡男さ。オルガにとつても悪い話じゃない。でも、相手は早期の挙式を望んでいてね、そうなるオルガは卒業を待たず退学するハメになる」

「自主退学……？　ここは榮えある王立機巧学院だぜ？　卒業資格だけでもハクがつくし、そもそもオルガは（十三人）——魔王になるかもしれないんだぞ？」

「お相手は、そんな肩書きがいらないくらいの大物ってことさ」

紅茶の香りを楽しんから、そつと唇をカップにつける。

「それに、夜会はお遊戯じゃない。命を落とす危険もある。オルガはこの美貌だからね。ご両親も、お相手も、オルガに瑕をつけたくないだろう」

「その見合いを、俺との婚約騒動で破談にしようってか」

「そうなれば、オルガはもうしばらく学院にいられるってわけさ」

「そんなことなら、ほかにいくらでも適当な奴がいるだろ！　何で俺なんだ！」

「だから言つたじゃないか。僕は君と結婚したいんだよ」

「嘘つけ！　そもそも——俺みたいな東洋人、オルガの両親が認めるかよ」

「まあ、君がどこにでもいる東洋人なら、すぐに抹殺されただろうけど」

「おい！　そんな事態に俺を巻き込むな——」

「ところが、そうじゃない。アカバネの血縁者がまるまる手に入り、その子孫を残すことさえ可能なんだよ。しかも君は、叛逆の王子から国を救った英雄だ」

「英雄……俺が？」

「一方でライコネン中将に敵対した悪漢でもあるわけだけどね」

雷真は閉口した。こいつ、何でも知ってるな……。

「既に英王室は君をマークしている。そのうち勲章が授けられるだろうよ。そうなれば、オルガの家も君を侮りはしない。それに――」

アリスはふっと笑って、カップを置いた。

「君を選んだ別の理由がある。君にまつわる噂が信憑性を高めてくれるのさ」

「……どんな噂だよ？」

「どうしようもない女たらしで、異色家の変態だつてね。君にはらまされたつて言えば、みんな信じるだろう？」

「信じねーよー 信じゃない……よな？」

「夏休みに事故を起こしたんなら、僕はそろそろ異変に気付くわけだね」

「気付くなー つか、みんな信じゃないよな？ な!?」

すごく不安になる。事実無根もいいところだ。

同時に、嘘の臭いも嗅ぎ取っている。

アリスが言ったのは、実にもつともらしい理由だが——どこかおかしい。

無駄なりスクを冒しすぎている。呪詛返しを覚悟でシヤルに呪いをかけたし、オルガの厳格なイメージを崩して、スキヤンダルを演出している。カンのいい者なら、このオルガが偽者だと気付くかもしれない。

シンが無言のまま、アリスのカップに紅茶を注いだ。その表情は硬く強張っている。何か知っているようだが、訊いたところで口は割るまい。

雷真は深追いせず、別の切り口から揺さぶることにした。

「まあ、ちようどよかったぜ。おまえに訊いておきたいことがあった」

「僕に？ 嬉しいじゃないか。僕に興味を持ってくれたのかい？」

「おまえつつーか、おまえの親父——」

「ここにいたのか、バカ弟子」

いきなり声をかけられて、雷真の言葉が引つ込んだ。

まったく気配を感じさせず、真後ろにグリゼルダが立っていた。

「ん？ 何だ？ 挙動不審だな？」

「何でもないデスー 何の御用でしょうかー」

「うむ？ 用件は二つ——いや三つある。まずは貴様のカリキュラムの話だが」  
機嫌よく紙切れを取り出す。雷真が提出した申請用紙だ。

「受理したぞ。私の講義を取る気になったようで大変結構」

「ああ……まあな」

「二つ目の用件は、これだ」

今度は封筒を取り出す。既に封が切つてあるが、手紙のようだ。

「貴様宛の手紙を預かっている……のだが、渡す前に三つ目の用件を済まそう。実は今、そこで面白い話を小耳に挟んでな。貴様が――」

にこにこと笑いながら、グリゼルダは言つた。

「婚約したという、バカな与太話なんだが」

ひたいに青筋が立っている。殺気があたりに満ち、鳥が一斉に飛び立った。

……アレ？ 俺、死んだ？

「貴様という奴は……私に遠回しの求婚をしておきながら……っ」

「してねえー あんたの頭はどうなつてんだー」

「挙げ句、捨てた女にその暴言……こんなに血がたぎるのはあの戦争以来だ……」

剣の柄尻に手が伸びる。その手を制して、アリスがすつくと立ち上がった。

「おやめください。偉大なる先達、〈迷宮の〉魔王陛下」

「これは師弟の問題だー すっこんでいろー」

空気が震えるほどの怒声。しかしアリスは怖じもせず、堂々と意見を述べた。

「学生の恋愛に口出しをされるなど、教授の領分を踏み越えています。たとえ——貴方が  
ライシンを愛しているのだとしても」

「なっ、ちち違う！ わた、私はただ、修行中の身のあり方というかをだなっ」

「魔術師の探究がそうであるように、愛は人間の本性に基づくもの。生まれながらに人間  
が持つ根源的な自由——その最たるものが恋愛ではありませんか？」

「ぬ——」

「私と彼はお互いの愛を知り、結婚を誓い合ったのです。たとえ魔王陛下と言えど、それ  
をとにかく言う立場にはありません。違いますか？」

「ぐ……くっ……お……覚えていろよ、小娘——っ！」

魔王ともあろう者が、小悪党のような捨て台詞を残して逃げていく。

シンがほっとしたように緊張をゆるめる。雷真もまた緊張をゆるめ、

「すげえな、おまえ」

素直に誉めた。あのグリゼルダを口八丁で退散させるとは……。

アリスは誇るでもなく、肩をすくめて苦笑した。

「戦場で向き合ったんじゃ、到底相手にならないだろうけどね。でも、ここは平和な学院  
で、議論に腕力は無関係。巨大なドラゴンやピリヤードが苦手なのさ」

なるほど。感心していると、アリスは雷真のすぐとなり腰を下ろし、



「惚れ直したかい？」

「もともと惚れたつもりはない」

「僕を傷つけて楽しいかい……？」ぐすつ。

「嘘泣きやめろ」

「じゃ、やめよう。それで？ 僕は惚れ直したかと訊いたんだよ？」

「……惚れ直しました」

「僕もさ、ライシン」

びとつと密着して、しなだれかかってくる。

周囲から、学生たちのざわめく声が聞こえた。

「見ろよ、あの睦まじい様子」「やるなあ、学生総代」「私のオルガさまが……っ」  
感嘆の声。やつかみや殺気も交じっている。

「それで、君が訊きたいことって？」

直前の会話を覚えていてくれたらしい。雷真は改めて口を開いた。

「決まってる。おまえの親父のことだ」

「ライシン——こんな人の多いところで話すのかい？」

わざとらしく驚く。アリスは「仕方ないな」とつぶやいて——

雷真の首筋をちよろつと舐めて、耳の付け根にキスをした。

ぞくぞくっと甘い快感が走り、雷真は飛び上がりそうになった。

「おまえー　こんな人の多いところで！」

「静かに。僕は愛し合ってるんだよ？　このくらいするさ」

雷真を押さえ込み、ちゅっちゅつと耳たぶをもてあそぶ。

それから一分近く、アリスと雷真は「いちゃいちゃ」していた。

アリスが周囲に視線をやる。目が合った学生たちは、そそくさと離れて行った。

間もなく、庭園には雷真とアリス、そしてシンだけになった。

「いい具合に気を使ってくれたみたいだね。じゃあ、話を続けよう」

雷真は舌を巻いた。計算で周囲を動かす——恐ろしいやつだ。

そう思つてこの場所を見ると、もうひとつの「計算」に気付く。屋根があり、迷路の中

——遠くから唇を讀まれにくく、周囲にも気を配りやすい。最初から内緒話をするつもり

で、この場所を指定してきたのだ。雷真の心理さえ讀んでいる。

雷真は警戒心を強めながら、気になっていたことを訊いた。

「おまえ、学院長が父親だつて言つたよな？」

「言つたね」

「つまり、おまえが独逸軍に潜入していたのも、アンリを人質に取つてシャルを脅したの

も、学院長の差し金（サシカネ）つてことか」

「そうだよ」

「……学院長は何で、シャルに自分を暗殺させようとした？」

「言わなかったかい？ 学院と英<sup>イギリス</sup>国を仲<sup>なや</sup>違い<sup>あひだ</sup>させるためだよ」

「まさか……学院は英<sup>イギリス</sup>国からの独立を狙<sup>ねら</sup>ってる……のか？」

学院が自治権を守ろうとするのは当然のことだ。このご時世、これほどの学院が一大国に与<sup>よ</sup>ずしていいわけもない。だが——自治権闘争<sup>しゅそう</sup>にしては、あまりに手段が汚い。

学院長の野心を疑うのもまた、当然のことだ。

「あの狸親父<sup>たぬしやうぢ</sup>は、一体何を考えてる？」

「その質問は無意味だね。パパの考えることなんて、パパにしかわからないさ」

「学院長はなぜ、スパイなんて真似<sup>まね</sup>をおま<sup>ま</sup>えにさせた？」

「……どういう意味だい？」

「独逸軍に潜るのも、そこからグランピルに潜るのも、何重にも危険な橋だ。なぜそれを実の娘にやらせる？ 学院長には、ほかにも駒<sup>こま</sup>があるんだろ？」

なめらかだったアリスの舌が、不意に鈍った。

意図的な沈黙とは違う。答えを探しているようにも見える。

黙<sup>もく</sup>り込む主<sup>なうし</sup>を、シンがじっと見つめている。

やがて、アリスはどこか遠くに目をやって、白々しい口調で言った。

「知らないよ。僕はただ、パパが言う通りにやるだけさ」

理由はわからないが、雷真は急に腹が立ってきた。

「——なぜ訊かない？ おまえは俺と夜々に較されるところだったんだ。そんな目に遭わされて、なんで黙っていられる？」

「無駄だからさ」

「……無駄？ 訊いても教えてくれないってことか？」

「そうじゃない。僕が訊けば教えてくれるよ。魔術世界の根本原理、世界秩序の構築理論、協会や学院の意義、その限界、そういった理屈をえええんとね」

鬱陶しそうに髪を払う。

「僕らとパパは言語が違うんだよ。僕らの言葉が通じる次元に、パパはいない。どうしてほかの誰かじゃなく、僕にやらせるかって？ そりゃあ僕が優秀だからさ。何てったって、一九世紀最強の魔術師エドワード・ラザフォードの娘なんだよ、僕は」

そう言ったアリスは、皮肉っぽく笑っていた。

「噛み合わない議論ほど無駄なものはないよ。のみ込むしかないなら、モメたりキレたり、の労力が惜しい。そんなことをしている間に、僕はもっともつと力をつけて、先に進んでいなくちゃ。……僕には時間が足りないんだよ、全然」

どういう意味だ？

雷真が次の言葉を探しているうちに、アリスは素っ気なく身を離した。

「行くよ、シン。僕もライシンも、お茶は十分楽しんだ——」

「待て——」

帰ろうとする恋人を追うように、雷真はアリスの腕をつかんだ。

「俺は……他人の信条をとにかく言えるほど偉くはない。だが、やっても無駄——なんていう理屈で、初めから対決を放棄するような生き方は……好きじゃない」

「……なら訊くけどね、ライシン」

ほんの少し揺れる声。

アリスは老いた賢者のように、静かな眼で雷真を見下ろした。

「僕の寿命があと一年だと言ったら、君は僕を愛してくれるのかい？」

——ただのたとえ話か？ それとも、お得意の演技や嘘か？

いずれにせよ、まさに嘔み合わない議論だ。

「この次はぜひ、答えを聞かせて欲しいね」

ふっとはかなげに微笑んで、アリスは迷路を出て行った。

アリスから解放されると、雷真はまずトータス寮に向かった。

雷真の部屋は無人だった。夜々の姿はない。キンバリーの研究室にいるのかと思って、駆け足で理学部へ向かう。

そちらでは、アンリの笑顔が迎えてくれた。

「あ、ライシンさん。キンバリー先生にご用ですか？」

テーブルの上でシャルがあわてて体を隠す。なぜだが、フリフリのドレスを着ていた。玩具の人形服をアンリが着せていたらしい。

「夜々を知らないか？」

姉妹は顔を見合わせた。代表して、アンリが答える。

「いえ。夜々さんは、朝から一度もきてません」

「そうか……。どこ行ったんだ、あいつ」

「何よ。ケンカでもしたの？」

「ん、まあ……」

シャルとアンリは雷真の婚約騒動を知らないようだ。

それならそれでいい。こちらから問題をややこしくする必要はない。

今考えるべきは、夜々のことだ。

（まずいな。夜々がいないと、夜会に出られねえ……）

夜々は相当にシヨックを受けていたようだ。

またぞろ敵に捕らわれているんじゃないかと心配になる。

「——いや、そうそう同じ間違いは繰り返さない」

以前、アリスの奸計かんけいにはまったときとは違う。あのときよりも、雷真と夜々の結びつき、信頼は大きくなっている。容易につけこまれたりはしない……たぶん。

それでも、ふてくされて戻ってこない可能性はあった。

（仕方ない、夜々のことは硝子しよこさんに頼もう）

ついでに、最悪の場合に備えて、いろいろか小策せうさくをつけてもらおう。

そんなふうを考えて、雷真は理学部一階のロビーに降りた。そちらには代表電話があり、硝子に連絡をつけられる。

電話を借りて、受話器を手にした途端、重厚な扉が押し開けられた。

突っ込むような勢いで、顔面蒼白ぜんめんそうはくの男が飛び込んでくる。

すらりとした長身に、蚊のように刺々せんせんなオーラ。上着のないベスト姿で、色つき眼鏡めがねをかけた男——シンだ。

「どうした、シン。また俺おれに、嫌がらせしにきたのか？」

シンはすぐには答えなかった。様子がおかしい。

雷真は受話器を置いて、シンの方に近寄った。シンは死人のように青ざめている。演技

では……ない。少なくとも、極度の緊張にさらされているのは本当だ。

「おい、どうしたんだ。何があつた」

「お嬢さまが……その、これはあくまでも推論にすぎないのですが」

「言えー」

「かどわかされました」

——何だつて？

アリスと雷真が別れてから、まだ一時間と経っていない。

この短時間に？ このシンが護衛についていて、あのアリスが？

そんな真似が誰にできる？ アリスのバックには、学院長がいるんだぞ？

「誰にやられた？ アリスのことだ。もうつかんでるんだろ？」

「おそらくは——〈十字架の騎士団〉首魁、ローゼンベルク卿」

とつさに理解できない。

単語ははつきり聞こえていた。ただ、信じられなかっただけで。

十字架の騎士団——ローゼンベルク。

まさか、その名を再び、学院で聞くことになろうとは……。





## Chapter 4 敗者は誰か？

### 1

「ヘ十字架の騎士団」……」

雷真は洪面になった。忌まわしい名だ。かつて夜々と硝子を奪おうとした連中——シンは重々しくうなずいた。

「はい。私が所属していた、ドイツ留学生からなる特殊部隊です」

「目的は何だ。今さら何をしようとしている。そもそも、連中はバラバラになって——学院に残ってるのはもう、あの双子だけだろ？」

返事の代わりに、シンはふところから紙切れを取り出した。

地図が添えられた走り書き。敵からのメッセージか。

「アルファベット——何語のつづりだ、これは。ラテン語？」

「ドイツ語です。『四半刻以内にライシン・アカバネを約束の地へ連行せよ。他言は無用、自動人形の随行も認めない。我ら、ミス・ラザフォードとともに待つ』」



「ミス・ラザフォード——アリスのことか」

「彼らの目的は、第一に私の破壊であろうと思われます」

「あんたは独逸の最新技術……（機巧兵士）つつたか」

ドイツが独自の理論に基づき、（神性機巧）として作り上げた禁忌人形。

シンはその完成形と言われている。内蔵する魔術回路（完全統制振動）により、超人的な強度、攻撃力、移動能力を発揮する。たとえ近くに魔術師がいなくとも、自身が生み出す魔力で、それを行使できるのだ。

「フラガラッハとは伝説上の神剣です。敵に投げつければ、自ら飛び、敵を倒して戻ってくる。その一撃は鎧で止めることができないとか。比較すれば、私や同型機の性能は伝説には程遠い——それでも、ドイツにとっては機密中の機密です」

「それを学院に奪われたとなりや……黙って見ているわけにはいかねえよな」  
奪還か、あるいは破壊が必要だ。

「そして……ついでに、俺への報復も済ませちまおうってか」

彼らの野望をくじき、ドイツ勢を夜会から一掃したのは雷真だ。おかげで今期の夜会、ドイツが享受する旨みはまったくない。それどころか、学院との関係悪化もささやかれている。心情的にも、戦略的にも、雷真は消しておきたい存在だろう。

だから、雷真を連れてこい、なんていう文面になる。

だが、果たして、それだけか？

何かがおかしい。気になる……が、じっくり考えている暇もない。

「話はわかった。で、これはどこの地図だ？」

「地下空洞への入り口です」

「地下……学院の？」

以前、雷真も入ったことがある。アンリと一緒に落ちたのだ。

雷真はぞっとした。あそこには、得体の知れない（何か）が棲みついている。星のまたたきのような、無数の視線を思い出す。

あの場所に、もう一度入らなければならない……。

「気は進まねえが……行くしかねえな。案内してくれ」

そのまま理学部を飛び出そうとして、足を止める。

シンがついてこない。雷真は焦れて、とがった声を出した。

「どうした、シン。モタモタすんなー」

一方、シンは珍獣でも見るような目をして、

「……私とともに、きてくださるのです？」

「仕方ねえだろ。アリスに何かありや、シャルは一生あのままだ」

「ですが、このような呼び出し、聞に決まっています」

「ああ、そうだろうよ。おまけに今、俺の側には夜々がいねえ！」

せめて、書き置きを残して行くか。キンバリーに伝えることができれば、連中がどんな強敵だろうと、どうにかできる……気がする。

だが、その結果、連中が人質を殺したら——シャルは永遠に助からない。苦い、苦い、苦笑い。雷真はむしろ可笑しくなって、笑いながら言った。

「貧乏くじだぜ、まったく。さあ、案内してくれ」

「……わかりました」

シンが先導する。周囲の注意を惹きたくないので、走ることはしない。理学部の前庭を抜け、木立ちに差し掛かったとき、見知った乙女が現れた。

青みがかった銀髪、青い着物の——

「いりり！」

「雷真殿！」

頬を染め、斜め下に視線をそらす。見惚れるくらい可憐な仕草だ。

よほど、「ついてきてくれ——」と叫びそうになった。

しかし、駄目だ。他言無用、自動人形の随伴は不可。雷真は丸腰で向かわなければならぬ。どこで連中の斥候が見張っているか、わからないのだ。

そうである以上、普段通りにふるまわなければならない。

「どうした？ 俺に何か用か？」

いろいろの表情が硬くなる。いろいろは鋭く洞察した様子で、

「雷真殿……事態はそれほどに差し迫っているのですか？」

「……何のことだ？」

「雷真殿が——その、こ、こ、こっこっこ、こここ、こんにゃくっ」

「……婚約したって話か？」

「ななな何をおっしゃるのです——そそそそんな大それたこと私は——」

あわあわと両手を振り、目の前の空気をかき混ぜる。

雷真は頭痛を覚えた。三姉妹の中では一番頭が切れると思っていたのだが、

いろいろはかすかに潤んだ瞳で、すがるように雷真を見上げた。

「ま……まことの話なのですか？」

「ああ、俺はオルガと結婚する——って、おまえ大丈夫か？ 真っ青だぞ？」

「どうかお気遣いなく……もとより私は青白い女でございます。それはもう、死人のよう

に青白い女でございますゆえ……フフフ」

「……言葉遣いも変だぞ？」

「何をおっしゃいますやら。では、青白い女はこれつきり退場します。ご機嫌よう」

きびすを返した途端、がつんっ、と屋外灯にひたいを強打する。

数歩歩いてベンチにつまずき、ゴミ箱を引っくり返し、それこそ幽霊のようにふらふらと、いろりは去って行った。

「……えらく動揺してるな。俺が婚約したって、そんなに驚くことか？」

「相変わらずモテモテでいらつしやいますね、ミスター・アカバネ。さすが東洋のドン・ファン。まさに入れ食い状態——」

「あんたまで変なこと言うなよ？ そんな台詞を夜々に聞かれてもしたら——」  
言いかけて、やめる。

夜々はいない。聞かれる心配もない。

ひどく調子が狂う。雷真はがしと頭をかいた。

「では、参りましょう」

「ああ」

先を急ぐシンに続いて、雷真も足を速めた。

## 2

十数分後、雷真は地下道にいた。

時間がない。ひと目がなくなったので、ここからは全力疾走だ。



じんめり湿った空気をかきわけ、水路ぞいの歩道を駆ける。天井には（照明）の魔具が設置され、足もとに不安はない。空気も清浄で、息苦しさは感じない。

シンと二人、派手な足音を立てて走りながら、雷真はたずねた。

「ここは何なんだ？」

「上水道として使われているようです」

「上水……つつつても飲み水じゃないよな？」

「実験用、あるいは冷却用の水でしょう——こちらです」

三叉路を右へ。いささかもためらわず、シンは曲がった。

「……あんた、慣れてるな」

「お忘れですか？ お嬢さまがグランビルのご嫡男に化けていた頃、この地下道を根城にしていました。構造の大半を記憶しております」

やはりシンも優秀だ。迷路のようなこの場所を、しっかり把握しているのか。方向感覚には自信のあった雷真だが、方位はもうあやふやだった。それでも、最深部に向かっているのはわかる。この先が、あの大空洞とつながっているのだろう。

「——？」

ふと、背後にかすかな気配を感じた。

小動物か。ネズミか何か。あるいは、よほど訓練された刺客——



敵意のようなものが漂ってくる。誰かが息を潜めて、追跡している……？

だが、こちらの足音が邪魔で聞き取れない。

「ミスター・アカバネ？　どうかなさいましたか？」

「……いや、何でもない。ところでよ、シン」

「何でしょう？」

「あんたは独逸ドイツの人形なんだよな？」

「無論です」

「それが何で、アリスに忠誠を誓ってる？」

シンが言葉に詰まる。雷真は畳み掛けるように、さらにたずねた。

「あんた、最初はバーンシュタイン——ベルンシュタインって家に仕えてたんだろ？」

それがどうしてアリスに仕えているのか。正体が露見した今も。

十数秒も沈黙が続く。答える気がないのかと思って、別のことを質問しようとしたとき、シンが静かな声でつぶやいた。

「ベルンシュタインは、もとよりラザフォードさまの傀儡傀儡でした」

「——」

「私は知りませんでした。それだけの話です。ゆえに、私は今なお、ベルンシュタインの執事執事でもあります」

「仕えてる家がにせものだった——あんたはそれで納得できたのか？」

「納得？」

ふん、と鼻で笑う。

「かく言う貴方は、何のために、このイギリスに渡ってきたのです？」  
 ちらり、と鋭い一瞥をくれる。今度は雷真が返答に詰まった。

だが——相手の本音を誤いた以上、こちらも本音で答えるべきだ。  
 重くなる舌を無理やり動かして、雷真は本当のことを言った。

「妹の……一族の仇を討つためだ」

「（元帥）マグナスを？　それはなぜです？」

「なぜ……？」

「妹君を愛していたから——違いますか？」

「……わからない。だが、俺が撫子にしてやれることは、それだけなんだ」  
 シンは何も言わなかった。

だが、かすかに——ほんの一時だけ、同類を見るような目をした。

雷真が撫子を想うのと同じように、アリスを想っているか？　そこまで惚れ込んでいるのか？　あの残酷で、危険な娘に？

そのとき、突如として通路は終わった。

レンガの足場が途切れ、いきなり開けた空間に出る。明かりがなくなり、真っ暗闇だ。天井は相当に高い。岩肌むき出しの地面が、なだらかにくだっている。

ぞくり、と寒気がきた。

闇の中に大勢の人間が蠢いているような、潜んでいるような、独特の気配。

間違いない。あの空洞だ。シンは躊躇せず、斜面を降りていく。雷真は腰からランプを抜き取って、走りながら火をともした。

「ここは一体、何なんだ。あんたやアリスは知ってるんだろ？」

「お嬢さまはご存知です。無論、学院長も」

自分は知らない、ということか？

「前に、シャルがアリスに脅迫されて、学院長を暗殺しようとしただろ？」

あのととき、シャルは時計塔を吹き飛ばし——結果的に、この空洞の存在を暴いた。

「アリスは動機をごちゃごちゃ言ってたが、結局は、この大穴の存在を世に喧伝するのが目的だった……ってことだよな？」

シンは答えない。雷真は構わず、さらに踏み込んで言う。

「あのととき、アリスはグランピルの騎男に成りすましていた。つまり、それはグランピルの——英国の意向ってことだ。英国が知りたがる学院の暗部なら、やはりこいつは研究の集大成。超高度魔術の実験場か、さもないや……」

既に実験ではなく――

「巨大な魔術装置……？」

「……やはり貴方は危険な男ですね、ミスター・アカバネ」

シンは無表情のまま、そう言った。雷真の疑問を肯定したに等しい。

つまり、この空間全体が巨大な魔術装置なのだ。

これほど大掛かりなもの、莫大な予算と労力、そして時間を費やしたはず。機巧文明の最高学府ヴァルブルギス王立機巧学院が、そこまでして欲しがるものと言えば。

「まさか――神性機巧に関係してるのか？」

「ドイツとはまったく違う方法論ですが――おそらくは」

シンが認める。雷真は足が萎えそうになった。

多くの人間を巻き込み、ときには殺害し、実の娘をスパイに仕立て上げ、権力を駆使し、大量の資金をつぎ込んで、学院長が目指しているもの。

それが神性機巧か――

「……人間を作るってのが、そんなに大事なことからよ！」

くだらない。くだらない。くだらない――

そんなことのために、撫子は……！

怒りで視野が真っ赤に染まる。歯噛みする雷真に、シンの冷静な声がかかった。

「貴方は、人間の営みをくだらないとお考えですか？」

「……なに？」

「人間が子を産み、育て、命の連鎖を続けていくのは、くだらないことですか？」

「それとこれとは別だろ！ 子どもなんぞ、男と女で作っちゃいい！」

「それが叶わぬ者もいます」

「——！」

「それに、人間をデザインできれば、よりよい未来が拓けるかも知れません」

「どういう……意味だ？」

「優れた人間、争いを好まぬ人間、法遵守精神に富む人間——そうした〈善人〉ばかりが世にあれば、人々は大国間の戦争に泣くこともなく、重犯罪者の所業に泣かされることもないのである？」

「ろ——論理の飛躍だ、それは——幻想だ——」

らしくもなく、自身の動揺をそのまま言葉にしてしまう。

今、恐るべきことを聞いた。

幻想だと切って捨てたが——それは、悪魔的な魅力を秘めた思考だった。

人間は利害の不一致で争う。今まさに大国が争っているのも、自国民の利益を守るため。どちらが搾取し、どちらが搾取されるかという問題だ。

その大国の中にあつても、支配と被支配のパワーゲームがある。

すべての人間に平等の配分などできるはずもない。人間には生まれながらに〈性能差〉があるのだし、生存に必要なエネルギーも、欲しがるものも違う。

だが、人間すべてを「あるべきように」生むことができたらずらに

万人に平穏で幸福な世界は実現可能かもしれない。現時点では絵空事、幻想にすぎなくとも——それは人類の究極的な姿、進化の行き着く先ではないか？

（違う！）

その理屈は一面で正しい。だが、決定的に間違っている……。

「……それは詭弁だぜ、シン」

「詭弁ですか？」

「連中が神性機巧マシンドロイドを欲しているのは、理想郷の実現なんかが目的小じやない。より完成された兵器を求めてのことだ。綺麗なお題目を並べたところで、底が知れてる」

「ですが、理想の第一歩として、利益を求めるのは合理的です」

それは、そうだ。社会は利益によって動く。人類全体に変革をもたらすためには、目先の〈得〉がなければ——〈報酬〉がなければ動かない。

「文明論に関して、私は素人です。世界の行く末は指導者たちに任せましょう。私はただ、お嬢さまがやれとおっしゃったことを実行するのみです」

盲従を表明するその言葉が、不思議と雷真の胸を打った。

シンの言葉は、単純な依存とは違う。

これは覚悟だ。シンはアリスを主と定め、盲従を己の正義と決めたのだ。

主のあやまちを正し、いさめる忠義もある。それは勇氣のいる、尊い忠義だ。

だが、シンの忠義は違う。アリスが間違っているなら、その間違いの結果も、罪も、罰も、主とともに引き受ける——それだけの覚悟。

それもまた、尊い忠義の形だと思った。

「そろそろ指定の場所です」

シンが速度をゆるめる。ほどなく、前方に断崖が見えてきた。

切り立った崖の下、真っ暗な闇の中に、うっすら城塞のようなものが見える。

「お手をどうぞ、ミスター・アカバネ。かなりの高低差がございます」

シンが大きな手を差し出す。その手を取るのは、気恥ずかしい以上に、気味が悪かった。

雷真は過去、シンに殺されかけたことがある。

シンに身を任せるのは肝の冷える行為だが——雷真はその手をつかんだ。

シンは自身の《完全統制振動》を発動し、雷真を抱えて浮き上がった。

宙を飛んで、すべるように崖下に下りていく。

「ミスター・アカバネ。私は貴方が大嫌いです」

「知ってるよ。何だ、いきなり」

「腐乱死体が真夏の湿気の中で醸し出す悪臭の次くらいに嫌いです」

「そこまでかよー 何が言いたいんだー」

「それでも今だけは、私を——いえ、あの腐乱しきった精神構造のお嬢さまを、信じてはもらえませんか？」

「……信じる？」

「つかの間の……刹那の信頼でけっこうです」

思い詰めたような響き。だが、すぐにいつもの調子に戻る。

「——と私が浅薄な真心を見せたところで無駄でしょう。ですから私はこう申し上げるのです。ご判断を誤れば、ミス・ブリューが救われませんよと」

なるほど。そっちは反吐が出るほど効果的だ。

やがて、シンは地の底に降り立った。

地面がぼんやり光っている。遠目には大理石のように見えたが、近くで見ると魔術合金か何かだ。磨き上げたように輝いている。

駆け続けること数分、〈宮殿〉が見えてきた。

モスクに似た丸屋根のドーム。白亜のように美しい、謎めいた建造物だ。

「よくきたね、ライシン」



宮殿のバルコニーから声がかかる。そこに、アリスが待っていた。

「よう、アリス。こいつは何だ？ 宮殿……か？」

「〈愚者の聖堂〉——またの名を〈スプリガンとサイクル〉」

聞いたこともない単語だ。アルファサイクル、というのを知っているが、雷真が理解していないのを見て取って、アリスは肩をすくめた。

「〈人造靈魂〉構築装置、と言えば、何となく想像がつくだろう？」

「……聞き違いか？ 靈魂って聞こえたんだが」

「実際に魂なんてものが存在するのかどうかは別として、〈自意識〉の集合体を生み出し、空間に固着させる魔術装置だよ」

アリスはそれ以上の説明はせず、目を細めてシンを見た。

「ご苦労だったね、シン。見事、彼をおびき出してくれた」

その可能性を考えていなかったわけではないが——雷真は衝撃を受けた。

アリスが指を弾いた途端、〈虚像〉の魔術効果が失われ、間の中から次々に人影が姿を見せた。二十人超の大人数。そのうちの半数は、中世の騎士めいた甲冑を着込み、十字架をあしらった覆面をつけていた。

彼らの中から、首魁と思しき美青年が進み出てくる。

「迂闊だな、〈下から二番目〉。こうもたやすく策にはまるとは」

「ローゼンベルク……」

かつて雷真に野望をくじかれた、ドイツからの留学生。

あのローゼンベルクが、騎士団を引き連れて、そこにいた。

3

学院長公邸、その執務室にて。

豊かな口ひげをたくわえた紳士——学院長が公文書のチェックをしている。

部屋の入り口には彼の秘書官アヴリルが詰めている。アヴリルは腕時計を見ると、音もなく席を立ち、サーベルを腰に帯びた。

「うん？ どこへ行くのかね、アヴリルくん？」

「三時になりましたので、紅茶の休憩をいただきます」

「ついでに、私にもお茶をもらえんかな？」

「私をメイド扱いとはいいい度胸だなジジイ」

ざろりとにらまれて、学院長は首をすくめる。

「いや、ついでに淹れてくれんかね、ということなのだが……」

「学院長には専属のメイドがいるでしょう」

「君に淹れて欲しいのだよ」

かーっ、とアヴリルの顔が赤くなり——次いで、青ざめた。

学院長のヒゲが数本、サーベルに斬り落とされて宙を舞う。

「セクハラで訴えるぞエロジジイ」

「……私は殺人未遂で訴えたいところなのだが」

アヴリルが一瞬で間合いを詰め、抜き放った刃——その高速の一撃を、五十も過ぎた男が着座したままかわしたのだ。お互いに人並みはずれた攻防だった。

「邪魔をするよ」

そこへ、ノックもなく入ってくる者がいた。瞳には知性を、口元には謙遜をにじませている。年齢は八十近いだろうか。頭髮は真っ白で、杖をついている。

アヴリルが畏まり、あわててサーベルを腰に戻した。

「これはパーシヴァル教授総代」

「ご機嫌よう、ミス。学院長とティータイムをご一緒してもいいかね？」

アヴリルは「もちろんです」と応えたが、学院長は淡い顔になった。

「残念だよ、パーシヴァル。君は私の楽しみをひとつ取り上げた」

「ほう？ それは失敬……何のことかね？」

「アヴリルくん。すまないが、ミス・グリーンウッドにお茶の手配を頼んでくれ」

「……畏まりました」

アヴリルは一札して去っていく。パーシヴァルは勧められるのを待たず、勝手に来客用の椅子に座った。学院長もその対面に腰を下ろす。間もなく有能なメイドがティーセットを用意して、執務室に入ってきた。

メイドが紅茶を注ぎ、退出するまで、どちらも無言だった。

二人きりになると、パーシヴァルは窓の外、澄に染まる空を見上げた。

「東の田舎者どもが、土に潜って何かしているようだな」

天気の話をするような調子で、そんなことを言う。

それから学院長に向き直り、子どもの悪戯を見つけたような目をした。

「思い切ったことをしたな。おまえさんがあれを捨てるとは思わなんだ」

学院長はカップを口に運びながら、はぐらかすように答える。

「捨ててはいない。手放したただけだ」

「同じことだよ。可哀相なことをする。あれほど尽くしてくれたものを。……それとも、

おまえさん——賭けに出るつもりかね？」

「ふ……君の目はごまかせんか」

苦笑しつつ、うなずく。

「その通り。我らは帝国の支配を脱し、魔術世界に（新秩序）を打ち立てる」

バーシヴァルは愉快そうに肩を揺すった。

「滑稽な話だな。魔術師協会の庇護の下、王室の意向を無視して好きにやってきた我々が、今まさに協会の権威を拒否せんとする」

「親離れというものだよ。かつて、魔術師の祖は神の庇護を捨て去ることで、叡智と探究の世界に入った。我々は——否、魔術師はみな同じことをせねばならん。学院も、予見の子もな。あれもまた然り」

「おまえさんの行く道は親離れどころか、親殺しにも思えるがね」

「親殺しは親離れのメタファーだ。ダイヤモンドの原子配列は美しいだろう？」

学院長の眉の下、鋭い双眸に妖しい光が宿る。

「構造とは単純であればあるほど強い。世界に権威は二つも三つもいらぬ」

「おや？ その理屈では、陛下が気を悪くされるのではないかね？」

ラザフォードは答えない。

ただ、口ひげが片方の端だけ、皮肉げに持ち上がっていた。

## 4

うんざりするような再会。雷真はため息をこらえ、敵を見上げた。

シンの言ったことは本当だった。

敵はローゼンベルク。かつてロキに蹴散らされた、ドイツの名門貴族だ。

既に学院を放逐された身の上なので、制服姿ではない。かわりに騎士団の団服らしき、装飾過多の軍装を着込んでいた。

「こりゃまた、懐かしい顔が出てきたもんだな」

苦虫を噛みつぶしたような気分で、軽口を叩く。

「成績不良で夜会を追ひ出された連中が、今さら学院に何の用だ？」

ローゼンベルクはうすく笑っただけだ。彼の周囲の団員たちも、目立った反応を見せない。挑発に乗らない冷静さ……強敵だ。

雷真は油断なく相手の人数を数えた。

ローゼンベルクを含めて、人形使いは一人。騎士人形は一〇体。

そして一体、騎士たちとは明らかに違う人形が交じっていた。

金属製の機械人形。体に比して腕が大きく、一方で脚が細い。大きな装甲板が上半身を覆っている。ロキがまとうハーフマントに似ていた。

手首にはフィン状のパーツが三本ずつ、魚の背びれみたいにくっついている。明らかに刃物——攻撃時には腕からせり出し、鉤爪のように使えるのだろう。腕の大きさと、その刃物から見て、パワー押しの格闘タイプに見えた。

それにしても脚が貧弱だ。もつとも、脚力は必ずしも機動力とイコールではない。魔術で高速機動できるゆえに、脚力がいらないうという考え方もできる。

きりきりと齒車が鳴いている。何となく古めかしい。設計思想やパーツの形状も、どことなく時代錯誤の臭いがする。アンティークドールか……？

正体不明だが、はつきりしていることがひとつ。

あれは、凄まじい性能を秘めている。間違いない。

機巧兵士の方が強力なら、そちらを使うだろう。敢えてこれを持ち出したということは、シン以上の戦力と見て間違いない。

「（下から二番目）を捕縛しろ」

ローゼンベルクが命じる。騎士団は一斉に動いた。

すべるように宙を飛び、雷真を取り囲む。適度な間隔を保った理想的な包囲。逃げ道を封じてから、一歩ずつ間合いを詰めてくる。

（どうする——？）

雷真は（迷宮の）魔王の指導を受け、紅翼陣を得た。グリゼルダほどではないにしろ、生身で自動人形と戦うこともできる。

だが、相手は機巧兵士。彼らが搭載している（完全統制振動）は、基本的にシンと同じ能力だ。その攻撃力、耐久性は侮れない。

まして、ローゼンベルクには正体不明の自動人形オートマティンもある。

抵抗すれば危険——それは間違いない。だが、だからこそ、抵抗すべきかもしれない。戦力差がある以上、一度捕縛されてしまえば、もう打つ手がない。

どうする……!?

雷真ライマはアリスに目をやった。アリスは笑っている。尻にかかった獲物をなぶるような眼で、雷真の窮地を楽しんでいる……ように見えた。

それで、わかった。先ほど、シンは何て言っていた？

(そういうことかよ……!)

雷真は舌打ちをして、両手を上げ、抵抗の意志がないことを示した。

ローゼンベルクは意外そうに目を見開いた。

「ほう。迂闊な抵抗はしないと、そういうことか？」

無視して顔を背ける。雷真の代わりに、アリスが答えた。

「まあ、シャルロットを人質に取っているからね。退屈だけど、妥当な判断だ」

「——では、捕らえろ。油断するな」

騎士たちが雷真を押さえ込み、魔力絶縁の手錠をはめる。

魔力の放出を遮断され、息苦しいような、暑苦しいような、独特の不快感が襲ってくる。かなり強力な拘束具のようだ。



雷真の拘束が終わると、アリスはローゼンベルクを振り向いた。

「さて、僕はお室を納品したわけだけど——取り引きは成立かい？」

「ああ、無論だ。が……すまない。迂闊にも契約の詳細を忘れてしまったようだ。我らが得るものは何だった？」

「生きたアカバネと、スプリガンとサイクルの観測データだよ。僕らの手引きで、こんな中枢部まで侵入できた——これは僥倖だろう？」

アリスは足もとの〈聖堂〉を示す。ローゼンベルクはうなずき、

「確かに。たとえ外部からでも、これを観測、記録できたのは大きな収穫だ。我らは対価を支払うべきだろうな。たとえば——」

「学院の望みはドイツとの信頼回復。そして、MK4サンプルの譲渡さ」  
細いあごをしゃくってシンを示す。しかし——

ローゼンベルクはわざとらしく首をひねった。

「はて……俺が思うに、貴公らが得るべきは」

ふっ、と亀裂のような笑みを浮かべる。

「我らの報復だろう？」

騎士人形が一斉に剣を抜いた。

人形使いたちが魔力を充塞させ、即応態勢になる。気がつけば、彼らの配置は雷真だけ

でなく、アリスとシンをも包囲していた。

ローゼンベルクは悠然と、アリスとの距離を詰めていく。

「アカバネの血族は貰い受けた上で、我らは当初の目論み通り、裏切り者たる貴公を始末し、MK4を破壊する」

「……まあ、そうくるだろうと思ったけどね」

アリスが笑った瞬間、何かが突っ込んだ。

ずどんっ、と凄まじい衝撃とともに、魔術合金の地面に着地する。

二つの理由で、雷真は驚愕した。

今の衝撃でも地面にはとどひとつ入らなかった。驚嘆すべき強度だ。そして——  
やってきたのが、黒い着物をまとった、黒髪の乙女だったから。

「夜々——」

夜々は素早く雷真の後ろに回りこみ、えいつ、と力んで拘束具を引きちぎった。  
示し合わせたようにシンが動き、アリスとローゼンベルクのあいだに割り込む。

夜々は雷真をかばうように立ち、油断なく騎士たちをにらみながら、

「無事ですか、雷真！」

「ああ。おまえ、どうやってここを突き止めたんだ？」

「言ったはずです。夜々はどこまでも、お供しますと」

「……ついできたのか」

先ほど、地下通路で感じた気配はそれか。

……いや、待て。敵意のようなものも感じたはずだが？

「それで、あの命知らずな金髪女はどこですか？ 夜々に殺される予定の」

「そんな予定はない！ 敵意の正体はそれか！」

オルガに対する、ダダ漏れの殺気だったようだ。

夜々は周囲を見回し——アリスを見つけて、びくつとした。

「あのひとは——それじゃ、まさか……!?」

「そうだ。あのオルガは偽者——」

「オルガさんだけじゃなく、アリスさんにまで手を出して……!?」

「どうしてそっちに飛躍する!? オルガの正体がアリスだったんだよ！」

ツツコミながら、雷真は胸が熱くなるのを感じた。

夜々もまた、シンと同じだ。

主を絶対の善と認め、どこまでも従う覚悟を決めている。

夜々は言ってくれた。いつまでも雷真を護ると。それは、たとえば雷真が判断を誤っても、

最後まで信じ抜くという覚悟——徹底的な負託だ。

だからこそ、俺は間違っ**て**はいけない。

雷真は決意も新たに、騎士団と正面から対峙した。

ローゼンベルクは面白そうにアリスを見た。

「どういふことだ、アリス？」

「愚問だね。つまり、こういうことさ」

次の瞬間、騎士団のさらに外周を、大勢の人影が取り囲んだ。

学生の制服から装飾を取り払い、実用性を高めたような戦闘服。警備の制服とよく似ているが、白と青のカラーリングが決定的に違う。通常の機体よりもふた回り大きな、特別仕様の量産型自動人形を連れている。

夜々も驚いた様子で、もの珍しそうに彼らを眺めた。一応は警備のようだが——雷真も夜々も、初めて見る連中だった。

「こいつら……何だ？」

「(攻撃衛士隊)。迎撃や侵入者排除が専門の特別な部隊さ」

戸惑う雷真に、アリスが説明してくれる。

「警備は理事会の管轄だけど——彼らは学院長直轄だ」

つまり、学院長が動いた！

アリスは余裕たっぷりの口ぶりで、ローゼンベルクに嫌みを返した。

「迂闊だよ、ローゼンベルク。こうもたやすく策にはまるとはね」

そうか。アリスは最初から、ローゼンベルクと対決するつもりだったのか……。

シンは先刻、『お嬢さまを信じてください』と言った。

それはつまり、アリスが雷真を裏切ってはいない、という意味だろう。

アリスの目的は〈十字架の騎士団〉残党をおびき寄せ、一網打尽にすること。

そのためのエサとして、雷真を引っ張り込む必要があったのだ――

「取り引きにここを指定した理由がわからなかったのかい？」

アリスは嗜虐的な笑みを浮かべ、ローゼンベルクを追い詰める。

「君たちが〈聖堂〉を外から観測したところで、構造の半分も理解できやしないさ。学院側には失うものは何もなく――一方ここでドンパチをやらかして、カッツバルゲルが動かないはずもない」

学院の警備を利用して、敵を排除しようとした……ようだ。

だが、やり方が回りくどい。学院院长がその気になれば、こんな芝居を打つまでもなく、正面から撃破できそうなものだが……？

雷真の疑問などおかまいなしで、アリスはまともに入った。

「パパは冷徹な魔術師だ。利用価値のない君たちと和解しようなんて考えない。――これで幕切れだよ、ローゼンベルク」

アリスの台詞を最後まで聞き終えると、ローゼンベルクは顔を上げ、

「迂闊<sup>うかつ</sup>だな。実に……哀れなほどにな」

くくつ、と笑った。愉快そうに——気の毒<sup>うづ</sup>そうに。

アリスの眉<sup>まゆ</sup>がほんのかすかに動くのを、雷真<sup>らいしん</sup>は見逃さなかった。

雷真の脳内で危険信号が鳴り響く。

首筋にびりびりと戦慄<sup>せんりつ</sup>が走った。雷真は即座に金剛力<sup>こんかうりき</sup>を起動、効果を自らの肉体に適用し、弾丸のように飛び出した。

一瞬で（宮殿）のバルコニーに飛び上がり、アリスをかかえて跳躍する。

間一髪、アリスが立っていた場所に、強烈な雷電が生じた。

ヘイムガーダーが五体、バルコニーに着地する。今の一瞬で距離を縮め、一斉に電撃を放つたらしい。シンが対応する間もない、見事な奇襲<sup>きしゅう</sup>だった。

通常のヘイムガーダーより、さらに敏捷性<sup>びんせうせい</sup>が高い。雷真の反応が遅<sup>おそ</sup>れていたら、アリスは黒コゲだった。

雷真は混乱した。学院長直轄の警備が、アリスを狙<sup>め</sup>った——!?

ローゼンベルクが右手で顔を隠す。笑いをこらえているようだ。

「ふっ……そうとも——貴公の言う通り、ラザフォードは冷徹な男だ——」

雷真の腕の中で、アリスが身を硬くした。

さすがに理解<sup>りかい</sup>が早い。狼狽<sup>うづはた</sup>は一瞬、すぐさま状況を理解する。

「……そういうことか」

「どういふことだよー 説明しろー」

雷真はアリスを揺さぶる。アリスは答えない。

二人の様子を見て、ローゼンベルクはあからさまに嘲笑した。

「知恵が足りんな、（下から二番目）」

「……何せ（下から二番目）だからな。劣等生でもわかるよう言ってくれ」

「いかに我らが精鋭でも、もはや学生ではない。学院長の許可なく、こうまで自由に動けると思うか？」

「――」

「その女の狡知は身に染みて知っている。これくらいの用意はするとも」

「おい、アリスー どういふことなんだー」

「……簡単なことだよ」

らしくもなく、震えて。

死人のように青ざめた顔で、アリスはつぶやいた。

「パパに……捨てられた」







## Chapter 5

### それぞれの理由



#### 1

言われたことが信じられず、雷真はアリスの顔を凝視した。

アリスの瞳は小刻みに揺れ、焦点が定まっていない。

確かめるようにシンを振り向く。こちらも青ざめている。それでもアリスを護ろうと、敵への警戒を怠らない。鬼気迫る悲愴な気迫——とても演技とは思えない。

「捨てた、とは人聞きが悪いな」

ローゼンベルクは肩をすくめ、切り捨てるように言った。

「先にラザフォードを裏切ったのは貴公だろうか？」

「……どういう意味だ？」

雷真が聞くと、ローゼンベルクはにたり、と愉悅の笑みを浮かべて、

「ラザフォードはアリスにこう命じたはず——シンをドイツ帝国に差し出せ、とな。だが、彼女は〈学院長の使者〉という名目で、違う話を持ってきた」

「違う話……って、何だよ？」

「交換条件だ。シンを学院に委ねる代わりに、（愚者の聖堂）の外部観測を許し、さらにはライシン・アカパネの身柄を引き渡すと」

「……すぎた条件だったと思うけどね」

アリスは弱々しくつぶやいた。ローゼンベルクはうなずき、

「ああ、過ぎていた。ゆえに、我らは別ルートで学院の真意を確かめた」

「――」

「貴公の独断専行を知ると、ラザフォードは言った。『娘の行動は私の関知するところではない』とね。つまり、我らが貴公に報復しても、学院は動かぬということ」

「それで……パパと共謀して、僕をつぶしにきた……ってわけか」

「今は同情もしよう、アリス。実に皮肉な話だ。幾度となく他人を欺き、裏切りを重ねてきた貴公が、実の父親に裏切られるとはな」

やり取りは半分ほどしか理解できなかったが――雷真は驚愕していた。

（こいつが踊らされた……!?）

シンの言葉を借りれば、他人を欺くことが三度のメシより好きだということこいつが、騙し合いの勝負で読み負けた。

……感ったのだ。

最後の最後で、父親を信じた。父親への期待を、捨てきれなかった。

アリスはもう戦意を喪失している。雷真の腕の中で、されるがまま、体を丸めて震えているだけだ。シンと夜々は臨戦態勢——だが、形勢は圧倒的に不利。敵はシンの同型機が一〇体に、ヘイムガーダーが一二体もいる。

ここは地下空洞のと真ん中。包囲されて、逃げ道もない。

雷真と夜々だけなら、あるいは強攻突破も可能だろうが……。

その思考はアリスにも伝わったのだろう。アリスはこんなことを言い出した。

「……こんなときだから言っておくよ。呪いの解除コマンドは」

「やめろ。あわてて聞いたんじゃないや間違うぜ。あとでじっくり聞き出してや——」

最後まで言えない。騎士の一体が背後から突進してきた。

夜々がとつくに反応している。くるりと腰を回転させ、強烈な蹴りを見舞う。

完全統制振動はさすがの防御力。蹴りの衝撃と相手のベクトルが均衡し——

最終的に、夜々の蹴りが勝る。

騎士が弾き飛ばされる。だが、大したダメージは受けていない。空中で静止、一瞬後、

再び向かってきた。

それが開戦の合図だ。騎士もヘイムガーダーも、一斉に群がってきた。

恐るべき速度を発揮して、ヘイムガーダーの一体がアリスに迫った。指先にはスパーク

する雷電——電圧が高い。当たったが最後、確実に気絶する。

そこらにはシンが反応している。シンは鋭い蹴りを放ち、一撃で粉碎した。

夜々もまた、手近な一体をかかどでスクラップにする。単体の性能では負けていない。このまま押し切れるか……という甘い期待はしかし、すぐに否定された。

ヘイムガーダーはともかく、完全統制振動の方は難敵だった。

夜々とシンの攻撃に耐える。一撃で破壊できなければ、数に勝る方が有利だ。夜々が剣で切りつけられ、体当たりで弾き飛ばされる。ただちに援護しなければ、じり貧になる。雷真はアリスを離し、夜々の方に駆け寄った。

その瞬間を、ローゼンベルクが待っていた。ローゼンベルクから強烈な魔力が放たれ、

それは巨腕の戦士に流れ込み、強大な力を与える。

フィン状のパーツがせり出して、案の定、鉤爪となった。

アリスを狙って飛ぶ。雷真は動き出した直後——反転が間に合わない！

アリスは自らの運命を受け入れるように目を閉じた。

殉教者のようなその顔が、おびただしい血で染まる。

……それは雷真の血でも、アリスの血でもなかった。

アリスの前に、シンの胸があった。

背中から裂かれ、胸まで傷が貫通している。鉄壁のはずの完全統制振動を、敵の鉤爪は

たやすく貫通した。シンの魔力を瞬間的に上回ったようだ。

「シン……？」

アリスが呆けたようにつぶやく。

「シン……バカだね、君は……そんな深手を負ってさ……」

シンが背後の敵を蹴り上げる。巨腕の戦士は軽やかに跳躍して、ローゼンベルクのもとに戻った。シンはそちらに向き直り、あくまでもアリスを護ろうとする。

傷は相当に深い。骨や内臓が見えている。人間なら確実に致命傷だ。

「実に……遺憾です、ミスター・アカバネ」

シンは雷真に背中を向け、あたかも遺言のように言った。

「よもや……貴方を頼みに思う日がこようとは。業腹ではありますが……どうか……お嬢さまを護ってください」

ごっ、とシンの魔力が燃え上がる。体に残る力を、全部引き出すつもりだ。

「……夜々、こい」

「はいー」

騎士を蹴散らして、夜々が雷真の側に飛んできた。

その背に魔力を送り込む。それで、雷真の意図は伝わったようだ。夜々は腰を落とし、天井を向いて、力を溜めた。

「吹鳴絶衝——（ひさぎ太刀影）」

溜めた力を一気に解放。ずとんつ、と爆発的な勢いで、黒い影が天を貫いた。

凄まじい衝突音が響き、空洞の天井に穴があく。崩れ落ちる瓦礫。月明かりがひとすじ、蜘蛛の糸のように差し込んでくる。

「奴は離脱する気だ！ 追撃準備——絶対、逃がすな——」

ローゼンベルクが指示を飛ばす……が、遅い。

既にシンが動いている。さながら飢えた猛虎、あるいは荒れ狂う暴風。血があふれるのもかまわず、シンは手当たりしだいに敵を襲い、なぎ倒し、脱出の隙を作った。

雷真は魔術の起動を終えている。素早くアリスを抱えて、真上に跳んだ。

ずいぶん初速を抑えたが、アリスにかかる荷重は殺人的だった。アリスはこふつと空気を吐いて、全身から力を抜いた。……どうやら、失神したようだ。

力を加減しすぎたらしく、雷真の体はギリギリ地上に届かなかった。

アリスを右手一本で抱え、左手を伸ばす。指先がすかっと宙をかき——

その手を、夜々がつかむ。

岩盤の側面に張りついて、雷真を待っていてくれた！

夜々は雷真を地上に放り投げ、自らもびよんと飛んで飛び出した。

夜々と二人、地上に飛び出しながら、眼下をにらむ。

真下ではちょうど、シンが一〇本の剣で串刺しにされたところだった。

## 2

飛び出した先は、学院の（大庭園）だった。

「大丈夫ですか雷真」

「……俺は平気だ。それよりアリスが」

今の跳躍はかなりの衝撃だった。普通の人間なら死んでいてもおかしくない。

「アリス、しっかりしろー 大丈夫か？」

アリスはせき込みながら、のろのろと顔を上げた。

「言っただろ……あいにく僕は、半分以上、自動人形だ……」

「雷真！ 早く移動しましょう！」

夜々に急ぎ立てられ、校舎裏へと走る。

時刻は既に午後六時を回っている。本立ちにひと気はなく、見とがめられる心配はない。

今のところ、警備の姿も見えない。

追っ手を警戒しつつ、雷真は抱えていたアリスを下ろした。

アリスはその場に座り込み、壊れた人形のように、動かなくなった。

「おい、しっかりしろ。落ち込んでる場合じゃねえだろ」

「……落ち込んでなどいないさ。もともと僕は誰のことも信じちゃいない。たとえ実の父親であつたとしてもね」

「さつき、ローゼンベルクの野郎が言つてたな。おまえが俺を巻き込んだのは、学院長の指示じゃなく、おまえの独断だつたのか」

「……そうだよ。慢心……かな。僕は連中を出し抜いてやれると思つたんだ。そして——僕の勝手な行爲を、ババは有効な策略として認めてくれると」

学院長に無断で危険な賭けに出た。それでも、得があると踏めば、学院長は乗ってくる——ここまでの話を総合すると、そういう読みだつたようだ。

だが、学院長は乗つてこなかった。それどころか、アリスを殺そうとした。

「ライシン……君はチェスを指すかい？」

「何だ、やぶからほうに」

「駒こまというのはね、捨て時が肝心なんだ。一手遅くても、早くてもいけない」  
アリスの瞳が驕おごりおごりを帯びる。

「目的のためなら、女王だつて捨て駒になる。つまらない私情は捨てるべきだ。そして、ラザフォードは私情なんてこれっぽっちも挟まない。でも、僕は……」

こらえきれなくなつたように、ふふつと笑みをこぼす。



「本当は僕が目的なんじゃないかって、どこかで期待してたんだ……」

彼女が何を言っているのか、雷真には理解できなかった。

だが、彼女が痛手を受けていることはわかる。

「雷真。これから、どうするんですか？」

夜々が訊いてくる。雷真は即断した。

「とりあえず、身を隠そう。行くアテはひとつしかねえけどな」

「また先生を頼るんですか？」

「こうなりやヤケだ。今さら借りのひとつやふたつ、知るか」

キンバリーの研究室へ行くのだ。そうすれば、シャルの呪いも解ける。

「だが、移動が骨だな。学院長が囁んでるなら、警備がうじゃうじゃいるだろ」

「そのことなら、ご心配なく。既に応援を呼んであります」

夜々が誇らしげに胸を張る。タイミングをはかったように、がさがさと頭上の枝が揺れ、

着物姿の少女が下りてきた。

銀剣を腰の後ろに差した、紅葉色の髪の乙女――

「やっぱ私がいないとダメだねー雷真」

「小紫――きてくれたのかー」

「違います雷真――そこは『小紫を呼んでくれたのか夜々』です――」

「いつそ、夜々飾さまから乗り換えちゃう？」

「ふふふ、小紫（こむらさき）ったらお茶目（ちやめ）ねふふふ」ばきばきつ。

「櫛（くし）を折るな夜々——居場所（いばしよ）がバレる——」

ともあれ、助かった。小紫（こむらさき）がいれば、移動のリスクは大幅に軽減できるし——この先の活動（かどく）にも、わずかな勝機（かちげ）が見えてくる。

「よし。急いでキンバリー先生（せんせい）のところへ行こう。アリス——」

アリスはへたり込んだまま、まったく動いていなかった。

「どうした？ どこか痛むのか？」

「……放（はな）つておけよ、僕（ぼく）のことは」

「立てよ。シャルのところに行く」

「解除（かいじょ）コマンドなら、教えるよ。まず——」

「いいから、立て。呪（のろ）いはおまえが責任（せきにん）持つて解（と）くんだ」

雷真（らいしん）が腕（うで）をつかもうとした瞬間（しゅんかん）、アリスの瞳（ひとみ）が燃え上がった。

「もう、放（はな）つておけよ——」

叫（こ）んで、力任せ（ちからせ）に振り払（は）う。

雷真（らいしん）は呆気（あき）に取られて、立ち尽くした。

アリスが叫（こ）ぶところなど初めて見た。そして——

彼女が、本当に泣くところなど。

「ふふ……滑稽だろう？ 笑えるよね？ 僕は何を勘違いしていたんだろう？」

アリスはほろほろ泣き崩れ、しゃくり上げた。

「パパがどんな人間か……僕にはわかってた……はずなのにさー シンの所有を認めせるところか……壊しちゃって……僕は……何をやって……っ！」

それ以上は声にならない。顔を隠して、鳴咽する。

シャルに劣らず——あるいはそれ以上に気位の高い彼女が、ひと目もはばからずに泣きじゃくっている。日頃は自信たつぷりの顔を、痛々しいくらいにゆがめて。

アリスが背負っているものを、雷真は知らない。

シャルとアンリは彼女の計略で危機に陥り、ロキとフレイも殺されかけた。

彼女の暗躍の背景には、犠牲者もいるだろう。執行部議長セドリック・グランビルや、リゼット・ノルデンを筆頭に。

だが、それでも。

今ここで、こうして、父親に捨てられて泣いているアリスは。

どこにでもいる、か弱い少女に見えた。

雷真は慰めの言葉をかけようとして——

「泣き言なら、後にしろー」

叱り飛ばした。肩をつかんで、強引にこちらを向かせる。

「シンを取り返したいんだろ？　なら、今は言う通りにしろ！」

「……取り返す、だって？」

泣きながら、それでも皮肉げに微笑むアリス。

「バカだね。できっこないじゃないか。それに、シンはもう……！」

「あいつが簡単に死ぬか。それに、殺されない」

はつとした様子で、アリスは顔を上げた。

「連中はおまえを逃がしちゃったんだ。そして、おまえはシンを欲しがっている。なら、殺さず手札に加える——ローゼンベルクはそういう男だ」

雷真はわざと挑発的に、からかうように言った。

「どうした？　こんなこと、普段のおまえなら一秒で理解できるだろ？」

「……〇・一秒だね」

はなをすすりながら、軽口を叩く。いつもの調子が戻ってきた。

「でも、解せないな。その口ぶりじゃ、君はシンを助けたいみたいだ」

「助ける」

アリスも、夜々も、事情を知らない小柴も、目を丸くした。

「俺は恨みを忘れない。されたことには復讐したい性質だ。だが——してもらったことも、



忘れない」

「……君が、シンに何をしてもらつたって？」

「さっきだよ。シンは俺を逃がしてくれた。だから、俺もあいつを助ける」

「……あきれた男だね。そんな理屈が」

「うるせえー　グダグダ言つてねえで、手を貸せー」

アリスは打たれたように目を見張った。

顔を伏せ、表情を隠して数秒。

再び顔を上げたときには、もういつもの余裕ぶった表情だった。

「頼むだなんて、僕に借りを作りたいのかい、ライシン？」

「へっ、それでこそ根性曲がりのお嬢さまだー」

手を差し出す。アリスはその手をじつと見つめ、自嘲した。

「この手を取る資格は、僕にはな——」

皆まで言わせない。雷真は強引にアリスの手をつかみ、立ち上がらせる。

「目的のためなら、私情は捨てる。そんなつまらねえ感情は、特にな」

くしゃつとアリスの表情が崩れた。ほろほろ泣きながら、幼な子が父親にすがるように、ぎゅつと雷真の手を握り返してくる。

夜々の冷たい視線を背中に感じながら、雷真はアリスの手を引き、駆け出した。

## 3

キンバリーの研究室に、棺のような、大きな化粧箱が置かれていた。

箱は二つ。荷の到着を待望していたはずのキンバリーは、荷解きを途中で投げ出して、難しい顔で考え込んでいた。

不意に、びん、と緊張が張り詰めた。

ふところのダガーに手を伸ばし、じっと研究室のドアをにらむ。

そして、ため息をついた。

「騙ったな、（下から二番目）。バレバレだ」

口では「バレバレ」などと言ったが、雷真の隠形は大したものだった。以前よりさらに高度な隠密性を実現している。キンバリーにさえ、姿も見えず、気配も感じず、においも感じ取れなかったが——雷真が「ぎくっ」としたのは、なぜかわかった。

やがて、虚空から染み出してくるように、雷真の姿が浮かび上がった。

彼だけではない。夜々に小紫、そして……。

「アリス——」

さすがのキンバリーでも、予想していない顔だった。

アリス・バーンスタインの名で学籍を持っていた乙女。

その正体は何者か、キンバリーも既に聞き及んでいる。

「珍しい客を連れてきたな。かと言つて、無断侵入は感心しないがね」

「……そいつは悪かったが、こっちにもいろいろ事情があつたんだ。つーか、何で侵入に気付いた？ 小紫の欺瞞は完璧だっただろ？」

「君はつくづく基本を知らんな。結界や魔法円は初歩の初歩、私のような超一流の魔術師ともなれば、その私室は堅固な要塞に等しい。たやすく侵入できるものか」

「警報結界……？ だが、魔力なんて全然感じなかつたぞ？」

「私の専門を何だと思つている。君みたいな若造に気取られない程度の技量はあるつもりだ。即死トラップが発動しなくてよかったな？」

存在しなくてよかったな、とは言わない。

その意味を理解し、雷真はぶるりと身ぶるいした。

「それで、何の用だね？」

「力を貸して欲しい」

「断る」

「……まるで、普段の俺の言いざまだな」

雷真は苦虫を囁んだような顔をした。



「だが、頼む。せめて、事情を聞いてくれ」

「それで結論が変わるとは思わんがね。まあいい、話してみる。手短にな」  
椅子も勧めず、立たせたまままで語らせる。

相当切羽詰まっているらしく、雷真は早口で説明した。

アリスの正体。シンを奪われたこと。十字架の騎士団のこと。

そして、〈愚者の聖堂〉で要撃衛士隊に狙われたこと――

すべて聞き終ええると、キンバリーは深いため息をついた。

雷真が語ったことは、つい先刻、同胞がもたらした情報そのままだった。  
ゆえに――ドアを指差し、無慈悲に告げる。

「結論から言おう。今すぐ出て行け。私がしてやれることは何もない」

雷真は面喰らった様子で、根が生えたように立ち尽くした。

チクリとキンバリーの胸が刺す。

（バカが……。裏切られたような顔をするな）

雷真は納得できない様子で、

「なぜだ。そりや、あんたには頼りすぎだと思うが……せめてバックアップを――学院や  
警備の動きを探る……くらいは頼めないか？」

「私はバカが嫌いだ。学院を向こうに回して、私が動けると思うか？」

じつと雷真を見据える。雷真は答えられず、黙り込んだ。

「私は魔術師協会の人間、言わば間諜だ。当然、首輪がつけられている。私が何かすれば、協会の恩恵は台無し——これまでの苦勞も水の泡だ」

キンバリーは雷真の耳元に唇を寄せ、声を殺してささやいた。

「（愚者の聖堂）は秘中の秘——魔術師協会であっても、おいそれとは手が出せん。ほんの数か月前まで、存在すら把握できていなかった」

肩を抱き、諭すように続ける。

「学院は私をマークしている。だから、今すぐこの部屋を出て行け。私は何も見なかったし、何も聞かなかった——それが君に因ってやれる、最大の便宜だ」

「……わかった。悉かった。邪魔をした」

雷真はすんなり引き下がった。

アリス、夜々、小紫を順に見て、彼女たちを励ますように、力強く言う。

「場所を移そうぜ。ここにいちや迷惑がかかる」

そそくさと出て行く四人。誰も、恨み言ひとつ言わない。

キンバリーは奥歯を噛んだ。壁を殴りつけたい衝動に駆られる。

雷真は引き下がったが、それは、彼が行動をやめるという意味ではない。

孤立無援だろうと、勝算がなかりうと、関係がない。

道理をねじ曲げてでも無理を通す——赤羽雷真はそういう男だ。私に援護を断られた今、あいつは独りでもやりかねない……。

「何を迷ってるんだ？」

ふと、そんな声が聞こえて、キンバリーは顔を上げた。

開け放たれたドアの前に、クルーエルが立っている。

足音がまったくしなかった。気配すら感じさせない。戦場で習い覚えたことは、学院のお抱え医師になった今でも、体に染みついていゐるらしい。

キンバリーは不機嫌になって、

「ふん、ヤブ医者が。迷ってなどいない」

「癖だよ、癖」

「癖——？」

「おまえさん、イライラしていると、それをやる」

キンバリーの脚を示す。ストッキングがほつれ、伝線していた。無意識のうちに、爪でガリガリやっていたのだろう。キンバリーはムツとした。

「女の脚ばかり見ているというわけか。何の用だ」

「何の用、とはご挨拶あいさつだな……。おまえさんに頼まれた仕事だぜ」

苦笑しながら、提あげていたバスケットを持ち上げる。フタを開けると、中には丸くなっ

たシグムントと、シグムントにしがみついているシャルがいた。

……そうだった。呪い<sup>呪い</sup>が内科的に致命的な症状を引き起こしていないか、嫌がるシャルを説き伏せて、クルーエルに診察させたのだ。

「変なことはされなかったか、シャルロット」

「おい——俺<sup>俺</sup>を何だと思ってるんだ——」

「学生にも見境がない、真性のロリコン医者だろう」

「……ぐうの音も出ねえが、俺にも美学がある。元気な患者にしか悪戯<sup>いたづら</sup>しない！」

「元気なら患者ではなからう」

クルーエルは舌打ちした。無理やり気を取り直して、カルテを差し出す。

「とりあえず、ドラゴン殿の浄化は終わった。聖化エタノールで消毒、フレイザー反応も消えた。呪いの感染力は、もう無視できるレベルだ」

続いてシャルを指で示し、

「お嬢ちゃんの方には魔力安定剤をブチ込んでおいた。濃度が間違っただけりや——まあ間違っただけが——魔術が問題なく使えるぜ」

「魔術？ そんな処置は頼んでいない——」

にやり、とクルーエルは意味ありげに笑った。

「俺は気が利く男なんだよ。やっておいてよかっただろ。今となってはさ」

「何を……言っている？」

「エイミー。おまえさんは協会の戦士で、学院の教授さまだが、人間のレディでもある。レディの大半がたしなむっていう、罪のない行動があるんだぜ」

「まわりくどいぞ。何が言いたいー」

「たとえば、他愛もない噂話——とかな」

悪戯小僧のような目で、クルーエルはシャルに視線をやる。

シャルはびくつとして、それから、きよとんとした。

クルーエルの意図はすぐにわかった。キンバリーは覚悟を決め、口を開いた。

## 4

研究室を出た雷真は、理学部裏手の本立ちに身を潜めた。

遊歩道のベンチにアリスを座らせ、あたりの様子をうかがう。

数十メートル先を警備があわただしく駆けて行く——が、こちらに気付いた気配はない。小紫の（八重霞）は完全な隠形効果を發揮している。

それでも、発見されるのは時間の問題に思えた。

アリスはひと言もしゃべらない。夜々はそちらを気にしながら、

「これから、どうしましょう？」

「そうだな……おまえたち、ちよつと偵察に行つてくれ」

「偵察？ 小紫と？」

「警備の動きと配置を探れ。怪しい奴がいたら、引つ張つてくるんだ」  
目配せをする。夜々と小紫は顔を見合わせ、うなずき合つた。

それぞれが別方向に、身軽に飛び出していく。

二人きりになると、雷真はアリスのとなりに腰を下ろした。

「何へこんでんだ。らしくないぜ、腹黒女」

「……あきれたバカ野郎だね、君は。それが婚約者にかける言葉かい？」

「何が婚約者だよ。おまえ要するに、俺を護衛に使いたただけだろ」

「あるいは「豚のエサ」としてね」

「婚約者に言う言葉じゃねえな」

「……僕はどこかで、ババに捨てられることを予感してたのかも知れないな。学院を心底から信頼していたなら、君を引つ張り込む必要はなかった」

「何で婚約だったんだ？ エサにするだけなら、婚約なんて必要ないだろ」

「婚約したという名目なら、君の周囲の女の子たちはみんな遠ざかる」

「シャルロットの呪い<sup>のろい</sup>をすんなり解かれてしまったら、僕の作戦負けだ。君の怖いところは、才能や戦闘技能じゃない。周りの人間を動かす力さ」

「買いかぶりだ。そう断じる一方で、思い当たるフシもある。」

雷真が困ったときには、いつも誰かが力を貸してくれる。

「学院や日本軍から切り離すことができて——シャルロットや（剣帝<sup>けんてい</sup>）結弟は君のために戦う。だから、分断したんだよ」

なるほど。ロキが突然やる気になったのも、アリスの差し金<sup>さしきん</sup>か。

「それに、また新しい女を引っかけてるおそれもあったしね」

「色魔<sup>いろま</sup>みたいに言うなよ!?」

とは言え、グリゼルダと知り合ったのは事実だ。

「だが、それだと夜々もいなくなるぜ。さっきだって、あいつがこなかったら……」

「くるさ。そして、きたろ?」

「……確信<sup>しつぽん</sup>があったのか?」

「彼女のことは理解したつもりさ。少しはね。君に恋人ができたとしても、誰かと結ばれたとしても、夜々は君を護<sup>まも</sup>ることをやめない」

そう、夜々は言った。どんなときでも、命の続く限り雷真を護り続けると。

そして今日も、その約束を護った。

ふと、何者かの気配を近くに感じた。

緊張が走る。女子学生が二人、談笑しながら歩いてくる。

二人はこちらにはまったく気付かず、通り過ぎて行つた。学院生は全員が優秀な魔術師だが、こんな至近距離で、違和感すら覚えていない様子だ。

アリスは微笑み、感心したように言った。

「見事なステルス性能だね。以前よりも、さらに向上している」

「今までは、俺が使いこなせてなかっただけさ。こいつは天下の花柳商が組んだ魔術回路

——魔王にさえ通用した」

「大したもんだよ。僕の《虚像》よりも一段上かな」

ふっと笑つて、自分の手を見る。釣られて、雷真もアリスの左腕を見てしまう。

ずっと《虚像》で隠していたが——アリスの腕は、生身ではなかった。

形こそ精巧に作られているが、表面は金属のまま。鈍い光沢を放っている。

「ああ……八重霞で《虚像》が効果を失つてるね。そう、これが僕の体だよ」

見せびらかすようにスカートをたくし上げ、ふとももを見せる。

「見えている部分だけじゃないよ。イブの心臓ではないけれど、心肺機能の大半を機巧に

頼ってる。人間とも人形ともつかない、おぞましい生物だよ、僕は」

「……違う。おまえは人間だ」



「口では何とでも言えるさ。ベッドで僕を抱けるかい？ 養えるだろうか？」

「抱くさ。うっかり結婚しちゃった俺には、毎晩のように安眠妨害してやる」

その言葉は、アリスの胸にどう響いたのか。

アリスは顔を背け、しばらく、雷真の顔を見ようとしなかった。

「神性機巧は傷つかない」

出し抜けにそんなことを言う。困惑する雷真をようやく振り向いて、

「教父はそう予見したんだ。「始祖たるべき神性機巧は完全なる玉のごとし」とね。世界で最初に造られる神性機巧は、瑕ひとつない完璧な存在ってことだよ。言葉通りにとらえるなら、絶対に傷つくことがない」

「そんな物質、この世にあるか？ そもそも、神性機巧ってのは人造人間なんだろ。人間なら、傷もつくし、死にもするぜ？」

「人間だけど、人形だよ。魔術回路を内蔵している」

「――」

「ドイツはその予見を圧倒的な防衛力の比喩と考えた。そこで、予見に實際を近づけようと《完全統制振動》を開発したんだ――本末転倒だけどね。原子振動を完全に統制できるなら、一原子たりとも欠落しない――絶対に傷つかない人形ができる。シンにダメージを与えるのは大変だっただろう？」

確かに。一度や二度ならば、シンはケルビムの高熱溶断にすら耐えるのだ。

「でも、あのシンでさえ、雪月花や〈魔剣〉の前では傷つけられてしまう」

物質を消滅させるラスターカノンは当然として。

圧倒的な火力で攻撃されれば、魔力が追いつかずダメージを受ける。

「月の自動人形、夜々はどうかだい？」

「夜々だって、魔力が尽きたらそれまでだ。ラスターカノンを喰らえば終わりだし、それどころかケルビムの火炎刃でも——」

「でも、この先どうなるかはわからない。花柳素の人形は成長するんだ」

……そうだ。夜々には秘められた力がある。何度か、夜々のひたいに角——エネルギー

集合体のようなものが現れた。

夜々はその身のうちで、雷真も知らない力を、日々育てている。

「それでも……夜々の心はどうなのかな？」

アリスは月を見上げて、独り言のように言った。

「どんなに強固な体を得ても、君に捨てられたら、彼女の心は傷つくだろう。神性機巧は

傷つかない——その予言に、心の傷は含まれるのかな？」

「何で急にそんなことを——って、おい——どこへ行く？」

アリスはふらりと立ち上がり、ベンチから離れようとしていた。

「もちろん、シンを取り戻しに行くよ。あれを失うのはもったいない。こうなった今では……僕の唯一の財産だからさ」

そんな言い方しかできず、こんなやり方しかできなかった彼女。

その不器用さにあきれ果て、雷真は盛大なため息をついた。

八重葦の効果を解き、わざと声を張り上げて、聞こえるように言う。

「おまえ、シンを死なせたくなかったんだろう？」

「俺を脅迫したのも。ロキと対立させ、シャルを無力化し、夜々とフレイを遠ざけたのも、シンの命を救うためなんだろう？」

「シンが裏切り者として処分されそうになったから、おまえは学院長の意向に背いてまで、独りで独逸を理撃しようとした——そうだよな？」

アリスはやはり、答えない。

その沈黙が、何より雄弁に、アリスの真意を物語っている。

雷真はアリスの肩を両手でつかみ、耳元で怒鳴った。

「だったら何で、最初から『助けてくれ』って言わないんだ！」

アリスは皮肉げに唇をゆがめた。

「言ったら、どうだっていうんだい？」

「言ってくれば——もつと早く、こいつらの力を借りられただろ？」

くるりとアリスを振り向かせ、自分の背後をあごで示す。

雷真らいしんの背後にいた者たちを見て、アリスの顔色が変わった。

仔竜こりゅうにまたがった、小さなシャル。

機械人形ケルビムを引き連れたロキ。ラビを連れたフレイ。そして夜々やや。

言いつけ通り、夜々が「偵察」で引っ張ってきた面々だ。

アリスは啞然あざとして、それから少し怯おそえたように、目をそらした。

シャルはアリスの鼻先までシグムントを飛ばし、冷ややかな調子で言った。

「またしても、貴女あなたの仕業だったってわけね」

腕組みをしながら、憤然ふんぜんとして言い放つ。

「おかしいと思ったのよ。この下品なバカがオルガみたいなお姫さまと婚約なんて、天地が引っくり返ってもあり得ないわー」

「自然の摂理まで持ち出すな！ 婚約者の一人や二人、いたっていいだろー」

「二人はおかしいわー 不実よー」

「そこに食いつくなー 言葉のあやだー」

「ほんっと、どうしようもないバカキングだね。バカ時空の絶対的バカ神ね。せつかく夜会やかい

が順調なのに、また危ないことに首を突っ込んで―」

「巻き込まれたんだよ。……おまえ、事情を知ってたのか？」

「キンバリー先――じゃない、風の噂で聞いたのよ」

そうか。キンバリーが伝えてくれたのだ。

直接の手助けはできなくても――噂話を広めるくらいはできる。

「仕方ないから、優等生の私がサポートしてあげるわ。ありがたがりなさい！」

アリスは呆氣に取られた様子で、思わずと言ったふうに口を挟んだ。

「僕が君にしたことを忘れたのかい？ 君たち姉妹にしたことを？」

「覚えてるわ。本音を言えば、今すぐラスターカノンで報復したいくらいよ」

「なら……どうして、そうしないんだい？」

「貴女は、自分が殺されようっていうときに、人形を助けようとしているわ」

アリスが言葉を失う。シャルは急に氣恥ずかしくなつたらしく、

「……こ、こんなのただの氣まぐれよ！ 負け犬は大人しく助けられればいいわ。それに、

貴女を助けないことには呪いも解けないわけだし？ 貴女には訊きたいことが山ほどある

しね？ お母さまのこととか、お父さまのこととか？」

「シャルよ。いかにもとつてつけたような口ぶりだな」

「ただ黙りなさいシグムント！ お昼のチキンをホットミルクにするわよ！」

「……（剣帝）くんは？ どうしてここにきたんだい？」

今度はロキに問う。

ロキの紅い瞳が、殺気すら漂わせて、アリスを睨す。

「あいつが——（散らない薔薇）がきているというのは本当か？」

散らない薔薇。夜会における、ローゼンベルクの登録コードだ。

アリスに代わって、雷真がうなずいた。

「この目で見たぜ。連中の親玉はローゼンベルクだ」

「ならば、オレには戦う理由がある。アリスのことなど眼中にない」

「……ライシンに手を貸すと？ 君たちは対立しているんだろう？」

「ふん、あんなくだらん挑発にオレが乗るか」

小馬鹿にしたように笑う。

はかん、とするアリスに、雷真が横から説明した。

「昨夜のことを言ってるなら、ロキには俺をつぶすつもりなんてなかったぜ」

その言葉には、アリスだけでなく、夜々とフレイも驚いたようだ。

一同の視線が集中し、ロキは億劫そうに説明した。

「学内に悪意ある何者かが入り込んでいることは——」

フレイのとなり、オオカミ犬のラビを示す。

「ガルムたちの嗅覚が嗅ぎ取っていた。だが、どういうわけか、学院の警備は連中を見逃している——ゆえに、オルガが接触してきたとき、連中の差し金だとわかった。オルガに動かされたフリをすれば、貴様たちの注目はオレから逸れる」

「僕らを油断させて注意をそらし、事情を探っていた……？」

雷真は軽く笑って、

「俺もこいつもリ Arist でね。楽にマグナスまで行けるなら、今つぶし合う理由なんじゃない。俺にはまだ利用価値がある。消す理由がなかった」

「……深い信頼で結ばれてるってわけだ。仲がいいんだね」

「ふざけるな！」

見事なハーモニー。シャルが急に頬を染め、なぜか呼吸を乱す。

「そして、〈剣帝〉くんのお姉さんも？」

フレイはこっくりとうなずいた。その瞳には、決意と戦意がみなぎっている。かつての弱気な態度はどこへやら、一人の人形使いとして参戦の意志を表明していた。

「まったく……バカな連中だね。敵だった奴に……手を貸そうなんてさ」

軽口を叩きながら、アリスが目頭を押さえるのを、雷真は見逃さなかった。

雷真の胸にもまた、熱いものが込み上げていた。

いずれ戦わなければならぬ仲間たちが——今、心から頼もしいと思う。

「じゃあ、行くか——」

「だめよ」

冷やかな声が割り込んできて、雷真の熱気に水を差す。

クチナシの香りとともに、木立ちの奥から妖艶な女性が現れる。

それは、いろりと小紫をつき從えた——

「銷子さん……!!」

日本が誇る稀代の人形師、花柳斎銷子。そのとなりで、小紫が気まずそうに苦笑いしている。小紫の（偵察）はこちらを引き当ててしまったようだ。

銷子は真冬の富士を思わせる、峻厳な瞳で雷真を見た。

「言わなかったかしら、坊や。世界大戦の引き金を引くつもり？」

「……引きたくはない。だが、前るときとは状況が違うだろ。独逸と学院は手を組んでる。露西亞が独逸に無茶できる状況じゃない」

「そう、学院はドイツに与している——この意味がわからない？」

「……どういう意味だ？」

「行けば（下から二番目）が消される。生き延びたところで、学識を失うのよ」  
寸鉄の一撃にも似た言葉。

それは完全な不意打ちで、雷真の胸に突き刺さった。



居合わせた誰もが息をのむ。ロキやシャル、いろいろでさえも。

「坊やは何のために、遠い異国の地を踏んだのかしら？ その子を手助けしたいのなら、亡命させてあげましょう。自動人形の一体くらい、あきらめる分別を持ちなさい」

硝子は叱るように言った。

だが、その口調にはどこか——あきらめが交じっている。

予想通り、雷真は少しも怯んだところを見せず、

「連中がシンを奪還するのは正当な権利で、俺がとやかく言う問題じゃない。だが、連中はシンを奪い返すだけじゃなく、殺すつもりなんだ」

「それがどうしたって言うの？」

「なあ、アリス。シンは俺のことが嫌いなんだろ？」

突拍子もない質問。アリスは面食らったようだが、うなずいた。

「八つ裂きにしたって言ってたね」

「そのシンが、俺に『Enemy』と言ったんだ」

雷真は昂然と顔を上げ、硝子を真正面に見据える。

「どうか、お嬢さまを護ってくれと。てめえの命すらかえりみず、主を護ってくれと——  
そういう人間が、俺は好きだ」

視線がぶつかる。硝子の鋭い視線と、雷真のまっすぐな視線が。

険しく張り詰めていた硝子しょう子の顔が、ふつとゆるんだ。

「……いつの間にか、殺し文句まで覚えちゃって」

聞き取れないくらいちとの小声。「え？」と確かめる雷真らいしんを無視して、

「わかつていたことだけれど、このきかん坊には何を言っても無駄ね」

「バカにつける薬はないって言うしな」

「自惚うぶれたものね、坊や。神さまにでもなったつもり？　自分が望み、血を流しさえすれ

ば、どんな困難も打ち破れると思っっているんでしよう？」

「そんなつもりはない。俺おれはただ……」

「思っているのよ。でも——その自惚れが変えた運命もある」

シャル、フレイ、ロキ、そして夜々ややと、順に視線を巡らせる。

その言葉は、彼らにどう受け止められたのか。

皆が表情を引き締め、意志の宿った瞳で硝子を見返した。

硝子は再び雷真に視線を戻し、念を押すように言った。

「学院がどう出るかわからないわ。せいぜい用心なさい」

「何とかするさ。俺は——いや、俺たちはもう、簡単には殺されない」

「それが自惚れと言うのよ。でも、あながち慢心でもない……かしらくすり、と笑う。そんな硝子に、雷真はうなずいて見せる。

「大丈夫だ。それに、世界大戦のことも、学籍抹消のことも、心配はいらない。こっちは、他人を出し抜くのが三度の飯より好きっていう、ゆがんだ軍師がついている」

アリスを振り向き、その肩を叩く。

「おまえの頭ならひねり出せるだろ？ 学院長を出し抜き、連中をやり込め、シンを奪い返した上で、独逸を黙らせる——夢みたいな方法がさ」

アリスはたまらなくなつたようにうつむき、唇を噛み、肩を震わせた。

そして、いつもの、皮肉っぽい微笑を見せた。

「愚問だね、ライシン。僕を誰だと思ってるんだい？」

「だが、どうやる？ 戦争を回避する方法なんてあるか？」

「あるよ。（世界大戦の火種）を使わせてもらうのさ」

アリスは学院の中央、中枢施設が立ち並ぶ区画を見やった。

そこに、巨大な墓標のような、四角い建造物が建っている。

起死回生の鍵は、あの中にある——



## Chapter 6 この再会に感謝する

### 1

それは、月が美しい夜だった。

二年前。本物のセドリツクを排除して、アリスがすり替わった夏のこと。イングランド南部にあるグランビル別邸で、シンは夜警についていた。執事の職務とは言えないが、念を入れての措置だ。この数か月が作戦の成否を分ける。

ふと、二階のバルコニーに主が現れた。

月影が照らし出した主は、金髪の美少年ではなく、銀髪的美少女だった。

化けていない——（虚像）を解除している——

誰かに見られたが最後、計画が台無しだ。シンはバルコニーに飛び上がり——  
そして、見たのだ。

さらさらと光って散った、宝石のようなしずく。

自分の執事に気付き、アリスは一瞬、顔を背けた。



すぐに振り向く。アリスの眼にはもう、涙など存在しない。

「バルコニーも寝室の一部だよ？ 主の寝室に許しもなく入つてくるとは無礼にもほどがあるね。ベルンシュタインの執事はそんな常識もないのかい？」

「今は……グランビルの執事でございます」

「そうだったね」

どこか虚ろに響く、小さな笑い声。……らしくない。

「迷つていらつしやるのですか？」

「迷う？ 僕が？ 何を？」

「本当はもう——他者を騙すことに、飽いていらつしやるのでは？」

馬鹿なことを、とでも言いたげに、アリスは一笑に付した。

「僕は三度の食事より他人を欺くことが好きなんだ。まんまと僕に騙されて、実働部隊の手に落ちたときの——あのセドリツクの顔を見ただろう？ 他人を出し抜くたび、ああ僕は何て賢いんだろう、こいつは何て愚かなんだろう、そう思つてうっとりする。僕が僕の価値を実感するのは、他人を騙したときだけなんだよ。僕は……」

淀みなく流れていた言葉が、不意に途切れる。

気がつくと、アリスは手すりに手をかけて、はるか遠くを見つめていた。

「ねえ、シン。君は、僕のために戦えるかい？」

「——無論です」

「なら、僕のために死ねるか？」

「お嬢さまの仰せとあらば、たやすいことです」

「なら、死ぬより難しいことなら、どうだい？」

「……と、おっしゃいますと？」

「死ぬな」

シンは言葉を失った。主は何を言っているのだろうか？

「僕のためと言うなら、簡単に死ぬことは許さない。君ひとりを製造するのに、どれだけのコストがかかると思う？」

「ですが、死ななければ、お嬢さまを護れない——そのようなときには？」

「あきれるほど愚かだね、シン。僕には知恵がある。知恵ある者は、知恵なき者には殺されないのさ。ただし——完全無欠の下僕がいれば、だけどね」

「……ベルンシュタインの執事は有能ですが、完全無欠というわけには参りません。ただひとつ難を挙げるとすれば、主の命に背いてでも主のために命を捨てる——そんな不忠者だということですよ」

その返答は、アリスを失望させたようだ。アリスは冷淡な口調になって、

「グランビルの執事だろ、シン」

「申し訳ありません、坊ちやま」

すれ違ふ主従を、冴え冴えとした月が照らしていた。

甘く、そして苦い回想は、意識の覚醒とともに霧散した。

おぼろげに見えるのは、宮殿のような（愚者の聖堂）。シンはそのバルコニーで、騎士団の連中に囲まれ、磔にされていた。

魔封じの鎖で柱にくくりつけられている。魔術は封じられ、身動きが取れない。

胸から滴る自分の血を眺めながら、朦朧とした頭で考える。

（あのとき、私は忠誠を誓った……）

家でも、祖国でもなく、あの方のために生き、死ぬことを。

だからこそ、今——決断しなければならぬ。

## 2

「ここで作戦会議といこう」

地下の広間に到着すると、アリスは一同を振り返った。

地下水道の一角、かつてアリスが根城にしていたホールだ。シャルは露骨に嫌そうな顔

をした。ここでアリスになぶられたことを思い出したのだろう。

ホールにはシャル、雷真、ロキ、フレイと、それぞれの自動人形オートマド人形がいる。いろりと硝子シロコウコは既に立ち去り、小紫はアリスの指示で、単身、大空洞を偵察中だ。

「連中の精確な位置はつかめているのか。配置は？」

開口一番、ロキが鋭い質問を飛ばしてくる。

「くる途中に確認したよ。これでね」

水晶玉を出して見せる。雷真が興味深そうに首を突き出してきた。

「またそれか。便利だな、水晶玉」

「君が思っているほど便利じゃないさ。こういうのは仕込みが肝要なんだ。映したい場所に、あらかじめ〈目玉〉を設置しておかないとね」

場面を切り替えつつ、皆に見せる。シャルと雷真は食い入るように、フレイは背伸びをして、ロキもわずかに身を乗り出し、水晶玉の奥をのぞき込んだ。

「シンは空洞中心部〈愚者の聖堂〉に拘束されている。あそこは斷崖クワンライの底で、かなりの広さだ。見晴らしがいいぶん、こちらの接近はすぐ察知される。とりあえず、シンの警護はカッツバルゲルが二個小隊。騎士団は地上の哨戒シヤウゲイに出払っている」

「騎士団を遠くにやったの？ 逆にすべきじゃない？」

シャルが首をひねる。アリスはかぶりを振って、



「学院はドイツと仲直りしたいけど、聖堂の秘密までくれてやる気はないんだ。騎士団を中枢には置きたがらないだろう。あるいは、僕の捜索を警備に丸投げできるほど、騎士団が学院を信用していないとも考えられる」

だとすると、警備の中に単身で残ったローゼンベルクは、相当な自信を持っていることになる。あれはやはり、伝説級の自動人形オートマタ——

「説明に入ろう。作戦の目的は二つ。シンの奪還と、世界大戦の回避だ」

「三つ目が抜けてるぜ。ここにいる全員が、放校されずに済むような工作だ」

「うん。そこで、僕らがこれからやることは、〈学院の方針〉ということにしよう」

「はあ？　しょう、つておまえ……」

「そう、いかに僕らが『学院長の命令でした』と主張したところで、学院長がそれを認めなければ、何の意味もない。でも、逆に言えば——」

「そうか……学院長が認めたくなくなるような〈利益〉を……」

「そう！　僕らの言い分を通した方がいい、という状況を作ればいい。ババは私情なんかこれっぽっちも挟まないからね。利があると踏めば、乗ってくる」

「だが、どうする？　シンを手に入れるっただけじゃ足りねえんだろ？」

「利益つてのは何も、プラスばかりじゃないんだよ。僕らの言い分を認めなければすべてを失う——そんな状況に追い込んでやるのさ」

「待て。それは矛盾だ」

ロキが鋭く口を挟む。

「オレたちの行動が（学院の意志）になったとして——（学院の意志）でシンを奪えば、学院とドイツの融和はご破算になる。英独の関係には確実にヒビが入り、世界大戦が勃発する。そこをどうする？」

「今もつとも注視すべきはバルカン情勢、ロシア側が強攻してくることだ。ロシアの譲歩を引き出すためには、ドイツの懸勢が磐石であればいい。つまり——」

「……学院と英国を切り離すのか？」

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ。どういう意味？」

シャルが待ったをかける。根が真面目なシャルに、謀略は向かないようだ。

アリス、ロキに代わって、雷真が説明する。

「以前、硝子さんが言ってたんだ。英独が表立って争えば、露西亜は独逸を怖れない——逆に言えば、英独が仲良くしてりゃ、露西亜は無茶ができない。だから……」

「敵の敵は味方——学院と英国を仲違いさせて、英独を間接的に結びつける……？」

ロキはうさん臭そうな顔をした。

「そう上手くいくか？ グランピルの一件で、英独間は險悪だ」

「そう、そしてそれこそが、僕らにとって極めて有利な要素なんだ」

アリスを除く全員が、呆氣に取られたような顔をした。意味がわからない。

「まさに天の配剤だね。英独を結びつけ、学院を孤立させる、素敵な秘密がこの学院には隠されている——まあ、半分以上、僕の責任だけどね」

自嘲しつつ、アリスは水晶玉をかざし、とある建物を映し出した。

「秘密が隠されているのはここ、重要機巧保管施設——通称（ロッカー）だ」  
一同が息をのむ。雷真にとっては思い出深い場所だ。

「ここに眠る（秘密）を暴露すれば、英独の『誤解』は水解し、仲直りもできるだろう。そして、学院は僕の思い通りに動かざるを得なくなる。——そのところは後で説明するとして、作戦の詳細を説明するよ。主要な役割は三つある。ロッカーに潜入し（秘密）を奪う役、敵を惹きつける陽動、シンを救出する主力だ」

「陽動役が連中をおびき寄せて、その隙に主力がシンを救出するのね？」

「シャルロット……君は成績優秀なわりに、発想が凡庸だね」

「なっ——何よっ—— 妥当な考えでしょう!?」

「妥当に考えたら、シンを『生きたまま』救出するなんて不可能だ」

陽動を仕掛けても、連中はシンから目を離さないだろう。異変を感じれば、即座にシンを殺すはず。アリスを誘い出した時点で、シンは利用価値を失っているのだ。

「なら、八重葎で幻惑するか？ 完全幻覚でふところに潜り込めば——」

雷真らいしんの提案にも、アリスは首を縦に振らない。

「八重霞やぐさは必要だ。でも、〈聖堂〉周辺で魔術を使えば、即座に感づかれるよ。幻覚だとバレていては効果が半減する」

「じゃあ、どうする？」

「気付かれても問題ないような魔術を使う。そして、シンは救出しない」

一同が無数の疑問符を浮かべる。アリスはその反応に満足しつつ、

「それも後で説明しよう。次に、敵戦力だけと——さっき見たように、カツツバルゲルが二個小隊、〈十字架の騎士団〉が一〇人程度」

「カツツバルゲルって警備の特殊部隊よね？ 一般の警備は参加してないの？」

「僕らがどんな騒ぎを起こすかわからないし、学内を騒がせるわけにもいかない。一般の警備は一般の仕事をしているよ。そのぶん——僕らの迎撃には、警備ではなく〈教授〉が配置されるかも知れない」

重苦しい空気が立ち込める。そう、こちらはもう学院の敵なのだ。

「……誰たれがこようが、関係がない」

真っ先に沈黙を破ったのは、ロキだった。

「オレがぶちのめしたいのはローゼンベルクだ。貴様の作戦にケチをつけるつもりはないが、オレとあいつが当たるようにしろ」

「言われなくても、それがベストの編成だろうさ。でも、ローゼンベルクが連れているのは並の自動人形じゃないよ。伝説級と見て間違いない」

ロキは動じない。だが、フレイの方は心配そうに弟の横顔を見つめていた。

「そうそう、シャルロットの呪いだけど——今すぐ解くかい？」

「もちろんだ」「当たり前よー」

雷真とシャルが同時に言った。アリスは二人を手で制して、

「わかったわかった。それじゃ、すぐに準備しよう。万全を期して、ここに祝福の魔法円を描くから、一〇分ほど待ってくれ」

「ふん……悠長なことだ」

ロキが吐き捨てる。フレイはぎゅっと弟にしがみついて、

「ロキ、そんなこと言っちゃ、めー」

「わ、わかった。だから離せー」

珍しく狼狽するロキを見て、誰からともなく笑いがこぼれた。

### 3

雷真はホールを離れて、地下通路の暗がりに出た。

奥の闇に目を凝らす。この闇の向こうに、例の大空洞がある。

（早まった真似はするなよ、シン……）

「雷真」

遠慮がちの声がかかる。ホールの方から、夜々がとことこ近付いてきた。

「悪いな、夜々。夜会とは関係のないことに、またおまえを使っちゃう」

「雷真も大概お人好しですね。何度も救されかけた相手を助けようなんて」

「仕方ない。なりゆきだ」

「行きずりの女と関係を持っても「仕方ない」で済ますつもり……!?」

「そんなことは言っていないー そっちに飛躍するなー」

だが、そう言えば、今回のことはまったく話せていなかった。

「その……悪かったな、何の説明もしないで。婚約がうそつばちだってこと、おまえには伝えておきたかったんだが」

「……本当にひどいです雷真。婚約なんて、急に言い出して……。でも、何か事情があるんだって、すぐにわかりましたから」

ふわつと微笑む。一方、雷真は半眼になった。

「いい雰囲気はブチ壊して悪いんだが、だったら何で首を絞めようとした？」

「じ……実際にしませんでしたし？」

「目をそらすな。でも……ありがとよ」

ぼん、と夜々の頭に手をのせて、優しく撫でる。

夜々は猫のように目を細め、されるがままになった。

「……いい雰囲気をつち壊して悪いんだけど」

ざくつとして振り向く二人。背後に、極めて不機嫌なシャルがいた。

「解呪の用意ができたわよ。さっさときなさいよ愚図ーのろまー」

「罵倒するなー 何でキレてんだー」

ざやあざやあ言い合いながら、ホールに戻る。その後を、とよとよとどす黒いオーラをまき散らしつつ、夜々が続いた。

そうして、シャルの解呪は無事に終わった。

（いや、とても無事なんてものじゃなかったが……）

地下通路を歩きながら、雷真は煤けた顔を袖でぬぐう。

作戦は既に開始されている。雷真は夜々、アリスとともに行動中だ。

夜々が不機嫌そうにそつぽを向いて、

「自業自得です」つん。

「何で俺の業みたいになってる？ 俺のせいじゃないだろー！」

「静かにしなよ。こんなときまで騒がしいね、君たちは」





前に行くアリスが声を低くして注意する。八重葎が効いているものの、何かのセンサーに引つかからないとも限らない。雷真と夜々はあわてて口をつぐんだ。

地下道はまだまだ続いている。大空洞に通じるのとは別の道で、学院の中枢部に向かうルートだ。さらに五分ほど歩き、どこまで続くのか不安になる頃――

突然、通路が開けた。

大空洞に出たのかと思ったが、違う。石造りのホールだ。

広さといい、高さといい、学院の体育館ほどもある。天井は分厚いガラス張りで、月光が内部を照らしていた。何かの倉庫……格納庫か？

「……予想通り、番人が待ち受けていたようだよ」

緊張をはらんだ声で、アリスが前方を示す。

月光に浮かび上がるシルエツト。堂々たる体軀に、カッチリとしたスーツ姿。豊かな口ひげと、常に細められているような、優しい目が特徴的だ。

夜々が身構える。雷真は冷や汗を垂らしながら、アリスにたずねた。

「……この人選も、おまえの読み通りか？」

「まさか。誰に予想できるんだい。こんな化け物が自ら出張ってるなんてさ」

アリスの声は硬い。それもそのはず、そこにいたのは――

「どこへ行くこうと言うのかね？」

一九世紀最強の魔術師にして、王立機巧学院の最高権力者。

学院長エドワード・ラザフォードだった。

八重霞の効果はまだ残っている。魔王ライコネンにすら通用した〈完全幻覚〉が。

しかし、学院長の双眸は、完全に雷真をとらえていた。

「どうした、ライシンくん。今宵の夜会はとづくに始まっているぞ？」

「……ああ、もちろん出席するさ。野暮用を片付けてからな」

「野暮用とは何だね？ よもや、〈ロッカー〉に侵入することではあるまい？」

「そうだと言ったら、通してくれるのか？」

「そうだと言うなら——これ以上、やんちゃを許すわけにはいかん」

双眸がカッと見開かれた瞬間、叩きつけるような魔力を感じた。身がすぐむほどの威圧感。太古の肉食恐竜と対峙しても、これほどの戦慄は覚えないうらう。

「……是非もねえな。突破するぞ、夜々——」

「はい——」

「いいのかね？ 私に自動人形を差し向ければ、学院の権威に反逆したと見なす。それがわかった上での行動だろうな？」

雷真を見据え、厳しい声音で覚悟を問う。

「君には目的があったのではないかね？ マグナスくんとの戦いをあきらめると？」

「……あきらめるつもりはない」

「ならば、退きたまえ」

「それはできない」

「学院を追放されて、マグナスくんはどう挑む？」

強襲してみるかね？　だが、彼は学院

の生ける至宝だ。学院は全力で彼を護るだろうな」

「――」

「警備隊ばかりではない。私を含め、教授、学生――学院の全戦力が彼を護る。その守護を突破できるかね？」

――不可能だ。一撃でマグナスを倒せるならまだしも、戦いが少しでも長引けば、誰かしらが駆けつけ、マグナスに加勢する。

そっと、雷真はアリスを盗み見た。

アリスは何かに耐えるように、唇を引き結び、視線を落としている。

先ほどからだの一度も、学院長はアリスを見ていない。

それで、覚悟が決まった。

「……買いかぶりだぜ、学院長」

「マグナスくんを？　それとも、我々自身を？」

「いいや、俺をさ。俺は説得が利くほど利口じゃない。損得勘定なんざ――おふくろの腹

に置いてきたー」

刹那、夜々が床を蹴った。疾風のように、一直線に駆ける。

ただの五十男であれば、恐怖を感じる間もなく首を折られたはず。

それほどの蹴りを、学院長はわずかに身をそらしただけでかわした。

「……!?」

夜々が驚く。次の瞬間、夜々は弾き飛ばされて、こちらに戻ってきた。

謎の斥力。打ち返されたような吹っ飛び方だ。

学院長は平然と立っている。その前に、光の魔法陣が浮かび上がっていた。

即席の防御結界。決して珍しい魔術ではないが、出力のケタが違う。いっばしの魔術師

がベニヤ板一枚程度とするなら、学院長のこれは三百ミリの鉄鋼みたいなものだ。

「なぜ私が一九世紀最強などと言われたか、わかるかね？」

「……さあな。すげえ強えーからだろ」

「では、何をもって強者とするのかね？」

眉をひそめる雷真。学院長は淡々と、講義のような調子で続ける。

「魔力の総量？ 制御の技術？ 魔活性に対する親和性？ あるいは運用理論？ 戦術や

戦略の知識？ それとも、自動人形の性能かな？」

「……全部、じゃねえのか？」

「なるほど、私は確かにできる方の魔術師だ。だが、真に私を強者たらしめたのは、これを手に入れ、行使し、かつ秘匿し続けた——政治力だよ」

すうっと虚空を指が走る。指の軌跡が光の帯となって空中に残り、魔法陣が描き出された。装飾の多い特殊な六芒星——不勉強な雷真は初めて見る形だ。

その魔法陣の中心から、分厚い本がせり出してくる。

「気をつけて、ライシン。あれは魔導書——〈レメゲトン〉だ！」

アリスが切迫した声で叫ぶ。雷真は学院長の魔力に圧倒されながら、

「レメ……って、何だ？」

「……あきれねえね。学院に籍を置く者が、あれを知らないのかい」

やりとりが聞こえていたのか、学院長が苦笑混じりに口を開く。

「偉大なる同胞が数十年後に遺した魔術書だよ。彼がこれから得る膨大なコレクションを封じ込めたものだ。終末の書。百科全書。遺産大全。禁忌の集大成——さまざまに言われているが、これは自動人形の召喚目録なのだ」

「カタログ……？」

「残念ながら、遺産のいくつかは失われているがね。奪われたものも多い。それでも私は五十を超える〈神話の悪魔〉を操り、君に差し向けることができる」

本は空中に浮いたまま、ひとりでに開いた。ページから淡い燐光が飛び散り、学院長の

顔を下から照らし出す。

「君には敬意を表し、とっておきを披露しよう」

刹那、強烈な魔力がホールを埋め尽くした。

夢か、現か。学院長の背後に優美な階段が出現する。まるで、ここだけ異世界にまぎれ込んだようだ。白亜の壁がどこまでも続き、赤じゅうたんの階段が天井よりも高く伸びる。その最上段には金銀財宝で飾られた玉座が出現し――

（女神……!?）

そこに、麗しい女王が座していた。

豊かな乳房、白い肌。腰は驚くほどくびれ、絶対的に整った顔には、万物を見下ろす瞳が輝いている。白い薄絹一枚をまとい、いくつもの金の環が手足を飾る。

自動人形と言うより、これはもう（神像）だ。

「初めて……見た……二九番目の大公爵……アスタロト！」

絶望したような、一方で陶然としているような、アリスのつぶやき。

女王はゆつたりと立ち上がり、悠然と階段を降りてきた。一段ごとに階段が消え、金色の粒子となって飛び散っていく。

学院長はうやうやしく一礼し、女王を迎えた。

「ご来臨、いたみいます。女王イシユタル」

「久しいな、エド。わらわを呼びつけるとは、よほどの相手か？」

女王がこちらに流し目をくれる。刹那、ぞくつと死の予感が雷真を襲った。

「まだ小僧ではないか。老いたな、エド」

「確かに彼は若い——ですが、いずれ最大の脅威となる者です」

「よからう。魔力をもて。我が軍勢をここへ」

すつと右手を差し出す。その手を左手でいただき、学院長は魔力を渡した。

あくまでも優雅に、女王が左手を雷真に向ける。

その手のひらから、どうつ、と何かがあふれ出した。

黒い影。稠々しい、もやのようなもの。先端には苦悶する人間の顔が浮き出している。

正体不明だが、敢えて形容するなら、『怨霊』のイメージに近い。

それが同時に何体も、凄まじい速度で殺到してきた。

夜々を反対側に跳躍させ、自分はアリスを抱えて跳ぶ。怨霊の群れがホールの壁に激突

した途端、どろり、と石が崩れ落ちた。

石が腐るはずもないが、腐食としか言いようがない。壁は熱れたトマトのようにつぶれ、

腐ったタマネギのように溶け出していく。

その威力を目の当たりにして、雷真も、夜々も、そしてアリスも震え上がった。

「（**怨霊の腐蝕**）——あれを喰らったら、一瞬で腐肉だよー」

「——だによ！ 絶対に当たるな、夜々！」

我ながら無茶な命令だと思いつつ、夜々に命じて魔力を送る。

自身はアリスを担ぎ上げ、魔力を練って駆けた。金剛力ではなく、自分の魔力循環系に干渉して、魔力で身体能力を強化するテクニクだ。グリゼルダの指導は決して無駄ではなかった。こんな局面でも、まだまだやれることがある。

人形の女王は腕を振り、さらに怨霊を呼び出して、夜々を狙う。

「——くっ！」

怨霊の一体が夜々の頬にかすった。肌が一瞬でただれ、腐り落ちる。

だが、かすり傷だ。夜々は回り込んで女王に迫り、蹴り飛ばそうとした。

その前にすつと、学院長が割り込んでくる。

防衛結界が作動。夜々は弾かれ、真後ろに吹っ飛ばされた。

空中では身動きが取れない。あの態勢では——怨霊がかわせない！

雷真は右腕の布に手をかけ、引き裂こうとした。その瞬間——

雷真の第六感が、自分の死を予感した。

背後に脅威を感じる。肩越しに振り向くと、壁に衝突して消えたはずの怨霊が、こちら

に醜惡な顔を向けていた。

消えたわけではなかったのだ！ 回避……は、間に合わない！



時間の流れがひどくゆっくりになり、怨霊がもどかしいくらい緩慢に迫ってくる。雷真はどうすることもできず、アリスを抱く腕に力を込めた。

怨霊にのみ込まれる寸前、何かが雷真の視界をさえぎった。

きらきらとまばゆい、白い輝き。陶器のような光沢がある。これは……盾？

複雑な分割線が走った、機械的な構成。だが、麗しい。輝く盾が出現し、空中にびたりと静止して、雷真を護っていた。

激突した怨霊は次々と消滅していく。盾は腐らず、なお輝きを保っていた。

「学生相手に〈淫虐の姫〉を持ち出すなど、大人げないぞ学院長」

雷真の背後から、誰かがホールに入ってくる。

肩に担ぐのは、白く輝く優美な剣。暴力的な魔力、そして殺気。そのくせ、着ているのは可愛らしいミニのドレスで、アンバランスこの上ない。

グリゼルダ・ウェストン——〈迷宮の〉魔王！

すうつ、と学院長の眼が鋭くなった。

「何のつもりだね？　せつかく得た学院の庇護を、早々に失くしたいのかな？」

「買いかぶりだな。私はウェストン家のグリゼルダ——」

ふふんと笑って、剣の切っ先を突きつける。

「損得勘定など、母上の胎内に置いてきた——」

同じ頃、ロキはケルビンとともに、地下空洞を移動していた。

かたわらをちょこちょこ走るのは小紫だ。左右で結った髪がふわふわ揺れて、何となく仔猫の尻尾を思わせる。

「ん？ どうしたの、お兄さん？」

「……いや。おまえの魔術は本当に効果を發揮しているんだろうな？」

小紫は心外そうに唇をとがらせた。

「發揮してるよー。雷真がかけたんだからねー」

「ふん、だからこそ信用できん——こともないが……」

「魔術を使ったら解けちゃうから注意してね。特に、そっちの人形さんは」

逆に言えば、魔活性不協和の原理に抵触しない限り、簡単には解けないということだ。

恐るべき魔術と言っている。対象を隠すだけでなく、立てる物音や、気配まで曖昧にする。使用時に効果が及ぶ範囲を指定できるのも強力だ。

これほどの魔術、人形だけでは制御しきれまい。魔術師にも繊細なコントロールが要求されるはず。つまり、雷真はかなり腕を上げたのだ。

(……面白い)

そんなふうにしてしまつて、ロキは自分で驚いた。少し前まで、雷真の成長ぶりには焦燥さえ覚えていたのに。ずいぶん余裕が生まれたものだ。

二人と一体は断崖やぶぞりを降り、中心部へと近付いていく。

ほどなく、前方に宮殿のような建造物が見えてきた。

距離にして四百メートル弱。敵の様子が肉眼で確認できる。ヘイムガーダーが一〇体、人形使いとともに待機中だ。ローゼンベルクの姿は……見えない。

「止まつて。この先に探知結界を感じるの。これ以上の接近は危険だよ」

「ならば、ここから仕掛ける」

ロキは右手を相棒にかざし、ケルビムに魔力を送り込んだ。

「見えている一〇体全部を機能停止に追い込む。撃ち抜くぞ、ケルビム」

[I'm ready]

主の意図を正確に理解して、ケルビムが翼を広げる。翼にマウントされた短剣が一斉にせり出し、射撃体勢を整えた。

小紫の八重霞やぶがすみが効果を失うと同時、短剣が射出される。

一二本の短剣が切り離され、そのうちの一〇本が流星のように飛んだ。

刹那、何者かの影がケルビムにかかった。

頭上、背後から攻撃がくる。ケルビムには防御できない状況だった……が、二本の短剣が背後にすべり込み、敵の攻撃をブロックした。

攻撃してきたのは、金属製の自動人形だった。

大きな腕の先端に、こぶしとは別に鉤爪が突き出している。その威力はなかなかのもので、ケルビムの短剣はあっけなく折れてしまった。

その自動人形の向こう、闇の中から、金髪の美青年が歩み出てくる。

「俺に気付いていたか、（剣帝）」

「……こっちの台詞だ。ローゼンベルク」

ロキは油断なく、敵の自動人形を観察した。一見すると、どこにでもありそうな人形だ。腕力は今見た通り、侮れない。ほかに目立った特徴とさえ言えば——マントのようにボディを覆う（魚鱗鎧）くらいか。

人形は言葉を発することができないのか、「きゅいー」という感じで鳴いた。

「……古めかしい自動人形だな。骨董品か？」

ローゼンベルクは余裕ありげに笑っている。

ロキはちらりと小紫に視線をやった。意図を察し、小紫はあわてて距離を取る。彼女にはまだ八重葎の効果が残っているが、場合によっては邪魔になる。

「どうした。骨董品に魅したか？」

ローゼンベルクが挑発する。たぎる怒りをおし殺し、ロキは攻撃を命じた。ケルビムが突進する。左右のブレードで挟み込むように攻撃。巨腕の自動人形オートマタは一瞬で消え——ケルビムの頭上を取った。

速い——そして、飛んだ——

翼を大きく広げている。装甲のように見えたのは、翼だったのか——

「翼人——ハルビュイア？」

「そんなありきたりのモチーフではないさ」

ローゼンベルクが腕を振る。その動きに合わせ、巨腕の自動人形オートマタが降下してきた。猛禽キョウリウの襲撃に似ている。鉤爪がうなりをあげ、ケルビムを襲った。ケルビムはかわしたが、敵はかなりの機動力で追いつき、ついにはケルビムをとらえた。

鉤爪がケルビムの装甲板に食い込む。

ケルビムのボディに、溶断されたような、ただれた傷が走った。

「炎の爪——」

ロキは一瞬で看破する。超高熱に高めた爪で、物質を焼き切る仕組みか。ケルビムに似ている——が、この程度の温度なら、ケルビムの方が上だ。追撃をさばきながら、ケルビムは空中で一回転、大剣の姿に変形した。刀身から高圧の気流が噴き出し、一挙にケルビムを加速させる。

大剣が翼人にぶち当たる。命中の瞬間、刃からも超高熱が噴き出した。それは敵の表面に集中し、瞬間的には数千度にも達する。この仕組みで、いかなる金属をも焼き切ることが可能だ。ケルビムは翼人を真つ二つに――

……は、しなかった。

さしものロキも目をむいた。受け止められた――

押し切れない。ロキは即座にケルビムを反転させ、下がらせた。

再び機械天使の姿に戻る。心なしか、ケルビムも不思議そうにしていた。

くくつと楽しげに、ローゼンベルクが笑い出した。

「……何がおかしい」

「貴公にそんな顔をさせたのだ。これが愉快でなくて何だと言うのだ？」

ロキは改めて、敵の自動人形オートマトンを観察した。

熱による攻撃と、完全な耐熱能力。伝説級の自動人形オートマトンで、熱に強い自動人形オートマトンと言えば、

思い浮かぶのはフリスヴェルグか、さもなくば――

「炎を浴びて甦る、魔神……！」

「ご名答。貴公の迂闊な炎熱が、フェニックスを呼び覚ます！」

次の瞬間、翼人から炎が噴き上がった。

膨大な魔力の胎動を感じる。到底、ローゼンベルクが一度に送り込める量ではない。察

するに、ロキが与えた数千度の高温が、そのまま敵の魔力となったようだ。

翼人が姿を変える。ケルビムと同じ、機械的な変形だ。

両肩が左右に外れ、腰より下へと移動する。腹から大きな（くちばし）が飛び出して頭部と一体化、あいたスペースにはたんだ足が入る。

一連の変形シークエンスが終わって見れば、翼人は巨大な鳥に変化していた。翼人の腕だった部分は、鉤爪かぎづめつきの鳥脚に役割を変えている。強力な武器——鉤爪を両形態で最大限活用しようという、設計の妙だろう。

ロキの背筋を冷たい汗が伝った。今回ばかりは敵が悪い。フェニックスは自ら炎を生み出すだけでなく、受けた炎を魔力に変換することができる。不死と言われる所以だ。

「行け、フェニックス」

きゅー、と高く鳴いて、フェニックスが飛翔した。

恐ろしく速い。まるで流星のようだ。

ケルビムと同じ原理か。熱の噴射を利用して、反作用で推力を得ている。

長くひいた炎が、まるで尾のように見える。まさに伝説の（火の鳥）だ。

ケルビムに突っ込んでくる。ロキはただちに魔力を送り、ケルビムを飛ばした。

高速の鬼ごっこが始まる。鳥同士の格闘に近い。位置を入れ替え、翼をひるがえしながら、ブレードと鉤爪、そしてくちばしが火花を散らす。

だが、分があるのはあちらだ。フェニックスは高圧の気流を吐き出すことで、こちらの攻撃をそらし、減衰させてくる。こちらと同じように熱風をぶつけてやればいいのだが、そうすると、それはそっくり相手の魔力に変換されてしまう。

時間が経過するほどに、あちらのリードが増えていく。

ついに鉤爪フックがケルビムのボディをえぐり、くちばしが穴をうがった。しかも――

「お兄さん！ 危ない！」

小紫の警告を受け、ロキは反射的に跳躍した。

直前まで立っていた場所に、ヘイムガーダーの（電撃指）が突き立つ。

四体ものヘイムガーダーが合流していた。半数近くを撃ち漏らした計算だ。

警備に気を取られた瞬間、ハンマーのような蹴りがロキの頭を直撃した。

ぐらぐらと視界が揺れる。魔術合金の地面に転がりながら、ロキは信じられない思いで

頭上を見上げた。

フェニックスはケルビムと格闘していたはず。オレは一体、何に蹴られた……？

そして、理解する。

「貴様……まさか……！」

「そう――俺は機巧兵士となつたのだ！」

空中に静止したまま、ローゼンベルクは高らかに笑った。



「お師匠さま……何でここに……？」

雷真は呆然とつぶやいた。グリゼルダはふっと表情をゆるめ――

「この……っ、バカ弟子がーっ！」

雷真のわき腹に、剣の一撃を叩きこんだ。

とかん、と吹っ飛ばされる雷真。天井近くまで打ち上げられてしまう。とっさにアリスを放していなかったら、彼女は大怪我をしていただろう。

雷真はべしゃつと落ちてきて、

「いきなり何しやがるー 金剛力が間に合ってなけりや、死ぬところだったぞー」

「貴様、こんなところで命を捨ててるつもりか!?」

「今まさに、あんたに救されかけたんだよー」

「黙れー 貴様には倒すべき敵がいるだろうー」

言葉に詰まる。そう、雷真が倒したい相手は、学院長ではない。

「……あいつは倒す。だが、アリスも助ける」

「たわけ。そんなことはわかっている。貴様が阿呆だということはな」

「じゃあ何でぶっ飛ばした？ 俺の何が不満なんだ？」

「なぜ私を頼らんのだ！」

「——」

びくり、と学院長の眉が動いた。魔本（ヘレメゲトン）を指で撫でつつ、

「聞き捨てならんな。本気で私に——学院に曲向かうつもりかね？」

「そんなつもりは毛頭ない。だが、教え子が殺されようとしているのを、黙って見てられるほど、寛容な人間でもない」

二人の魔術師がにらみ合う。怯えたように空気が震え、どこからか地鳴りが響いてくる。圧倒的な力と力、最強と最強の対峙に、夜々が奥歯を食いしばった。気を抜けば、氣力を根こそぎ奪われそうだ。

グリゼルダは雷真に背を向け、かばうように立った。

「行け、バカ弟子。私が時間を稼ぐ」

「時間を稼ぐ——って、勝てないつもりか？ あんたは魔王（マギスタ）だろ？」

「……貴様は思い違いをしているな。魔王とは同時代で最も優れた才能に与えられるべき称号。私はただ夜会（ヤカイ）を制しただけ——あの男が制したのは一九世紀だ」

学院長をにらみ、皮肉っぽく自嘲する。

「私が隙（すき）をつくる。貴様たちは隙を見て走れ」

「だが……」

「案ずるな。今の私には、これがある」

ひょいっと剣を手放す。剣は空中でバラバラと崩れ、機械人形に姿を変えた。夜々が驚いて口を押さえる。

「雷真——これ……小さいけど、ケルビムですー」

確かに似ている。ケルビムの背丈は大人の男ほどもあるが、こちらは少女ほどの大きさで、ウェストのくびれが強調された、女性的なフォルムだ。装甲には繊細な彫刻が施され、美術品としても十分鑑賞に堪える。ケルビムが無機質な工業製品なら、こちらは工芸品と云ったところか。

ケルビムの翼が（ハンドガード）の部分なのに対し、こちらは（ブレード）を翼っぽく背負っている。手足のバランスが人体に近く、ケルビムより洗練されていた。

同時に盾も変形する。剣とよく似た意匠だが、こちらはさらに優美なシルエツト。盾を形成する装甲板が六枚、スカート状に腰を覆っている。

二体の自動人形は驚くほど似通っていたが、同時に、驚くほど対照的だった。

「こいつら、一体……？」

「サーバント・レブリカ。（ミカエル）型と（ラファエル）型だそうだ」

「その名称、やっぱケルビムの兄弟機——っつか、どこで調達したんだ？」

「知り、合いの教授が試運転したいというのでな。間に合わせの借り物だが、時間稼ぎの役には立つだろう」

「間に合わせとは心外ですわ」

剣の人形がなめらかな合成音声を発する。雷真はぎよつとして、

「しゃべった！」

人形二体はそれぞれの顔に手を当て、笑うような仕草をした。

「何を驚いているのかしら、このマヌケな坊やは」

「言葉が過ぎましてよ、お姉さま。事実はより深く馬鹿を傷つけるそうですわ」

「しかも口悪いなー。ケルビムと全然違うじゃねーか！」

「なるほど、見事な自動人形だな、ミス・ウエストン」

学院長が感嘆の息を漏らし——そして、ふつと笑った。

「だが、その人形で、私の女神に敵うかね？」

「試してみるさ」

グリゼルダから魔力がほとばしる。二体は機敏に反応した。

左右に散開。両側から挟み込むように、学院長と女王に迫る。

アリスが目を見張る。雷真もまた、同じ気持ちで絶句した。

二体の移動はスムーズだった。ケルビムのように、熱風の騒音をまき散らすのではない。

自分自身のベクトルを自在に操作するような、この動きは――

「フラガラッハ――そんなバカな！ 人間の脳モジュールを使わずに、あれを制御する思考プログラムなんて……！」

驚くアリスの眼前で、二体はシンとそっくり同じ動きをして見せる。

女王が撃ち出す怨霊を、慣性ゼロのジグザグな動きでかわし、はば一瞬で間合を詰めた。剣の人影が背中のブレードを抜き、女王に振り下ろす。

「させん！」

学院長がすべり込み、光の魔法陣を展開する。

ざいんつ、と甲高い音がして、魔法陣とブレードが競り合った。

「エド、魔力をもて」

「仰せのままに！」

学院長は女王の手を取り、魔力を渡す。

女王は剣の人影ではなく、グリゼルダに向かって怨霊の群れを放った。だが、こちらは盾の人影が反応している。瞬時に射線をふさぎ、文字通り盾となって主を護る。

どんだんどんどんつ、と鈍い衝撃。怨霊の直撃に耐え、盾は傷ひとつ負わない。

グリゼルダは嬉しそうに笑った。

「これは想像以上にいいな。こういう使い方も――できるんだらう？」

地を蹴らずに飛ぶ。雷真も、夜々も、アリスも、三人そろって瞠目した。

グリゼルダの動きは、シンと同じ——完全統制振動の動きだった。

盾が作った死角を利用し、学院長の頭上に飛び出すグリゼルダ。そのときにはもう剣の人影が変形し、優美な剣となって、グリゼルダの手に収まっていた。

グリゼルダの背中から、赤い光が飛び散った。

血液が気化して爆発的な魔力を生む。魔力は糸の形に修煉し、右腕を通して剣に伝わり、魔術回路を極限まで稼働させた。

いきなり最高速に到達。稲妻のように降下しつつ、剣の一撃を見舞う。

学院長は頭上に魔法陣を展開し、受け止めた。が、衝撃までは殺せない！

爆音とともに、床が沈んだ。

頑丈な石の床がクレーター状にへこむ。壁という壁に亀裂が走り、天井のガラスが砕け散った。ガラスは相当に分厚かったようだ。崩れた氷山のような塊が、落石よろしく落ちてくる。雷真はアリスをかばいながら、崩落するガラスを必死で避けた。

立ちこめる粉塵の中、グリゼルダはうつすら笑って立っていた。まさに鬼神だ。

「信じられない……フラガラッハを……術者に援用した……初見で——」

アリスの声が震える。雷真もまた、改めて師の技量を知った。

恐るべきはグリゼルダ。そしてあの、白く輝く機械天使。

Dワークスの設計を盗み、ドイツの魔術回路を搭載した、ハイブリッドな自動人形オートマトン——理屈で考えれば、それはただの寄せ集めにすぎない。

ケルビムは高熱の集中により、あらゆる物質を切り裂くという特性があった。

機巧兵士マシィン・ソルダートは術者と人形、ふたりぶんの魔力を使えるという利点がある。

あの二体にはどちらもない。だが、グリゼルダには無尽蔵に近い魔力と、アリアドネの糸がある。彼女の手にある限り、あの二体は絶対の剣、絶対の盾となる。

シンが言っていた。フラガラッハとは本来、自らの意志で敵を倒し、手元に戻ってくる神剣——その一撃は鎧で止めることができないという。

その名に相応しい自動人形オートマトンが、皮肉にも、技術の盗用によって完成したのだ。

グリゼルダの力は圧倒的だったが——

それは、相手にも言えることだった。

崩れ落ちた床の下から、巨大な魔力が噴き上がる。

「見事だ、ミス・ウェストン」

粉塵の中、学院長の声が響く。

女王とともに、浮上してくる学院長。念動で体を浮かせているようだ。

「……手ごたえはあったんだがな。一九世紀最強の名声は、嘘ウソではないか」

グリゼルダは苦笑した。一方、学院長も苦笑していた。大穴を見下ろし、あきれたよう

にあごひげをしごく。

「幾重にも物理防護を施し、強度を高めたこの場所を、こうまで破壊するとは——」

最後まで言わず、グリゼルダは剣を投げつけた。

剣は一直線に突き進み、女王の首を狙う。させじと学院長が魔法陣でブロック——力と力が拮抗した瞬間、グリゼルダは叫んだ。

「もう行け、バカ弟子！ この機を逃せば、この男は突破できん！」

魔王がそこまで断言する。学院長にはそれほどの力があるのか。

雷真は決断した。素早くアリスを担ぎ上げ、夜々と二人で大穴を跳び越える。

「む——よいのか、エド。小僧が逃げるぞ？」

「かまいませんぬ。行きたまえ、ライシンくん」

学院長の意外な言葉に、雷真は思わず立ち止まった。

「魔王すら足止めに使う——見事な器だ。（下から二番目）」と押捺された君が、そこまで

の力を身につけた。頑張ったごほうびに、私からプレゼントを贈りたい」

普段、学生たちによく見せる、穏やかな微笑みを口元にたたえる。

「千載一遇の好機を堪能したまえ。誰にも邪魔されずに、ね」

好機。千載一遇の好機。それは、まさか——

雷真は弾かれたように駆け出した。夜々を追い越し、狭い通路を駆け抜ける。



突き当たりは、先ほどとそっくり同じ形のホールだった。

広さはもちろん、天井のガラスまで同じだ。ただし、先ほどのホールにはなかったものが、中央に鎮座している。クジラのような形の、硬式飛行船だ。

「船……でしようか？」

夜々が小首を傾げる。雷真はぎょっとした。

「ダイダロスの縮小版……!? なぜ、こんなものが学院に……!?」

アリスに聞いたただそうとしたとき、それに気付いた。

「貴方はマスターの（敵）ですか？」

何の感慨もなさそうな、形式的な質問。飛行船の上に覆面の少女が立っていた。

「火垂……つつたか。おまえがここにいてるってことは」

「こちらだ。（下から二番目）」

疑問を肯定するように、声がかかる。

月影にきらめく銀の仮面。その下にのぞくのは、魔力を帯びた紅い瞳。

「マダナス……」

妹の仇が、そこにいた。



## Chapter 2 君臨者たち



### 1

シャルとフレイは「最初の任務」をすんなりこなし、再び地下に戻ってきていた。既に、シャルは元通りの大きさだ。着ているのはアリスが寄越した礼服<sup>コールド</sup>だけで、その内側はひどく頼りないことになっている。

シグムントはシャルの肩にとまり、オオカミ犬のラビはフレイの横を歩いている。先ほど地上で見たものが脳裏に甦<sup>よみがえ</sup>り、シャルはうえつと吐き氣をもよおした。

「う……シャル、大丈夫？」

「貴女<sup>あなた</sup>、あんなの見て、よく平気ね」

「私たちが前いたところには、ああいうの、たくさんあった」

「——ごめんなさい。嫌なこと思い出させて」

フレイは小首を傾<sup>かし</sup>げ、遠慮がちに、シャルのひたいに手を当てた。

「熱でも、ある？」

「ないわよっ。私だって『ごめんなさい』くらい言えるわよー」

「でも、顔……赤い」

「そ、それは――」

かああああとさらに赤くなるシャル。顔から火が出そうだ。

「案ずるなフレイ。先刻のアレがあまりに燃しくて、余韻に浸っているのだ」

「だっ、だだ黙りなさいシグムントー そんっ、ばかつ、ことっ……」

言葉とは裏腹に、シャルはめまいを起こすくらい赤面した。

フレイはうつむき、すねたように言った。

「さっきの、うらやましかった」

「あああんなの、仕方なく言ったことじゃないっ」

「でも、うらやましかった……」

「……ごめんなさい」

もう一度、フレイはシャルのひたいに手を当てた。

「やっぱり、熱ある？」

「そんなこと言ってる場合!? 作戦はまだ半分しか終わってないのよー」

ごまかすようにそう言って、シャルは早足になった。

きりつと無理やり顔を引き締めて、砂に足を取られながら大空洞の間を歩く。

「シャル……困ったことがあったら、ライシンだけじゃなく、私にも相談して」  
ふと、フレイが真剣な調子で言った。

驚いて振り向くシャルに、フレイは「にこ」と笑いかける。

「私たち、友達だから」

「――」

じわつと涙ぐみそうになるのを、どうにかこらえる。

こんな私を友達だと言ってくれる。

ほんの少し前まで、そんな者は一人としていなかった。

皇太子に傷を負わせた一家として、世間からも嫌われて。

昔友達だった者も、みんな離れて行つたのに――

シャルは顔を赤らめ、怒ったような顔で、フレイを見つめ返した。

「私は誇り高きブリュー家のシャルロット。世話になりっぱなしなんて我慢できないわ」  
だから……貴女が相談してくれるなら、私も相談するわ」

フレイは嬉し<sup>うれ</sup>そうにうなずいた。その拍子に、大きな胸が「ゆさつ」と揺れて、芽生えかけた友情に水を差す。

そのとき、ラビが耳をぴんと立てた。フレイもまた、ぴくつと顔を上げる。

「う……近い……」

ラビが音を拾ったらしい。フレイはラビと感覚を共有することができる。

シャルとフレイは速度をゆるめ、慎重に斜面をくだった。

やがて断崖（せんがい）に到達、眼下に宮殿が見えてくる。

うつすら神々しく輝く宮殿——まるで神殿のような趣きだ。

宮殿のバルコニーに十字架型の柱があり、そこにシンがくくりつけられていた。

魔封じの鎖でぐるぐる巻きにされている。鎖はわずかに一本。一重の拘束で済ませたということは、よほど強力なもののだろう。

「私たちの出番よ、シグムント」

シグムントをうながしながら、アリスの言葉を思い出す。

「こいつの命が惜しかったら——なんてお決まりの台詞（せうご）が聞きたくないなら、奇襲で護衛を無力化し、一気に奪還するのがセオリーだ。ただし、今回は具合が悪い」

開けた空間のため、接近が難しい。八重（やえ）霧で隠れても、相手の結界に触れれば大まかな位置を察知され、広範囲魔術で殲滅（せんめつ）されるおそれがあった。

「そこで遠距離から魔術で狙撃（そげき）、拘束具を断ち切る。シンには自前で飛行能力があるからね。拘束さえ断ち切れば、助け出すまでもなく、自力で逃走できる」

狙撃役にはもちろん、シグムントが適任だ。

シャルはシグムントの視覚に意識を同調させ、距離を測った。

五百ヤード少々。風はない。この距離なら——当てられる。

「チャンスは一度よ。私たちが失敗したら……フレイ、強攻はよろしくね」

「う、わかった」

フレイがうなずく。ゆきゆき。シャルのやる気が少し減退する。

シグムントが地面に降り立ち、四肢を広げて体を安定させた。

狙うのはシンをつなく鎖。外したが最後、シンに風穴があく。

シャルは魔力を練り、折りを込めて、心の引き金を引いた。

## 2

倒れ伏したロキの頭上で、ローゼンベルクはにたりと笑った。

ロキの頭蓋骨を踏み抜こうと、一瞬で降下してくる。ロキはまだ朦朧としていて、反応

できる状態ではない。死ぬ——

ロキの窮地を救ったのは、意外にも小紫だった。

わざと八重霞を解除して、銀剣でローゼンベルクの眼球を狙う。

突然の襲撃に驚き、ローゼンベルクは身を退いた。完全統制振動を駆使すれば、眼球へ

のダメージさえ無効化できるはずだが、本能的な恐怖が上回ったようだ。

そんな自分を恥じるように、忌ま忌ましげに舌打ちする。その隙に、小紫は再び八重霞を起動、ロキを引っ張って回避した。

警備を含め、誰も二人を目で追わない。こちらの姿は見えていないようだ。

「お兄さん、大丈夫？」

「ああ……すまない。これはおまえがやったのか？」

「私だって雪月花のひとつなんだよつ。——でも、私にできるのはかくれんぼだけ。探知系の魔術を使われたら、すぐに見つかっちゃうよ」

「……先に警備を排除する。フォローを頼めるか、雪月花の人形？」

「できるよつ」

強がる。ロキはふつと笑って、ケルビムに魔力を送り込んだ。

大剣が紅蓮の炎を噴き上げ、ヘイムガーダー二体をなで斬りにした。隠形が解け、一瞬

見えたケルビムの姿は、小紫のフォローで再び姿を消す。

警備の人形使いに戦慄が走った。

これでは、暗闇から不意打ちされるに等しい。

彼らのくだした判断は——（撤退）だった。

残存する二体の人形に背後を譲らせ、四人がそろって後退する。

自動人形を無駄死にさせることが警備の仕事ではない。逃走経路を前もって封じ、応援

を呼ぶのも立派な仕事だ。

（——だが、見切りが早すぎる）

ロキは違和感に眉をひそめる。噂のカツバルゲルが、こんなにあっさりしているとは思えない。何か裏があるのでは……。

いや、今は目の前の敵に集中すべきだ。

カツバルゲルが撤退した今、残る自動人形はフェニックスだけだ。

「……迂闊。だが、まあいい。貴公らごとき、フェニックスの敵ではない」

ローゼンベルクは動揺した様子もなく、悠然と立っている。そして――

「そら、そこだ！」

こちらの位置を精確につかみ、フェニックスをけしかけてきた。

火の鳥がケルビムを狙って飛ぶ。音速に近い――

対応が間に合わない。体当たりがケルビムを直撃し、刃を兼ねた装甲が一枚、へし折られてしまう。勢を崩したケルビムを尻目に、フェニックスはロキを狙った。術者を狙う――かつてロキが教えてやった通り、それが実戦の定石だ。

ロキは身を投げ出してかわす。マントが燃え上がり、制服の下が肌が焦げた。

さらに追撃がくる。鉤爪がロキの喉笛に迫り、小紫が悲鳴をあげた。

一応、ケルビムが間に合っている。大剣に変形して鉤爪を受け止めた。だが、焼き切る



ことは、もちろんできない。熱風噴射を使えば、相手の力が増すだけだ。

大剣が盛大に刃こぼれする。刀身が折れる寸前、ロキはフェニックスの真下から転がり出て、際どくケルビムを後退させた。

「ふふ……痛快だな。実にな」

言葉通り、ローゼンベルクは愉快そうに笑った。

「甘美なひとときだ。この俺に手傷を負わせた、不遜な愚か者をなぶってやれる」

「手傷……？」

ローゼンベルクは袖をまくった。腕に、ただれた傷痕が残っている。

「これは貴公につけられた傷だ。同じものが両手両足にある。この醜い傷痕を見るたび、俺の復讐心は燃え上がるのだ。このフェニックスのようにな。この恨みを晴らす——そのために俺は力をつけた。だから勝つ」

「恨み……だと……!?」

ロキの声から温度が消えた。

絶対零度に凍りつく声。ローゼンベルクの眉間にしわが寄る。

ゆっくりと顔を上げるロキ。紅い双眸に射すくめられた瞬間、ローゼンベルクの様子がひきつった。はっきり恐怖を感じている顔だ。

「そんな……ちっばけな……自慢にもならん……かすり傷が……」

ごうっ、と音を立てて噴き上がる、途方もない魔力の炎。

「あいつの命と釣り合うものか」

叫びと同時に、魔術合金の地面を破り、短剣が下から飛び出してきた。

最初に警備に放ったものだ。地中を通して、ここまで引き戻していた！  
かつて義父が使ったのと同じ技だった。四本の短剣が真下からローゼンベルクを襲う。  
短剣は見事に直撃したが、ローゼンベルクの肌には傷もつかない。

「無駄なあがきだ。こんなものがフラガラッハを貫けるはず——」

ローゼンベルクの嘲笑が強張る。……違う。ロキの狙いは攻撃ではない——  
短剣の一本がロキの左手首を裂き、どっと鮮血があふれた。

「……何の真似だ？ 自ら死を選ぶと？ させるものか」

フェニックスを突進させるローゼンベルク。その速度が、不意に鈍った。

進まない。見えない壁でもあるように、フェニックスが停滞している。

不思議の原因に気付いて、ローゼンベルクは目をむいた。

「念動……だと？ 他人が支配する自動人形を……念動で阻んでいる……!?」

どれほどの魔力があれば、そんな芸当が可能なのか。

膨大な魔力があたり一帯を支配する。あおりを受け、小紫が苦しげに膝をついた。

ロキが流す血は、血だまりを作らない。地面につく前に気化して、すさまじく高密度の

魔力となつて、ケルビムに流れ込んでいた。

ロキの胸で機巧の心臓が暴れている。莫大な魔力を吐き出す、魔術の焔心が。ローゼンベルクが怯んだ。しかし、今さら撤退する猶予は与えられない。

大剣は真紅の光を放ちながら、音速をはるかに超えて回転した。

## 3

「感謝するよ、学院長」

グリゼルダは緊張を隠し、余裕ぶって笑いかけた。

「私の弟子を見逃してくれた——そういう解釈でいいんだろう？」

「見逃したつもりはない。だが、努力には報酬が、若者には機会が与えられるべきだ。彼はそれに見合う戦果をあげ、功績を重ねてきたのだから」

「教育者の鑑だな。それで、こちらの決着はどうつける？ バカ弟子が突破した以上、私はもう尾を巻いて逃げ出したいところだが」

「そうはいかん。貴女が退けば、私はすぐにでも彼を追うし——学院の権威に盾突いて、無事でいられるはずもない」

「だろ——な——」

前触れもなく、斬りかかる。

敵もさるもの、とつくに反応できている。女王が怨霊の群れで迎撃してきた。

盾の人形が先行し、グリゼルダを防御。怨霊が阻まれ、噴煙のように飛び散った瞬間、グリゼルダは床すれすれを飛んで、足もとから女王に追った。

学院長はこちらを見ようとしてもしない。気付いていないのではなく——見抜いている。

学院長の頭上から、剣の人形が降ってくる。

グリゼルダは困で、剣が本命の攻撃だった。剣は学院長にブロックされ、グリゼルダには怨霊の軍勢が降りそそいだ。

あわてて反転するグリゼルダ。剣を呼び戻しつつ、急いで後退。群がる怨霊を盾が受け止めたとき、背後から別の怨霊がきた。

死角から回り込んでいたようだ。だが、それはグリゼルダの読みのうち。そちらには目もくれず、剣の一闪で霧散させた。

殺到する怨霊の群れを剣と盾で蹴散らし、隙を突いては女王に接近、攻撃、防御される繰り返し。そうした戦いが五分も続いた頃、グリゼルダは大きく飛び退いた。

グリゼルダのひたいには汗が光っている。だが、息は乱れていない。

他方、学院長は汗一つかいていない。だが、辟易はしているようだ。眉間にしわを寄せ、難しい顔でうなった。

「これでは埒が明かな……」

お互いに決定打のない消耗戦だ。グリゼルダは笑って、

「淫虐の姫を引っ込めて、違う自動人形を出したらどうだ？　それが貴方の強みであり、最強たる所以なのだろう？」

「……ふむ、そうしたいのはやまやまなのだが」

「何だ、エド。わらわを用無しと申すか」

ぶくーっと不満そうに、女王は頬を膨らませた。

「何たる恩知らず。貧相な小僧にすぎなかったおまえをそこまでにしてやったのは誰だと思うておる。わらわは悲しいぞ」

「お待ちください、女王イシュタル。そのようなことがありましようや——」

「もうよい。ならば、もつと魔力を寄越せ。第二の軍勢をここへ！」

「——」

女王の言葉を聞いて、グリゼルダに戦慄が走った。

悪魔アスタロトは四十の軍勢を持つという。グリゼルダは、女王が呼び出す怨霊こそが、その軍勢なのだと理解していた。

だが……あの怨霊が、群れ全体で「第一」の軍勢なら？

女王はまだ、四十分の一の戦力しか見せていない……!?

「やむを得ませぬな」

学院長が魔力を練る。荒れ狂う嵐のように空氣が逆巻いた。巨大な魔力が女王の全身に行き渡り、さすがのグリゼルダも肝を冷やした、まさにそのとき――

「そこまでだ、ジジイ」

一陣の風のように、誰かが学院長のとなりに現れた。

ひゅんっ、とサーベルを振り下ろし、学院長の進路を塞ぐ。

見覚えがある。この女は、英國政府が派遣した、学院長の秘書官だ。

「見ての通り、私は取り込み中なのだがね、アヴリルくん？」

「心配せずとも、こちらの用件はもっと取り込んでいる。国王陛下じきじきのお呼び出しだ。たずねたいことがある、とね。――グランビルの件で」

「ふ……迅速なことだ」

学院長は面白がるような目をして、片手でレメゲトンを閉じた。「こら、エド――」という女王の非難が、その姿もろとも、一瞬で消え失せてしまう。

いつもの紳士然とした表情に戻り、学院長はグリゼルダを振り向いた。

「ミス・ウェストン。今夜ここで起きたことはすべて『なかったこと』にしたいと思うが、貴女の意見はどうかね？」

「な……んだと？」

「ここには誰もこなかったし、何も起きなかった。貴女の行為をとがめるつもりもない。何も起こらなかったのに、処分などできようはずもないからな」

——狸親父め。グリゼルダは苦笑しつつ、

「貴方あなたが何を言っているのか、私にはさっぱりだ。今夜、ここでは何も起こらなかったというのに、私の何を見逃すと言うんだ？」

学院長は満足げにうなずいた。

「では、行こう。地上まで送るよ」

ついてこい、という意味だ。ここは学院の最重要施設。これ以上、自由に歩き回らせるつもりはないのだろう。

アヴリルのうさん臭のような視線を浴びながら、二人に続いて歩き出す。剣と盾も機械の天使に姿を変え、機械とは思えないほど優雅な足取りでついてきた。

暗い通路を歩きながら、グリゼルダはかつてない不安に襲われた。

この先では雷真らいしんが戦っていたはずだ。しかし、少し前から戦闘音が聞こえない。

決着はついたのか。果たして、あのバカは……生きているのか。

学院長は悠然と歩いている。その背中が、ひどく恨めしかった。

「偉大なる者」……」

銀の仮面を見て、アリスははっきり畏怖を覚えた。

アリスだけではない。どんな窮地でも笑っているような雷真が、張り詰めた表情で硬直している。夜々に至つては、かすかに膝が震えていた。

雷真より頭半分ほど背が高い。仮面と礼服で、容姿が全然わからない。

強烈な印象を与えるのに、何一つ正体がかめない、謎めいた存在。

彼の周囲には、自動人形が三体、親衛隊のように控えている。

身にまとうのは花のようなドレス。薄絹のヴェールには東洋の漢字。崩し文字だったので、語学に堪能なアリスでも判読するのに時間がかかった。火、鎌、玉——彼女たちの名前の一部だ。とすると、あの三体は火垂、鎌切、玉虫か。

火垂は両手に短剣を、鎌切は柄の長い大鎌を、玉虫は剣をそれぞれ手にしている。構えてはいないものの、どれも抜き身で、臨戦態勢だった。

マグナスが率いる〈戦隊〉。六体いるはずだが、見えているのは三体だけだ。

「……粹なはからいだけ、学院長」

伝い落ちる冷や汗をぬぐって、雷真はうつすら笑みをこぼした。

「丁度いい。今ここで因縁を断つ——」



「待つんだ、ライシン。(剣帝)か(暴竜)と合流した方が——」

「そんな余裕はない。今ここから退けば、シンもおまえも救えねえ」

「下がってくださいアリスさん。巻き込まれます」

アリスを気遣って、夜々が忠告してくれる。夜々もまた、やる気らしい。

マグナスは見定めるような目を雷真に向け、うなずいた。

「腕を上げたと見える。一度は敗北した敵に、勝することなく向かってくるか」

「勝してるさ。だが、それ以上に、俺は今おまえと戦いたい」

「蛮勇だな。おまえは試してみたいのだ。手にした力がどれほどのものか」

「ああ、蛮勇だ。だが、あのときと同じだと思うなよ？」

「ほう——何が変わったと言うんだ？」

次の瞬間、がいんつ、と金属音が響き渡った。

雷真と密着する距離に、三体の乙女が出現していた。火垂は真正面から、玉虫と鎌切は背後から、雷真に刃を繰り出したようだ。

三人の乙女が飛び退く。ヴェールがめくれ、驚いたような表情が見えた。

雷真は自分の左手、人差し指を見た。わずかに切れ、血の玉が盛り上がっている。針で突ついた程度の傷だ。察するに、火垂の一撃を受け止めたのか。

残り二体の攻撃は防ぎもしなかった。わずかな動きでかわした……!?

「さすがだな。そいつら、素すの力で金剛こんごう力りきを貫つきやがる」

雷真らいしんが笑う。マグナスは感心したように雷真を見た。

「大したものだ。あの刹那せつなに、〈金剛力〉を援用したか」

「誉ほめてくれるのは、ちよいと早いぜ」

雷真は右手の布をつかみ、袖そでごと一氣に引き裂いた。

その下にあつたものを見て、アリスは目を見張る。雷真の右手には、不可思議な紋様が描き込まれていた。タトゥー、だろうか。迷路のように入り組んでいる。

空氣に触れた途端、紋様は紅く光り始めた。

「夜々やや。吹鳴すいめい四八衝しやうしやうしやう」

「はい！」

夜々の背中に、雷真の指から五本の糸が伸びた。

青白く輝く魔力の糸。網膜を焼くほどの光だ。アリスは目を見張った。これほどの収束は見たことがない。父エドワードであっても、できるかどうか……。

夜々は爆発的に加速して、マグナスに突っ込んだ。

もちろん、〈戦隊せんたいスコーピオン

は突破を許さない。鎌切かみきりが魔術を起動、火垂ひたるをマグナスの前に瞬間

転移させる。火垂はナイフを交差して、夜々のこぶしを受け止めた。

夜々の鉄拳てつけんに火垂は耐えた。だが、こらえきれない！

短剣が砕け、火垂が吹っ飛ぶ。そのまま壁に激突し、石の壁にめり込んだ。蜘蛛の巣状に亀裂が走り、ホール全体がぐらぐら揺れた。

アリスは驚愕した。マグナスの《戦隊》を圧倒した――

雷真は快心の笑みを浮かべ、右のこぶしを握って見せた。

「俺には《糸》――〇本を操るだけの器はなかった。だったら、五本で十分だ」

雷真の腕を見て、マグナスは退屈そうにつぶやいた。

「片方の糸車を封じ、片腕のみで糸をつむぐ――裏門紅翼陣《捨法散華》か」

「――!?」

「何を驚く? 赤羽一門が千年の時を刻む中で、おまえと同じ結論に至った者が、ただの

一人もいなかったと思うのか?」

紅い瞳で雷真を見据え、淡々と言葉を続ける。

「見たことのない祝式だが、やっていることは同じだ。古に曰く、《紅翼陣》に三つの門あり――《十重》《十束》《十厘》なり。裏門はそのひとつをあきらめ、《十重》《十束》の

二門で完成とする安易な道だ」

ふう、とため息をひとつ。マグナスは失望をにじませ、かぶりを振った。

「焦ったな。生まれ持った才を、自ら捨てた」

アリスは雷真の横顔を盗み見る。

雷真は顔面蒼白だった。だが、気力は失われていない。

「おまえに勝つためなら何だってするさ。そして、少ない才能を捨ててもいいねえ。そんなことより——おまえは今、決定的なしくじりをやらかしたぜ？」

「……何のことだ？」

「俺の前で、赤羽天全だと認めたー」

「ごとおおつ、と潮のうねるような音がする。

憎悪が力と呼ぶのか、途方もない魔力があふれ出してくる。

魔力は雷真の右腕に集まり、収束した糸となり、それは夜々の体に流れ込んで、彼女の五体に強大な力を与えた。

ふわっと髪が浮き上がり——夜々が消える。

違う。駆けたのだ。衝撃波がアリスの頬を叩き、髪を吹き散らかす。

夜々は一瞬で敵陣に入り、起き上がったばかりの火垂を狙った。

そこに、別の乙女が転移で割り込んでくる。

入ってきたのは玉虫だ。手にした剣ではなく、左腕で夜々のこぶしを受ける。

押し切られそうになるのを、火垂が後ろから支えた。それでもなお、夜々の方が勝っている。このまま押し切れば——

そのとき初めて、マグナスが乙女たちに右手をかざした。

指先から五本の糸が伸び、二本は火垂に、二本は玉虫に到達した。二人の力が一挙に増して、夜々の力と拮抗する。と同時に、玉虫の魔術回路が起動した。

いかなる魔術だったのか。変化は玉虫ではなく、夜々に生じた。

雷真の反応は速い。右腕に左手を添え、さらなる魔力を練り上げる。夜々はすぐに立て直したが、全然、出力が上がらない――

（夜々の魔力を減退させて……いや、奪っている――）

玉虫はどんどん魔術の効果を高めていく。ドレイン系の魔術は極めて高度なプログラムと、繊細なコントロールが必要だ。それを平然とやってのけながら、マグナスは三体もの自動人形を同時に操っている――

そう、三体いるのだ。

気付いたときにはもう遅い。（糸）の最後の一本は鎌切に到達している。鎌切は大鎌を振りかぶり、雷真の背後に転移した。

大鎌が雷真の首を狙う。雷真はかがんでかわしざま、鎌切の腹を蹴った。

反撃した――目を見張るアリスの前で、雷真はマグナスに笑みを向けた。

「空間転移は確かに脅威だ。が、別に速度が増すわけじゃない。仕掛けてくるタイミントと、位置さえわかりや対応できるさ。タネの割れた手品はお遊戯にすぎない――おまえの

言葉だったよな？」

「……学院に席を置く者として、後輩にひとつ、知恵を授けよう。魔術の有用性を決めるのは性能の優劣ではない。重要なのは——使い方と、使いどころだ」

再び鎌切が消える。と同時に、夜々の頭上に出現した。

夜々を狙ったようだが、夜々は玉虫と力比べ中で、まだ金剛力が効いている。あんな鎌でやられはしない。

「下だー ライシン——」

アリスが言い終わる前に、雷真も気付いた。

鎌切の派手を動きは陽動だ。本命は——火垂！

雷真の眼前、視線より低い位置に、いつの間にか火垂が転移していた。

火垂はほかの二体より、はるかに攻撃速度が速い。

まさに、目にも留まらない。稲妻のような掌底が繰り出される。

反応できたのは本能のなせるわざ。少なくとも、「見て」よけたのではないだろう。

雷真は地面を蹴って飛び退いている。掌はぎりぎり、届かなかった——

——はずだった。

それなのに、雷真の口から、血とも胃液ともつかない体液があふれた。

「が……は……っ——」

体内で爆薬が炸裂したような衝撃。立っていられず、雷真は床に手をつき、自分が吐いたものを凝視した。自分が何を喰らったのか、理解できていない。

衝撃波、ではない。

あの一瞬、雷真は金剛力を自分に使ったようだ。掌底が衝撃波を生み出したとしても、硬化した筋肉の装甲が受け止めてくれたはず。

夜々が泣きそうになりながら、雷真の元に戻ってくる。

「雷真！ しっかりしてください雷真！」

「何……だ……今の……は……？」

マグナスはむしろ哀れむように、紅い瞳で雷真を見下ろした。

「火垂の力を見誤ったな」

……そうか。勘違い、していたのだ。

火垂は夜々と同じく、魔術で自らの身体能力を高め、物理攻撃で戦うタイプに見えた。アリスもそう思ったし、雷真もそうだったのだろう。

だが、あの身体能力が別の魔術の（副産物）だとしたら？

魔術の効果を援用して、ついでに身体能力を高めていたのだとしたら？

「鈍だ、おまえは」

というマグナスの声は、雷真のすぐ真後ろで聞こえた。

空間を転移したようだ。いつの間にか、その手に短刀が出現している。

夜々は反応できていない。短刀が雷真の首筋を切り裂く——寸前。  
がきんつ、とアリスの左腕が刃を阻んだ。

「……アリス・ラザフォード。何の真似だ？」

マグナスが意外そうな顔をする。

アリスは左腕——機械義肢だ——を力任せにねじり、シリンダーをわざと破損させた。  
途端に、割れた金属管から赤いガスが噴き出した。

「マスター——下がってください——」

火垂が叫ぶ。浮き足立つ（戦隊）を尻目に、アリスも叫んだ。

「夜々——ライシンを——」

夜々はあわてて雷真を抱き上げ、転がるようにマグナスから逃げた。アリスもまた飛びのきながら、左のピアスを外し、ガスの中心に投げつける。

魔力を送って、魔術を起動。ピアスから火花が散って、それはたちまちガスに引火し、大爆発が起こった。

煙に紛れ、ホールの端へとエスケープ。あらかじめ目星をつけていた出入口に、夜々と一緒に飛び込む。

その先は階段になっていた。最悪なことに、下り階段だ。



「アリスさん、どう……どうしたら……っ!?」

「しー 隠れてー」

夜々を黙らせ、階段を駆け降りる。

二階ほど降りたところで、うす暗い横穴を見つけた。とつさに雷真を放り込み、頭上の様子をうかがう。マグナスは近づいてきている……が、その歩みはゆっくりだ。やはり、この先は行き止まりなのだろう。

「雷真……雷真……っ」

声を殺して、主を揺さぶる夜々。雷真は答えない。どうやら、気絶したようだ。出血はほとんどないものの、相当なダメージを受けている。

ボロボロの雷真を見ているうち、アリスの視界がぼやけた。

馬鹿な男だ。本当に。どうしようもないくらい。

胸が熱くて、熱くて、たまらない。

他人を欺き、陥れ、自分のために利用してきた僕。

彼は、その対極にいる。他人のために、自分を欺き、自らを窮地に陥れる。

この稀少な、珍獣みたいな男を、人類から奪ってはいけない。

彼を死なせるわけにはいかない。死なせては、いけない。

こんな綺麗な気持ち、薄汚れた僕にも残っていたなんて——正直、意外だ。

笑いが込み上げてくる。生まれて初めて、神さまに感謝しなくなった。

（そうだ、僕にはまだ、最後の武器がある）

このときのために用意されていたんじゃないかと思うほど、びったりの武器が。

「夜々。頼みがあるんだ」

夜々は切迫した表情で、すがるように見上げてきた。

「戦いが終わった後、僕の死体を選び出して欲しい。誰にも見つからないように」

「え……アリスさん……どういう意味ですかっ？」

「僕の魔術回路は優秀だよ。何せ、あのエドワード・ラザフォードが作らせたものだからね。それでも、数日もすると効果が切れちゃうんだ」

悪戯いたづらっぽくウインク。そして、魔術回路（虚像）を起動した。

変化したアリスの姿を見て、夜々は大きく目を見開き――

そして、すべてを理解して、涙をこぼした。

「おや。僕のために泣いてくれるのかい？」

「だって……っ」

「君は優しいね。僕は君にひどいことを言ったのに」

そつと、細い肩に手をかける。

「手を貸してくれるね？ 僕は彼を助けたいんだ」

うなずく。夜々の瞳に映っているのは、もうひとりの雷真だ。傷のつき方も、にじんだ血も、何もかもがうり二つ。

雷真に化けたアリスは、本物の雷真にも（虚像）をかけた。

雷真は瓦礫の一部に擬態して、横穴の奥に押しやられる。腐っても（虚報活動専門）の魔術、よほど精緻な探査をしなければ、見つからずに済むだろう。

「さよなら、ライシン。君との婚約者ごっこは——楽しかったよ」

別れを言って、アリスは横穴を出た。夜々とともに階段に戻る。

踊り場の手前で気配を殺し——

降りてきた火垂に、夜々が奇襲を仕掛けた。

蹴りが直撃。火垂を弾き飛ばす。大したダメージではないが、奇襲は成功した。

火垂が反転して着地する。その背後に、マグナスの影が立った。

アリスは雷真のイントネーションを真似て、

「勝ったつもりでいたか、マグナスさんよ。俺はまだ死んでないぜ？」

声のピッチは魔術が調整してくれる。だが、自分で確かめることはできない。そっくりに聞こえているだろうか。不安は尽きないが——やって見せる。僕はずっと、多くの人間を騙してきたんだ。今さらマグナスひとり、騙し通して見せる——

「行くぞ、夜々」

「はい！」

力強くうなずく夜々に、アリスは魔力を送り込んだ。

戦闘が再開される。夜々は体ごと火垂にぶつかっていく。

だが、スコープコン（戦隊）は三体もいるのだ。玉虫が剣を抜き放ち、火垂に加勢する。夜々はたちまち追い詰められた。

鎌切が大鎌を手に、アリスの方に跳んでくる。

——潮時だ。アリスは心の中で微笑む。

首をはねられても、ブコウ（虚像）は効果を失わない。ここには雷真そっくりの死体が残り、本物の彼は見向きもされない——はずだ。

そんな欺瞞がマグナスに効くのかどうか、それは賭けだ。だが、アリスの読み通りなら、多少の疑念が残っても、マグナスは深追いしないだろう。

（さよなら、ライシン）

アリスはもう一度、心の中で別れを言った。三日月のような軌跡を描き、アリスの首を刈り取ろうと迫る白刃が……不意に止まる。

「……………」

アリスの眼前で、鎌切が苦しげに身をよじっている。身動きが取れないようだ。

気がつけば、青白い魔力の糸が、鎌切の体にまとわりついていた。

何だ、と思う間もなく、アリスの肩に誰かがもたれかかってくる。その拍子に、魔力の糸がアリスにも接触し、アリス渾身の緊張はいともたやすく壊れてしまった。

抱きついてきたのは、雷真だった。

浅い呼吸を繰り返しながら、アリスを抱きしめる。いや、寄りかかったのか。

「ライシン……何を……やってるんだー 僕がせつかく……馬鹿だよ君はー」

「馬鹿はおまえだー」

怒鳴られる。熱い息が耳にかかって、アリスはびくつとした。

「身勝手なんだよー 俺を巻き込んで……シャルやアンリを振り回して……さんさん好き放題やっておいて、勝手にさよならとか……ふざけんなー」

「でもっ、僕は君たちを……」

「贖罪の気持ちがあるなら――」

肩が折れそうなほど、アリスを強く抱きしめる。

「生きて、償えー」

思わずあふれそうになる啜咽を、アリスはとっさに噛み殺した。

生きろ、と。生き続けろ、と。

そんなことを他人に言われたのは、初めてだった。

雷真はマグナスを見上げ、自分の相棒に呼びかけた。

「やるぞ、夜々―」

「はい―」

どこにこんな力が残っていたのか。雷真らいまことから、さらなる魔力があふれ出す。

だが――結論から言えば、その魔力が発揮される前に戦いは終わった。

「時間切れだよ、マグナスくん」

階段の上から、学院長の声がした。

5

魔術合金の地面を蹴けって、キンバリーが疾走していた。

金糸で縫い取りがされた、フードつきの黒マントを羽織はっている。その動きは飛ぶように軽やかで、まったく無駄がない。

例の（聖堂）から四百メートルほど離れた地点で、ロキを発見する。

大剣を地面に突き立て、杖代つゑしろわりにしている。何をやらかしたのか、魔力は尽きかけ。色白の顔は普段にも増して青く、体が小刻みに震えていた。

驚かさないよう、わざと足音を立てて近付く。

「どうやら、私は必要なかったようだな」

あたりに敵の気配はない。焦げた自動人形の残骸が転がっているだけだ。

「この残骸、コードPXだろう。君がやったのか？ ケルビムの炎で？」

「……不死鳥を炎で殺すことなど、できはしない」

ロキは朦朧もろくとしていているらしい。言葉に力がない。

「では、どんな手を使った？ ありふれた手品じゃないだろう？」

「炎は何も……相手に叩たたきつけるばかりじゃない……」

「——純粹に推進力として使った？」

答えないが、肯定だろう。大剣の質量を加速してぶつけた——そんな原始的な手段で、あのフェニックスを叩き斬ったというのか？

フェニックスの炎は攻撃に使うばかりが能ではない。相手の攻撃に噴射をぶつけ、威力を減殺することもできる。その防壁を突破できるほどの加速を得たのなら——衝突の衝撃でケルビムが折れてもおかしくはない。

ケルビムは確かに満身創痍まんしんそういだが、まだ剣の形を維持している。

念動によって強度をカバーしたか。かかる衝撃を計算に入れば、必要な魔力は人間の限界値をはるかに超えている。数百人がかりの儀式魔術なみだ。

「……見事だ」

心底から感服して、キンバリーは誓ちかめた。ロキは皮肉げに唇をゆがめ、

「あんたに譽められると……裏を感じてしまう」

「本心からの言葉さ。ローゼンベルクは殺さなかったようだな。死体がない」

「魔術師としては……殺した。利き腕を奪い、魂に恐怖を刻んでやった……」

伝説級の自動人形を持ち出した相手に、絶対に超えられない力の差を見せつけて、完膚なきまでに叩きのめした。まず立ち直れない。仮に立ち直れたとしても、心的外傷を抱えて生きることになる。戦場に復讐するのは不可能だ。

ふと、ばさつと羽ばたき音がした。

振り仰ぐと、竜が滑空してくるところだった。もちろんそれはシグムントで、シャルとフレイを背中に乗せていた。シャルはキンバリーに驚き、しかしそれ以上にロキの様子に驚いて、あわてて飛び降りてきた。

「何をやらかしたのよー 死にかけじゃないー」

「……おまえには関係のないことだ」

「ロキ、めつー シャルは心配してくれてるのにー」

姉に叱られ、ロキは閉口した様子で顔を背けた。ふらりと倒れそうになるのを、フレイがたわわな胸で受け止める。

「ロキー 大丈夫？」

「……悪い、バカ姉貴。今日は……ここまでだ」



がくつ、とロキの首から力が抜けた。全体重をフレイにあずけてくる。

「ロキ!? ロキー」

「心配するな——とは言えんが、魔力の使いすぎで気を失っただけだ」

口では軽く言いながら、キンバリーは急いでロキの体を点検した。

左手首の傷に気付く。腕にはヒモが食い込み、強引に血を止めた後がある。左手首には血が通っていない。動脈をやったのか。急いで処置しなければ、命に関わる。

「これはまずいぞ。今すぐ上に運んで、あのヤブ医者に処置させろー」

普段は出さない大声を出してしまう。シャルもフレイも真っ青になって、あわててロキをシグムントに乗せ、地上に向かって飛び立った。

あわただしく竜が去ると、キンバリーは急に可笑しくなった。

「それにしても——大した小僧だ」

笑うキンバリーの背後には、二十メートル近い亀裂が生じていた。

ケルビムが叩き割ったのだらう。魔術合金製の堅牢な地面が、氷河の裂け目のように、ぱっくりと口を開けている。

「本当に、大したものね」

琴の調べにも似た、しっとりとした声がかかる。

キンバリーは驚きもせず、背後を振り向いた。艶やかな着物姿の女性が、同じく着物姿

のいろりを連れて、こちらに歩いてくるところだった。

「これは花柳斎殿（はなやうさいだん）。このようにどこにどうして？」

「貴女（あなた）と同じよ。可愛い坊やたちが気になってね」

「私にそんな優しさはないよ」

硝子（しよ）は眼帯のレンズをくるくる回して、あたりを見回した。

「……ここで、ローゼンベルク家のご嫡男（しやくなん）がつぶされたのね」

「ああ。ドイツは（十字架（十字架）の騎士団（騎士団））を見限るだろう。フラガラッハ計画は頓挫（とんざ）、ドイツの神性機巧開発は大幅に後退だな」

「ご嫡男をやったのは、ロキという、あの坊や？」

「そうらしい」

「でも——この騒動は（下から二番目（下から二番目））の仕業として記憶されるのでしょうか」

髪をかき上げ、やりきれない様子でため息をつく。

「（十字架（十字架）の騎士団（騎士団））との対立、一度は不幸な行き違いで済みますこともできた。でも——日独にはもう遺恨ができてしまったわね」

その通りだ。たとえ表沙汰にはならないとしても、軍首脳は怨恨（うとみ）を抱えた。きたる世界大戦では、日本とドイツは敵対することになるだろう。

「またひとつ、平和のかせが外れてしまった……。もつとも、私は世界の行く末になんて

興味はない。私の興味が向かうのは――」

「神性機巧、かね？」

ふっと妖艶な笑みを浮かべ、硝子がかぶりを振った。

「私の望みは人間を造ることよ。神さまの子どもを、ね」

きびすを返し、去っていく。いろりも一札して、その後が続いた。

「謎の多い御仁だ。おまけに毒がある。もつとも、他人のことは言えんがね」  
キンバリーは苦笑して、硝子とは逆の方向に歩き出した。

## 6

雷真は睡然として、学院長を見上げた。

「状況終了だ、マグナスくん」

「――はい」

火垂、鎌切、玉虫の三体がただちに下がる。

学院長は雷真を見下ろし、ゆっくりと階段を降りてきた。

雷真の腕の中で、アリスが身を硬くする。そんな娘の様子をじつと眺め、それから雷真を見て、学院長はにこやかに言った。

「君たちの勝ちだ。あれはおまえが手配したのかね、アリス？」

アリスはうつむき、消え入りそうな声で応えた。

「……はい」

「よくやった」

小さな声だったが、雷真の耳には確かに聞こえた。学院長は「よくやった」と言ったのだ。言われたアリスが呆然としてゐる。何を誉められたのか、理解できていない。

だが、確認する間もない。学院長はさっさと背を向け、

「では行こうか、マグナスくん」

雷真は瞬時に沸点を越えた。

「待てよ、クソ親父——ほかに何か、こいつに言うことは——」

「いいんだ、ライシン」

雷真の腕をつかみ、アリスが止める。

「いいんだ」

そう言ったアリスは、はかなげに——でもどこか誇らしげに、微笑んでいた。

「……いつまでアリスさんを抱っこしてるんですか雷真」

夜々の冷たい声で我に返る。雷真はあわててアリスを放した。よろよろとふらつくのを、夜々が素早く身を寄せて、支えてくれる。

「……ごめん、僕は先に行くよ。シンが心配だ」

アリスは申し訳なさそうにそう言って、学院長に続き、階段を上がって行った。

「あいつが素直に『シンが心配』なんて、うす気味悪いな」

苦笑する雷真。釣られて、夜々もくすつと笑った。

アリスとすれ違う形で、グリゼルダが姿を見せた。二体の機械天使を引き連れて、早足で階段を降りてくる。

「バカ弟子ー 無事か!?」

グリゼルダの顔を見た途端、雷真の中で、張り詰めていた糸が切れた。

今さらのように敗北感が込み上げてくる。

——負けた。

完全な、敗北だ。勝負にもなっていない。

マグナスは右腕一本、**（戦隊）**を二体しか使わなかった。それなのに——

（俺は一体、何に追いついたつもりでいたんだ……!?）

紅翼陣こうよくじんが使えれば互角か？ 同じ土俵に立てると思ったか？

違、うー 少しも縮まっていない！ 兄との絶対的な差は——

「お師匠さま……もう一度、俺を鍛えてくれ。徹底的に……」

何が万全の体調だ。そんなものを維持しても、あいつには届きもしない。

死ぬほどの——死を超越するほどの——修練が必要だ。

頭を下げ、懇願する雷真を、グリゼルダはじつと見つめた。

そつとふところに手を差し入れ、封筒を取り出す。

「そう言えば、渡しそびれていた」

「……手紙？　差出人はエリアーデ——ってイオ？」

イオネラからの手紙だ。雷真は紙片を取り出し、急いで読んでみた。

「親愛なるライシンへ。(ヘミカエル)と(ヘラファエル)を納品するついでに、君への手紙を書いていきます。これまでの私の作風とは一八〇度違うけど、どっちも可愛い自信作だよ。機会があったら、会ってみてね。二人にも君のことは伝えてあるから」

「……いきなり彫倒されたけどな」

二体に目をやる。あちらは雷真に興味がないらしく、目も合わせない。

「実物を見たら驚くと思うよ。エヴァとは全然、コンセプトが違うからね。私が作りたいのは人間そっくりの人形だけど、その目的に近付くために、敢えて真逆の方向性を試してみたの。と言っても、基礎設計は先方のオーダー通りで——」

相変わらず、自動人形のことになると口数が多い。

イオネラの天真爛漫な笑顔を思い出し、雷真の胸がぼかばかとあたたまった。

紙幅の大半を二体の説明に費やし、よくわからない手紙は終わる。

ただし、最後に嬉しい文章が添えられていた。

「査問にはもう少しかかるけど、〈ミカエル〉と〈ラファエル〉のおかげで、思ったより早く戻れそうだよ。じゃあまたね。再会を楽しみに！」

イオネラの明るさが伝染したのか、いつしか雷真の気分も軽くなっていた。ひよつとして、グリゼルダは雷真を励まそうとしたのだろうか。

顔を上げる。そこにあつたのは、予想外に冷たい表情だった。

「何を和んでいる。読めと言ったのはその先だ」

「あ？ えーと……『貴方のイオネラより裸の愛を込めて♡』」

イオのやつ、爆弾を置いていきやがった！

「どういう意味だ、それは……！ 貴様、まして女を手籠めに……っ！」

「違うー あいつは単に服を着るのが嫌いなだけで——」

「夜々もその点には関心があります。大いにあります」

「妙な関心を持つな！ つか、おまえはイオを知ってるだろー」

「雷真、くくくくくいつの間に裸の愛なんて……」

「私を弄もてあそんでおきながら、修行をつけてくれなどと、よくもぬけぬけと……！ ええい、

剣よこいー こいつを斬り捨てろー」

殺気立つ二人。身の危険を感じ、雷真は脱兎だつとの如く逃げ出した。

這うように階段を上がっていると、不意に悲鳴のような叫びを聞いた。

「シンー シンー」

アリスの声だ。三人は顔を見合わせ、地上へと駆け上がった。

一階に飛び出す。建物の出入口のところで、二つの影が重なり合っていた。

ぼろぼろのシンに、アリスがしがみついている。

「シンー この不忠者！」

月光がシンの表情を照らし出す。既に外傷は修復されていたが、シンは血と泥で汚れ、憔悴しょうすいしきつているように見えた。

「すみません、お嬢さま……。自決すべきだとも思ったのですが……」

心底から己おのれの不甲斐ふがひなさを悔やむように、弱々しくつぶやく。

「思うところがあり、『生』を決断しました。そのために、いらぬお手間を——」

「いないわけがあるか！」

アリスはもう涙を隠さず、泣きながらシンの胸を叩いた。

「そんなこともわからないのか！ おまえはバカだ！ ライシンなみのバカだ！」

「俺おれを基準にするな！ おいシン、何を悲しそうな顔してやがる！」

思わず突っ込みを入れてしまう。だが、主従にはもう聞こえていない。

アリスはシンのシャツを握りしめ、血まみれの胸にひたいを押しつけた。



「おまえは僕のものだ。これまでも、これからも！ おまえが死んでいいのは、この僕が許したときだけだ。それまでは、死ぬことも、いなくなることも許さない。できるかい、このうすのろ野郎……」

上下に揺れる主の肩に、シンはおずおずと手を伸ばす。

「アリス・ラザフォードの執事は完全無欠ではございませんが——」

触れようとして、ためらい、さんざん迷って、最後にはそつとつかむ。

「お嬢さまのご命令とあらば、たやすいことです」

かすかに微笑んで、そう告げた。

アリスはもう返事をしない。夜々がとなりでしゃくり上げ、グリゼルダが顔を背けた。

二人とも、魔術師と自動人形の関係には、感じるものがあるのだろう。

寄り添うシンとアリスを見て、雷真も胸のつかえがとれたような気がした。

そして、改めて自分の目的を思い出す。

俺は負けた。だが、まだ死んではない。

この次戦うとき——勝てばいい。





# Epilogue

悪魔が誘う



「今すぐやるのかい？ オススメはしないけどね」

そう警告されたにもかかわらず、シャルと雷真は即時の解呪（アリスベル）を決めた。

シン奪還作戦の開始前、地下ホールでのことだ。

アリスは魔法円を床に描き、祭壇代わりのテーブルを設置した。その上に妖精サイズのシャルをのせ、雷真をシャルの前に立たせる。

フレイとロキ、夜々とシグムントが見守る中、アリスが手順を説明した。

「これから解呪に入るけど——ライシン、君はシャルロットが好きかい？」

「何だいきなり——」

夜々の瞳孔がきゅううつと収縮する。シャルとフレイも真剣な面持ちで雷真を見ている。普段ならごまかすところだが、解呪に関係する質問であれば、そうもいかない。

「好きか嫌いかで言えば、まあ……………好きだ」

「なら、その気持ちを込めて言いなよ？」

「ちよっと待て——まさか解除コマンドって……!?」

「うん。コマンドは『I love you』だ」

「てめえー よりにもよって、何て台詞を設定しやがった！」

「解説は三つのトリガーからなっている。まず、一〇センチの距離で見つめ合うこと。次に、コマンドを正確に告げること。そして、発話行為に嘘が交じらないこと」

「……嘘？」

「心を込めて言えってことだよ。対策としては——そうだね、シャルロットのいいところを思い浮かべればいい。失敗したら、シャルロットは二度と戻らない」

「ふぎけるなー そんな危険なことが——」

「やるのかい？ やらないのかい？」

シャルはうつむいてしまった。不安なのだろう。無理もない。

雷真は腹をくくった。「やるしかねえだろー」と乱暴に答える。

フレイと夜々の視線が痛い。雷真はやぶれかぶれで、シャルに顔を寄せた。

シャルの瞳が熱っぽく潤む。心細げな表情が妙に可憐だ。雷真は赤面しながら、

「シャル。おまえは、その……乱暴だ」

がくつとコケるシャル。

「素直じゃないし、何かっちゃラストアカノンをぶっ放すし、人の話を聞かない」

「何よー ケンカ売ってるのっけ」

「だが、おまえは（高貴なる者の義務）を知っていて、相手や相手の自動人形を気遣う、

優しいやつだ。俺はそんなおまえが……好きだ」

利那、ばんつ、と軽い破裂音がして、あっけなく呪いが解けた。

「やったわー 元の大きさに——」

台詞の途中で、シャルが凍りつく。

シャルは全裸だったし、へそから一〇センチの距離に雷真の頭があった。

「ら……ラスターカノンー」

「あのとときのシャルロットときたら、傑作だったよ」

くすくすと楽しげにアリスが笑う。

医学部五階、〈付属病院〉の入院病棟。アリスはベッドサイドに座って、入院中の女子学生と談笑していた。

「あの〈暴竜〉がな。彼女もまた、少女だったということか」

ふふつと品よく微笑んだのは、蜂蜜色の金髪が美しいオルガ・サラディーン。アリスの変装ではなく、本物の学生総代だ。

アリスは居住まいを正し、オルガに真摯な瞳を向けた。

「礼を言うよ、オルガ。君の迅速な対応のおかげで、僕は王室に〈秘密〉の存在を伝えることができた。……セドリツクの亡骸が学院にあるってことをね」

陽動役の雷真らいしんとロキが暴れている隙に、潜入役「兼」主力のシャルとフレイがロッカーに潜入、安置されていた遺体を運び出したのだ。

「なに、相利共生というものさ。……それにしても、思い切ったな。学院長は罷免かいけんされてもおかしくないぞ」

セドリツクはドイツによって暗殺された——ということになっていた。だが、学院から遺骸いがいが出たことで、ドイツに対する疑惑は晴れた。英国とドイツは急速和解きゅうそくかいげし、世界大戦は一時的に回避された。

「ババは冷徹で狡猾な人間だよ。あの程度の失点で退陣することはないさ」

「結果を見る限り、そのようだ。『学院に害意を持つ者の工作である』なんて言い分を、どうやって王室に認めさせたのか……おまけに、君たちもおとがめなしとは」

「僕らはその『工作』を、ババの命を受けて暴いたって扱いだからね。処分どころか褒章ほうしょうものだよ。それに——ババはたぶん、あれを公表したかったんだ」

「公表？ なぜだ？」

「世界大戦の勃発は少しだけ早い——ババの意図したタイミングじゃない。かと言って、ババが自分であれをさらせば、関与を認めるようなものだ。誰かに……僕らみたいな連中に暴かせたかったのさ」

「そうすれば、逆に『陥れられた』と言い訳が立つ……か。言われてみれば、今回のこと

も、結局は学院の意志なのか、そうでないのか、あやふやになってしまったな。人を煙にまくのが上手い——あの狸らしいやり口だよ」

オルガは忌まわしそうに笑つて、それから、壁の時計に目をやつた。

「——うん、もうこんな時間か。車椅子を押してくれないか、アリス？」

「出歩いていいのかい？」

「来週には復帰する。君に代役を任せていては、何をされるかわからんからな」

「君の縁談はブチ壊してあげたじゃないか」

「おかげで私は勘当されるところだったよ。君のやり方は過激すぎる」

苦笑するオルガに手を貸して、車椅子に座らせる。そのまま車椅子を押して、アリスは病室を出た。手回し機巧のエレベーターで一階に下り、廊下に出たところで、

「ご機嫌よう、学生総代。お迎えに上がりました」

見目麗しい男子学生が、爽やかに声をかけてきた。

金髪、色白の好青年。穏やかな雰囲気をもっている。その後ろにもう一人、背の高い男子学生がいる。こちらは黒ずんだ金髪で、目つきが鋭く、攻撃的な雰囲気だ。

ゼカルロス兄弟。兄弟そろつて〈十三人〉に名を連ねる実力者だ。ちなみに、好青年の方が弟で、無愛想な方が兄だった。

「すまない、アリス。ここでもいい」

「代わりますよ、ミス・バーンスタイン」

ゼカルロス弟が気さくに微笑み、懐かしい名前を口にした。

嫌な予感……と言うほどでもないが、いい予感もしない。アリスは何とも言えない気分  
で、オルガと兄弟を見送った。

一〇分後、オルガは中央講堂の会議室にいた。

そこには大きな円卓が置かれ、そうそうたるメンバーが座っている。

「ご臨席、感謝する。これより〈円卓会議〉を始めよう。――〈十三人〉諸君」

オルガは睥睨するように、ぐるりと一同を見回した。

オルガの対面に座するのはマグナスだ。今日は火垂のみを連れている。

そのとなりにロシアの〈女帝〉ことソーネチカ。一応は制服を着ているが、どう見ても特注品で、長いスカートはパニエで膨らませ、ベストはコルセット風。ブラウスの胸元は大きく開き、学生というより前世紀の貴婦人めいた仕立てだった。

目を惹くと言えば、その対面。二人の男子を従者のように従えて、ハカマ姿の大和撫子  
が座っている。こちらは制服ですらない。リボンとブーツだけが洋装だ。

一際異彩を放っているのは、雑誌を顔にのせ、足をテーブルにのせた男子学生。この場  
でただひとり、礼儀をわきまえていない。



ほか、インドからの留学生と、ゼカルロス兄弟、黒塗りの剣を抱いた女子学生、一〇歳くらいに見える幼い少女……と続く。

最後の一人が、英国が誇る秀才、執行部議長セドリック・グランビル——これが替え玉であることは、この中でオルガとマグナスだけが知っている。

呼ばれなかったシャルとロキを入れて、計（十三人）だ。

「ご足労願ったのはほかでもない、〈下から二番目〉と〈剣帝〉の件だ。知っての通り、彼らは破竹の勢い——もはや誰にも止めることができない」

ゼカルロス弟がレジュメを回す。そこに計画の全貌（全貌）が書いてある。

黙読する一同。表情の変化を冷静に見極めつつ、オルガは続けた。

「学生たちはもちろん、学外からも苦情がくる始末だ。執行部としても好ましくない状況だが——あいにく夜会規約上は何の問題もない。そこで、我々が一致団結して、あくまでも〈フェアな手段〉で介入したいと——」

すつと優雅に、ロシアの〈女帝〉が立ち上がった。

「——帰るのか、ソーネチカ？」

「ごめんあそばせ。わたくし、徒党を組むつもりはありませんわ」

物腰こそ穏やかだが、瞳は火のように燃えている。腹を立てているようだ。〈女帝〉はスカートをはくがえし、ヒールの音を響かせて、会議室を出て行った。

ゼカルロス弟が苦笑いを浮かべる。

「あちや。早くも一人、計画から外れちゃいましたね」

「彼女は『徒党を組むつもりはない』と言った。どう出るかはわからんよ。案外、彼女が率先して実行してくれそうなものだが——マグナス？」

対面に目を向ける。銀の仮面の男が、音もなく席を立っていた。

「貴方も退出されるのか？」

「そちらの提案は理解した。だが、あいにく興味がない」

火垂を連れて去って行く。オルガは一同を見回した。

「反対の者は遠慮せず申し出てください。イザナギ流のお姫さまはどうかかな？」

大和撫子に話を振る。少女は「きつ」とオルガをにらみつけ——

急に元気を失くし、しおれたようにうつむいてしまった。

「……どうした、顔色が優れんようだが……うん、泣いているな？」

一同の視線が集まる。オルガの言葉通り、少女はぼろぼろと涙をこぼしていた。しゃくり上げそうになっている。とても返事ができる状態ではない。

従者の片方、体格のいい男子が立ち上がり、主に代わって頭を下げた。

「すみません、学生総代。お嬢は今、その……ハートブレイクゆうやつで」

「傷心——失恋でもしたのか？」

禁句だったらしい。少女はわっと泣き出し、顔を覆って走り去った。

「お嬢!? ええつと……かんにんしたってくださいー お嬢、持てコラー」

「ほな、僕らはこれでー」

もう一人の従者、線の細い男子が愛想笑いを振りまく。何だかわからないうちに、三人はあわただしく出て行った。

「うん……まあいい。そちらの新入り君はどうだ?」

態度の悪い、一番やる気のなさそうな男子に水を向ける。

彼は<sup>け</sup>気だるげに雑誌をどかした。その下にあつたのは、意外な美貌<sup>ひがう</sup>だ。退魔的な無氣力が、不思議な色気を発散している。

ほんやりオルガを見て、そしてため息をつく。

「どうでもいいさ。そんな話なら煽らせてくれ。昼寝がしたいんだ」

あくびをしながら去って行く。ゼカルロス弟が噴き出した。

「やる気のない人だなあー」

「それはそうだ。何せ、彼が〈下<sup>ウ</sup>から一番目<sup>グン</sup>〉なのだから」

「フェリクス<sup>ス</sup>の代わりに〈十三人<sup>ウツンズ</sup>〉入りしたんですよね?」

「彼の成績は最低だ。定期調査はすべて白紙、レポートは提出しない。そんな彼が放校にならずに済んでいるのは、ひとえに――」

「ずば抜けた才能を持っている？」

「そうだ。本気でやれば〈元帥〉園下に迫る——と言われている。もつとも、彼は一度も本気を見せたことがない」

「へえ……それは楽しみですね」

「ほかに不参加希望の者はいるか？ この集まりに強制力はないぞ？」

退出をうながす。だが、誰も席を立たない。

「では、残った者で実行に移すでしょう。〈十三人〉は順次〈自主降格〉し、夜会の舞台に立つ。下位の参加者を助けるも、排除するも自由だ。ただし、我々全員が参戦するまで——七ないし八夜のあいだは一切の交戦を行わないものとする」

「我々は」という意味ですよね？」

セドリツクが挙手して確かめる。オルガはうなずいて応えた。

「ライシン、フレイ、ロキが攻撃してきた場合、撃退して構わない」

「了解しました。このプロジェクトを何と呼びましょうか？」

「そうだな、〈十三人〉が他の〈手袋持ち〉を味方につけ、軍団を組織しようというのだ。駒の奪い合い、騙し討ち、計略策略何でもござれの争い——であれば」

しっくりする単語に行き当たり、首肯する。

「〈円卓戦争〉というのはいかがかな？」

見回す。ごんごんつ、と一同が机を叩いた。承認されたようだ。

「では、これより〈円卓戦争〉を始める。諸君、群雄割拠といこうじゃないか」  
不敵に言い放つオルガの膝で、赤い仔竜がにたりと笑った。

医学部一階、おなじみの病室で、雷真は慨然としていた。

「まったく、反吐が出る」

「……………」

「極めて不愉快だ。気分が悪い」

「……………」

「いっそ放血して、血管を洗いたい気分だ」

「だったらそうしろー 俺にぶつくさ言うなー」

ついに怒鳴って、起き上がる。

となりのベッドに寝ているロキが、さつきからうるさいのだ。

「何が不満なんだー 俺が血をわけてやったつてのにー」

「恩着せがましい東洋人め。やったものを少しばかり返してもらっただけだ」

「だったら気持ち悪いとか言うな！ もともとおまえの血だろー」

「黙れ。借りたものは現状維持して返すのが礼儀だろう。不純物を混ぜるな」

「どうやって分離しとくんだよー　つか、不純物扱いやめろー」

言い争っている、不意にドアが開いた。

「元気そうだね、ライシン。廊下まで聞こえてきたよ」

笑顔のアリスが入ってくる。ロキと雷真は同時に口をつぐんだ。

「おや、歓迎されてないね。ひょっとして、愛の営みを邪魔しちゃったかな？」

「ふざけた誤解はやめろー」

仲良くハーモニー。アリスはくすくす笑って、

「元気なら、少し付き合いなよ。シンが紅茶を淹れてるんだ」

かなり血を抜かれたので、体力が戻っていない。夜々やクルールに無断で外出するの

も気が退ける。が、ここでロキと罵り合っているよりはマシだろう。

アリスに導かれるまま、医学部の前庭に出る。

前庭には白いテーブルセットが置かれ、シンが午後の紅茶を用意していた。

「どうぞ、ミスター・アカバネ」

椅子を引いて勧める。雷真は警戒しながらも、大人しく座らせてもらった。

しばし、アリスと雷真は無言で紅茶を楽しんでいた。

ゆったりとした気分で、色づき始めた樹木を眺める。

やがて、ひとつの疑問が浮かび上がった。少し迷った末、雷真は口を開く。

「なあ、おまえが言った、心の傷がどうのって話さ」

「――神性機巧の？」

「あれは、夜々じゃなくて、おまえのことを言ってたんだろ？」

「――」

「おまえには魔術回路が内蔵されてて、学院長は神性機巧を求めてて――その上、おまえはこうも言ったんだ。「僕が目的じゃないかって、心のどこかで期待していた」ってな。つまり……おまえが学院の神性機巧、なのか？」

「……かもしれないって、僕が勝手に思っただけさ」

アリスはふっと寂しげに微笑み、カップを置いた。

「僕はね、ライシン。五体満足では生まれなかったんだ」

左手をさする。見たところは何の変哲もない、本当は機械仕掛けの腕を。

「僕の命をつなぐには、どうしたって機巧手術が必要だった。僕が二歳の頃、パパは学院をのっとして、強烈に神性機巧開発を推進した。娘なら誰だって期待しちゃうじゃないか。僕を「まともな」人間にしたいと、そう思っただけの行動じゃないかってさ」

「じゃあ、おまえが学院長の言いなりなのは……」

「パパが僕のためにしていることなら、僕は手伝いたいし、そうする義務がある」

「……学院長は、どうなんだ。あれから」

「何も変わらないよ。何も」

立場も、態度も——ということか。

「君とこうして紅茶を楽しめるのも、これが最後かもしれないな」  
不意に、アリスの声が湿った。

そう言えば、彼女は言っていた。寿命がとうとか——

雷真はよほど深刻な顔をしていたらしい。アリスは笑い出した。

「何て願してるんだよ。ほとぼりが冷めるまで、身を隠すって話さ。そのあいだに、君がバカやって死んだりしたら、もう一緒に紅茶は飲めないだろう？」

「……俺の心配かよ」

だが、動悸は治まらない。何と言っても、アリスは他人を騙すのが得意なのだ。

ふと、アリスは真剣な眼をして、まっすぐに雷真を見つめた。

「ねえ、ライシン。本当に、僕のものにならないか？」

「……断る」

「なら、前に君が言った通り……僕を、君のものにしてくれないか？」

「それも断る」

「……そうか。残念だ」

「おまえは、おまえのものだ」



「それをおまえが理解して——対等の存在としてなら、迎えてやる」

アリスは呆けたように雷真を眺めた。

それから、ほんのりと頬を染めて、恥ずかしそうに横目で見た。

「それは……プロポーズと受け取っていいのかな？」

「駄目だー 曲解するなー どう考えても『仲間』の話だろー！」

「発話行為つてのはね、語り手がどんな意図で発したかよりも、受け手がどう感じたかの方が重要なんだよ。君にそのつもりがなからうと、君の言葉で誰かが傷つけば侮辱になるし——僕がプロポーズと受け取った以上、君は責任を取るべきだ」

言うが早い、雷真の膝に移動して、もたれかかってくる。

鼻先で髪が香る。少女の体温と体重に、雷真の理性はたちまちあやうくなつた。

幸い——と言うか何と言うか、雷真が間違いを犯す暇はなかった。

ぞくつと背筋に悪寒が走る。おそろおそろ振り向くと、うつすら微笑む羅刹……もとい

夜々が、雷真の背後で妖気をまき散らしていた。

「アリスさん……雷真から離れてください……夜々が笑っているうちに……」

「落ち着け夜々ー 笑ってはいいるが、すごく怖いぞー」

「雷真は黙っててくださいー この女狐は特に危険なんですー 雷真を騙して婚約に持ち

込むくらい朝飯前なんですー」

「おや、騙だましたなんて心外だね。ライシンは本当に僕と結婚したかったんだよ」

「嘘うそつくなアリスー 何しれつと爆弾発言してんだー」

「嘘なんてついてないよ。ほら」

アリスが右耳のピアスを指で弾はじき、魔力を送り込む。その途端――

「僕を抱けるかい？」

「毎晩のように安眠妨害してやる」

という、アリスと雷真らいしんの声が聞こえてきた。

時間が止まったような静寂。

やがて、最初に口を開いたのはアリスだった。

「僕は謀報活動が専門なんだよ？ 記録用の魔具は常に持ち歩いてるさ」

「雷真……本当に言ったんですか？」

真つ暗な瞳が雷真を見る。雷真のひたいから、どっと滝のような冷や汗あせが出た。

「怒らないから本当のことを言ってください……首を絞めるふりして頸骨けいこつを握りつぶしたり、顔を頭蓋骨ずがいこつごと引つかいたりしませんから……」

「する気まんまんじゃねーかー」

「雷真はバカですーっ！ うわーんっ！」

夜々が襲いかかってくる。間一髪、雷真はアリスを押しつけ、逃げ出した。

庭先で鬼ごっこが始まる。そんな二人を、アリスは笑って見送った。

主のカップにおかわりを注ぎながら、シンが不機嫌そうに顔をしかめる。

「ご機嫌ですね、お嬢さま」

「ああ、ご機嫌だよ」

「それはようございました。一方、私ははらわたが煮えくり返っております」

「男の嫉妬は見苦しいね。でも——今回は許そう」

「それは——ミスター・アカバネを始末してもよいと、そういう意味ですか？」

「ちよつと——何て会話してるのよー」

横から少女の声が飛んでくる。

帽子に仔竜をのせたシャルが、腕組みをして立っていた。

「貴方まで夜々みたいなこと言わないで——余計な危険が増えるじゃないー」

「ラザフォードの執事は優秀ですが、もとより危険です」

「聞き直らないでよっ」

「からかうなよ、シン。シャルロットはライシンのことが心配なのさ」

「なっ、こっ——」

「違うのかい？」

答えられない。シャルは耳まで赤くなった。

ふてくされた様子で、とすんつと雷真らいしんの席に腰を下ろす。

「シン。私にもお茶をいただける？」

「かしこまりました」

シンは手際よく紅茶を淹れ、シグムントには鳥肉のサンドイッチを勧めた。

しばらく、シャルは黙って紅茶を飲んでいた。

ちらつ、ちらつと視線を投げてくる。アリスは苦笑して、水を向けてやった。

「どうしたんだい？ 僕に言いたいことがあるんだろう？」

「……こないだの、呪いのろいの解除コマンドのことなんだけど。どうしてあんな……その……

ヘンな言葉を設定したのよー」

「彼が間違っても言わないような言葉、しないような行動を選んだつもりさ」

「な——貴女あなた、性格最悪ねー」

「知ってるよ。でも、それはお互いさまだろう？」

「ぐ……そんな「あり得ない」言葉を設定して、私を呪い殺すつもりだったの？」

「彼が解呪にこぎつけることはわかっていたよ。信じていた……と言うべきかな」

その意味がわかったのか、シャルは口をつぐんだ。

アリスは雷真が解呪することを知っていた。シャルが元通りになることも。雷真があ

「コマンドを言うことも……」。

「だから、あれは僕なりの誠意だ。お気に召したようで何よりです、姫」

「ききつ、気になんて金っ然、召してないわよ!? あんなの——」

思いきり否定してから、シャルは悔しげに、上目遣いでアリスを見た。

「……なんて否定したところで、貴女は、全部お見通しよね」

「そうだね。僕は君の三倍くらい賢いからね」

「ぐぐ……っ」

「まあ、君が彼にぞっこんなのは、学院中のみんなが知ってることだけど」

「嘘……でしょう? 嘘よね? 例によって、私を追い詰めて楽しんでるのよねっ?」

「さて、どうだろう?」

「本当のことを言って——」

腕をつかもうとするシャル。笑ってかわすアリス。

はた目にはじゃれ合っているようにも見える。二人のそんな姿に、鬼ごっこ中の雷真が

気付いた。夜々に飛びつかれながら、

「何か仲いいな。何を話してんだ、あいつら」

「さあ……でも、夜々のセンサーにびりびりきます。どす黒い殺気が勝手に……」

「出すな。それはしまっておけ」

夜々は雷真の背中から降り、ふわつと微笑んだ。

「よかったですね、アリスさん」

「ああ」

シンもな。

無表情のまま、淡々と紅茶を淹れる不良執事。一見、退屈そうに見えるが——彼が職務にどれだけ充実感を覚えているか、雷真はもう知っている。

学院長とアリスのあいだに何があったのか、これから何が起こるのかは知らない。

だが、とりあえず、笑っていられるだけの余裕がある。

それはいいことだ。間違いない。

だが、雷真の戦いはまだ終わらない。

マグナスと再戦するまでは、もう一か月少々しかない。

それまでに——身につけなければ。敵を上回る力を。

そして今夜も、夜会の幕は上がる——



## あとがき

こんにちは、海冬レイジです。

おかげさまで機巧少女も7冊目となりました！

今回は「死んでるわけがなかった！」あのキャラに焦点を当てています。作者もお気に入りのキャラでして、4巻201Pのイラストをいただいたとき、その（艶）な美しさに一発でやられてしまいました。既に今回のカバー絵もいただいているのですが、はかなくも美しい素敵カバーで作者大歓喜！僕は大変幸せ者です……！

実は今回の7巻、個人的に頑張った点があります。

心の子貴と慕うサイトウケンジさん（MF文庫Jでは『101番目の百物語』ハンデレッドワン・ひゃくもものひゃくも）を書かれています）から、「シャルがちよつとどころじゃなくいやらしい感じになるのを期待」とリクエストされたので、僕なりに無い知恵をしまりました。果たしてご期待に応えられたのかどうか、それはぜひ貴方の目でお確かめくださいね！

本文をご覧になった方はもう予想されていることと思いますが、次巻から（十三人群雄ラウンズぐんゆう潮捲編）カウリング開幕の予定です。



こ、これって夜会の本番ですよね……!? こいつらをやっちまったらもう、あとはロキとシヤル、そしてマグナスしか残ってないですからね!

シリーズが始まる前、編集部さまから『夜会で戦ってばかりのお話にはしないでね』というアドバイスをいただきまして、そこはかなり意識したつもりだったんですが、ここまでを振り返ってみると――

夜会の「外」で戦ってばかりだった件。

おいイイイー 根本的なところでアドバイスを生かせてねーじゃねーかー

でもドンマイー 次回からマジ『夜会がクライマックスー』になりそうで、作者もわくわくしています。エピソードでちょろっと顔見せしていますが、連中、〈十三人〉の称号は伊達じゃないってところを見せてくれるに違いないー

るろおさん、いつも素晴らしいイラストをありがとうございますー そして過酷なスケジュールを強いてすみません……。

既刊を読み直したび、「夜々のデザインは神の領域に踏み込んでいる……」と衝撃を受けております。今巻のイラストも超☆楽しみですー

高城計さんのコミック版機巧少女は3巻まで発売中ですー 原作1巻の(魔術喰い)編が終了して、ロキ・フレイ登場の(剣天使)編に突入しました。ロキがたまらなくカッコイイです。そしてフレイの巨乳小動物っぷりがバネエー

高城さんもまた、お休みがまったく取れない超過密スケジュールで……すみませんありますがとうございます……ー

海冬レイジの面例を見てくださる担当さま、超ややこしい本文をチェックしてくださる校正さま、営業さま、書店さま——本書の出版にお力を貸してくださったすべての方に、謹んでお礼を申し上げます。

そして本書をお買い上げくださった貴方に最大の感謝をー 海冬レイジが折れずに今日も戦っているのは、貴方の支えがあるからです。雷真と夜々が戦いの果てに何を見るのか、ぜひ完結までお付き合ってくださいー

ではまた次回、機巧少女8でお会いできますようにー

2011年11月 海冬レイジ

こんにちは。  
絵の人です。  
7巻になりましたよ？

ところで、今日の引き。  
あれはとってもズルイと思います。  
最後のなになにー！？  
そんな訳で、次巻読みたいです。  
あとスコードロンさん達も描きたい。





マシンドール  
**機巧少女は傷つかない7**  
Facing "Genuine Legends"

発行	2011 年 12 月 31 日 初版第一刷発行
著者	海冬レイジ
発行人	三坂崇二
発行所	株式会社 メディアファクトリー 〒153-0002 東京都渋谷区渋谷 3-3-5
印刷・製本	株式会社廣済堂

©2011 Reiji Kaito  
Printed in Japan ISBN 978-4-8401-4336-3 C0159

※本書の内容を無断で複製・転写・放送・データ配信などを行うことは、固くお断りいたします。

※定価はカバーに表示しております。

※私了本・盗了本はお取替いたします。下記カスタマーサポートセンターまでご連絡ください。

※その他、本書に関するお問い合わせも下記までお願いいたします。

メディアファクトリー カスタマーサポートセンター

電話 0570-002-001

受付時間 10:00～18:00(土・日、祝日除く)

**【ファンレター、作品のご感想をお待ちしています】**

あて先 〒150-0002 東京都渋谷区渋谷 3-3-5 NBF渋谷イースト 株式会社メディアファクトリー  
MF文庫J編集部宛付 「海冬レイジ先生」係 「あるお先生」係



左記より本書に  
関するアンケートに  
ご協力ください

★お答えいただいた方全員に、この書籍で使用している画像の無料権利を受けプレゼント! ★サイトにアクセスする際や、登録・メール送信時にかかる通信費はご負担ください。 ★中学生以下の方は、保護者の方の了承を得てから回答してください。